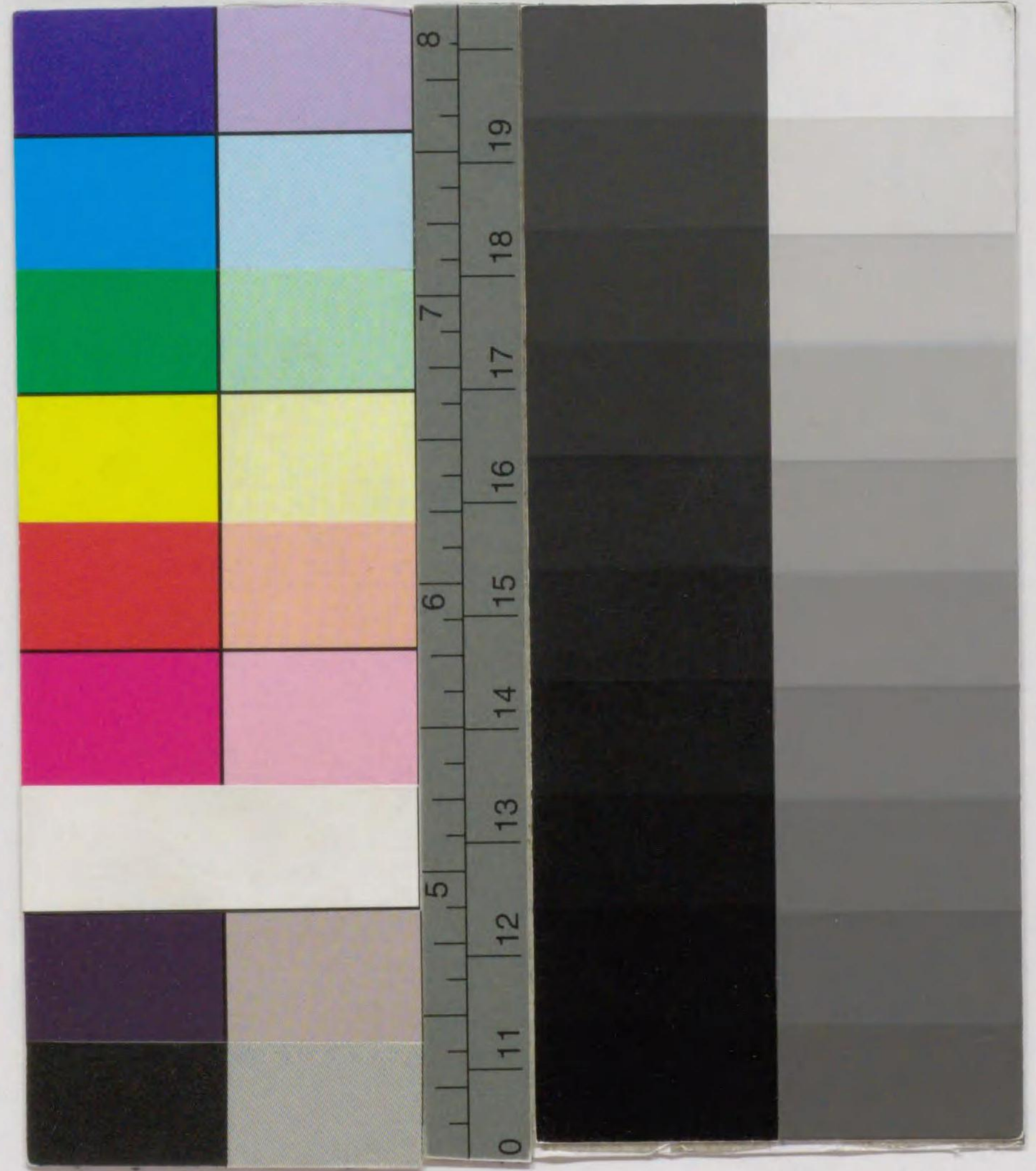


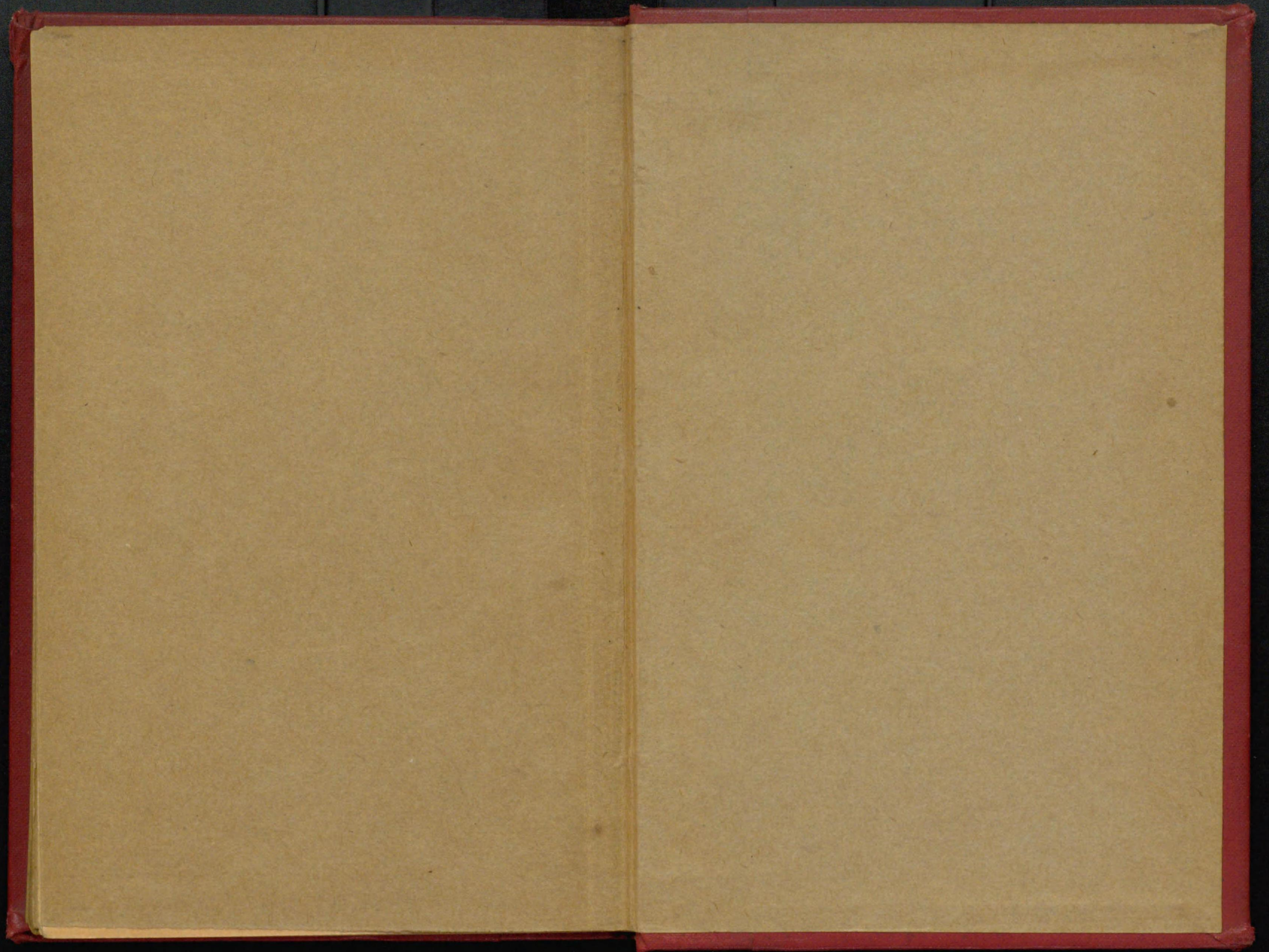
569-14



1200501516826

口
複
写





569

14

納本

岩波文庫

1389—1390

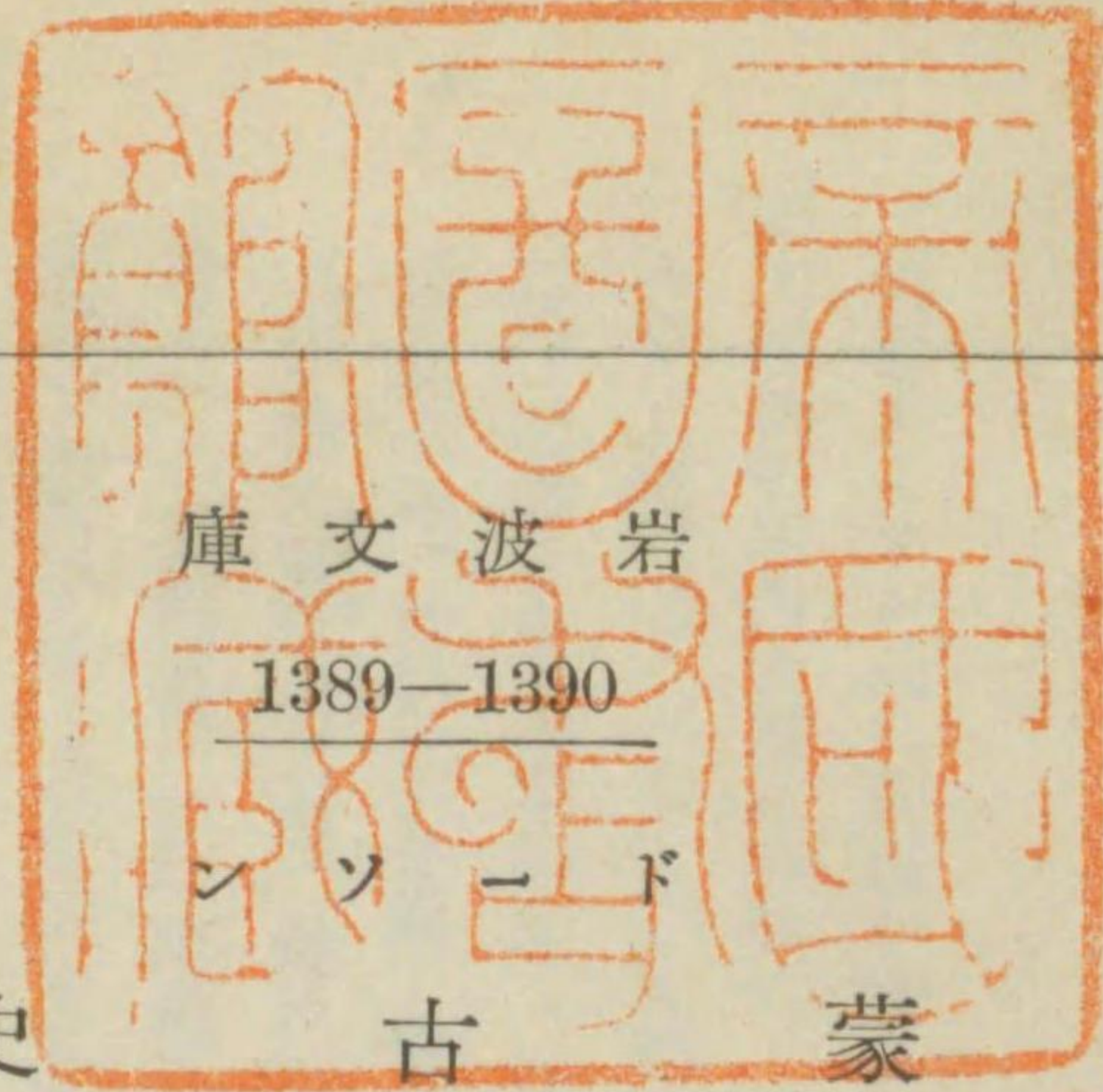
ドソソ

蒙古史

上卷

田中萃一郎譯補

岩波書店



岩波文庫

1389—1390

下 一 ソ

蒙古史

上 卷

田中萃一 郎 譯 補



岩波書店



序

男爵ドーソン氏の著書が歐文蒙古史のうちにおいて最も典據となすに足る可きは、洪鈞撰元史譯文證補引用西域書目の條に、左の如く記せるを見て以て之を知る可し。

多桑。歐羅巴人。不詳其著籍。通亞刺比土耳其等文字。著有土耳其史蒙古史。嘉慶年間成書。其蒙古史。道光初年。重刊於和蘭。又重刊於法京巴黎。自多桑書出。西人考三元事者。接踵迭起。皆稱引多桑。先求其書。不可得。得今英人霍渥兒特書譯之。意未安也。

復譯德人華而甫之書。繼於德國藏書官舍。假得多桑舊本。譯以互校。乃知華而甫書。好逞臆見。引述舊說。往往改易失真。霍渥兒特書。本於多桑。而蒐獵過繁。胸無斷制。異說叢積。輒自矛盾。求述作之才。於侏儻之文亦大難矣。書中補傳。悉本多桑。閒引他說。洪鈞の研究に従へば、即ちホワース、ウォルフの著書は共にドーソンに若かざるなり。

ドーソン男は名を Constantine Mouradgea といひ、その先アルメニア人にして、西紀一七八〇年頃コンスタンチノープルに生れたり。父を Ignace Mouradgea d'Ohsson と呼べり。このイグナース・ムーラヂア・ドーソンはアルメニアの一家族より出で、西紀一七四〇年を以て

569
14

コンスタンチノープルに生れたり。父は商估にして曾てスマーナに於て瑞典國の爲に領事の任に當りしが、イグナース・ムーラヂアは土都なる瑞典大使館の書記官兼一等通譯官を勤め、西紀一七八二年土廷駐劄瑞典國辨理公使に任ぜられ、且ワッサ士爵に擧げられたり。その後佛京巴里に赴き更にウイーンに至りしが、西紀一七九五年土廷駐劄公使に進められ、西紀一八〇七年八月二十七日を以て佛國に逝けり。著書あり題して『オットマン帝國誌』と云ふ、前後七冊の大著述にして世の好評を博せり。西紀一八三四年にローンヅのものせる英文書籍解題に左の如く記せるはこの書の第一冊なり。

史 古 蒙
D'Ohsson, M. de M.—History of the Ottoman Empire, translated from the French.
Lond. 1798. 4 to. Vol. 1. with a folio atlas of plates. A good translation. —An
edit. 8 vo. 2 vols.

コンスタンチン・ムーラヂアは土耳其語、亞刺比亞語、波斯語、アルメニア語に通じ、王立ストックホルム科學美文學院會員王立ウプザラ科學會々員に擧げられ、蒙古史の外になほ

Des peuples du Caucase et des pays au nord de la Mer Noire et de la Mer Caspienne dans le Xe siècle ou voyage d'Abouel Cassim. In-8°. 1827 XXII, 284 pp.
著ちり、又駁之の理並に係る『オットマン帝國誌』をも完結せしめたり。且外交官としても父

を輔佐し共に巴里に滞在すること數年、次で西紀一八一四年ハハ駐在瑞典國使臣に擧げられ、更に西紀一八三四年を以て伯林駐在を命ぜられ、西紀一八五五年を以て任地に逝けり。

ドーソンは蒙古史新版の印刷のときその巻頭に題して曰く

L'Histoire des Mongols, depuis Tchinguiz-Khan jusqu'à Tamerlan の第一冊は一八二四年に巴里に於て出版せられたり。第二冊以下稿成りて之を印刷に附するに際し、第一冊の原稿は著しく増補せられたるが故に、著者は新版の發行を必要なりと感ずるに至れり。この新版は本書の最初二冊を含む。

序
と。西紀一八二四年は道光四年なり。而して前記題言に所謂新版の發行されたるは西紀一八三四年(道光十四年)にして、發行書肆は La Haye et Amsterdam, Les frères Van Cleef なり。全部の再版は西紀一八五二年を以て Amsterdam の Frederic Muller より出版されたり。この譯本は即ちこの五二年版によれり。

本書は第一冊に於て成吉思汗の事蹟を敘し、第二冊に於て元末までの蒙古の盛衰を説き、第三第四の兩冊は之をイル汗國の沿革に委ねたり。その價值は全く Raschid の著述をはじめ、亞刺比亞文、波斯文、土耳其文等の史籍二十有餘種を参照せるにありて存す。但し洪鈞は哈木耳 (Geschichte der Ilchane の著者 Hammer-Purgstall) 譏多桑所著西域人名。有二三字二者。

多作_中屋丁_上。謂。哀丁之解爲_レ信_ニ奉_ニ教_ニ理_ニ。有_レ丁必有_レ哀。若作_ニ屋丁_一。則抹_ニ煞_ニ哀_ニ字_ニ音_ニ矣。曾訪_ニ波斯使臣_一。其說良然。並當_レ云_ニ哀而丁_一と云へり。例へば Quatremère のラシッド譯本には現に Raschid-Eldin と記せり。而も Huart の亞刺比亞文學史には Raschid-eddin とあり、哀而丁約して哀丁と云ひて不可なし、而して屋丁 uddin とあるは亞刺比亞語によりしものなり。支那文はドーソン之を讀むこと能はざりしが故に、支那の史籍は左の數種の歐文書籍によりて、間接に之を參考せるに過ぎず。

Mailla. — Histoire générale de la Chine, ou Annale de cet Empire; traduite du

Tong-Kien-Kang-Mou, Paris, 13 vol, in-4°, 1777—85.

Gaubil. — Histoire de Gentschiscan et de toute la dynastie des Mongous ses successeurs, Conquérens de la Chine, Paris, MDCCXXXIX, in-4°.

Hyacinthe. — Histoire des quatre premiers Khans de la maison de Tchinguiz-khan. (露文) St. Pétersb., in-8°, 1829.

Schmidt. — Geschichte der Ost-mongolen von Sanang-Ssetsen, Pétersb., in-4°, 1829.

第一の Mailla 支那史は通鑑綱目の翻譯にして、宋元時代の部分は明の商輅、萬安等の撰述せる續資治通鑑綱目二十七卷によれり、この續綱目は成化十二年十一月十五日付の御製の序あり、その記事周恭帝六年より元惠宗至正二十七年までに互れり。Gaubil は元史類編を底本とし、Hyacinthe は同書并に二十四史中の元史を參照して成れり。元史類編は一名を續宏簡錄と云ひ、清の康熙三十八年邵遠平の繕表進呈せるものなり。又第四の Schmidt は蒙古文と獨譯文とを對照して出版せる珍書にして漢文の書は題して蒙古源流と云ひ、乾隆四十二年小徹辰薩囊台吉(薩囊薛珍)の勅を奉じて譯進せるものこれなり。元朝秘史、親征錄等はドーソン未だ之を參照するに及ばざりき。故に洪鈞はドーソンが成吉思汗西域の師を敘するに際し、専ら詳細なる Djouvéini の記事を取りてラシッドの紀年を斥け、爲に年分の親征錄と合はざるに至りし次第を述べ、且その東歸の紀年に就きて、按。邱長春西遊記云。壬午八月二十七日。從_ニ車駕_ニ北回_一。九月朔。渡_ニ河橋_一而北。九月杪。已至_ニ邪米思干_一。壬午爲_ニ太祖十七年_一。是此年即凱旋矣。乃多桑書。是年仍在_ニ印度河上游_一。次年欲_レ從_ニ印度_一東入_ニ梯伯特_一。以征_ニ西夏_上。而山高林深。險巖難_レ進。乃改_レ道仍回_ニ八米俺_一。以踰_ニ印度山_一。冬駐_ニ撒馬爾干_一等語。梯伯特即西藏。蒙古源流作_ニ土伯特_一。考其自注。未_レ言_レ本_ニ自何人_一。但引_レ中國元史謂_ニ成吉思汗至_ニ東印度_一。角端見乃班_レ師。玩_ニ其詞意_一。蓋爲_ニ元史所_レ誤。而二十年正月還宮。則拉施特與_ニ他書_一。所_レ紀年分相同。在途歲月過_レ多。無_ニ事可_レ叙。乃牽_ニ引元史_一。以_レ意附會。不_レ知_ニ元史此說固不_レ足_レ憑也。多桑著_レ書時。元史已有_ニ譯本_一。西遊記時尙未_レ譯。故有_ニ此誤_一。今並刪去。而以_ニ西遊記與_ニ拉施特所_レ言爲_レ本。庶爲_レ得_レ實と評せり。

最後にこの譯本に於ては固有名詞は努めて佛文の原語を用ゐ、之が漢字は洪鈞の譯書を參照して挿入したり。脚註は本文のうちに收め卷末の註も亦之を削除せず、但し參考書名を原序に記せるイロハの符號を以て示せる等、その意を害せざる限り註釋は節略を試みたり。但し譯者の遺憾とする所は本文訂正の意を以て加へたる頭註不充分なることにして、篤學の士に向ては故那珂博士譯成吉思汗實錄によりて之を補はんことを望まざらんばあらず。東邦の研究益々盛ならんとする今日、本書の如きも亦冀くは大方の誘掖によりて完成の日に値はんことを。

明治四十二年四月二十一日

譯者識

原序

亞細亞の大半と歐羅巴東方の諸國とは、第十三世紀に於てタルタリーの民によりて征服され蹂躪されたり。この時に當りてや從來相反目せる幾多遊牧の民は同一軍旗の下に集まり、恰も江河の決するが如く傍近の諸國に入寇して掠奪を縦にし、淋漓たる鮮血を以て之を蔽ひ、慘憺たる廢墟をその跡に残せり。犖猛にして且争鬪をこととせる這般遊牧の民を制御し得たるの人物は、實に貝加爾湖東南幹難 Oran 克魯倫 Kéroulan 土拉 Toula 諸河の發源せる高山地方にありて、一處不住の生活を營める寒族の首領たるに過ぎざりき。この首領はその名を鐵木眞 Témoutchin と云ひ、蒙古諸部の部長が互に覇權を得んとして擾亂止むなく相奮鬪せる時に際して、甚く運命の翻弄する處となりしも、遂にその敵手を仆し盡すを得たり。蒙古諸部の部長多くその制令を奉ずるや、鐵木眞は次第に爾餘タルタリーの部族を従へ、皇帝の位に即きて成吉思汗 Tchinguiz-khan と稱せり。當時タルタリーの部族は北方支那の君王に對して外藩たりしが、成吉思汗は之に朝貢せん抔とは思ひもよらず、親ら多數の騎兵に將として進んで右の帝國を侵し遠く黄河の岸に至れり。かくて巨額の戦利品を鹵獲して一度支那の地を去りしがこれ固より他の方面に征服を

試みんが爲のみ。中央亞細亞は成吉思汗の法律を奉ずることとなり、トランスオクシアナ花刺子模 Khorazme 波斯皆滅亡せり。成吉思汗の軍は一方に於ては支那にありて交戦を繼續せしが、他方に於てはインダス河エウフラテス河の河畔を屠り、グルジアを経て黒海の北岸に入りクリミアを侵し露國の一部を掠め、上ヴォルガの河岸に於てブルガル人を襲へり。

波斯を蹂躪せる後成吉思汗は復びタングート Tangoute を侵し、曾て支那の一部を構成せる領土にその國を建てたる同王國の民を破りしが、之が征服の半にして病を獲、諸子を集めて世界經略のことを遺言し遂に復た起たざりき。

成吉思汗の後二三代にして、蒙古人は裏海、カウカサス山脈、并に黒海の北に位せる地方にその居を定め、露國を劫掠して二世紀間桎梏の下に呻吟せしめ、波蘭、匈牙利を蹂躪し、チグリス河并にエウフラテス河々畔アルメニア、グルジア、小亞細亞を征服し、バグダードのハリフハ朝を仆し支那全部西藏は勿論、印度の一部をも占領して恒河の彼岸に達し、成吉思汗の死後半世紀ならずして遺言は遂に果され、その子孫は殆んど亞細亞の全部に君臨するに至れり。

この帝國はその版圖廣きに互り、一人の君主の能く統治し得る所にあらざるより、四王國に分割せられぬ、即ち支那と西藏とアルタイ山脈以東のタルタリーとは成吉思汗の繼承者の直轄地を組織し、第四代目に至りてその首府を現時北京と稱する都會に定めたり。この支那皇帝の附庸として蒙古人の建てたる王國三、何れも成吉思汗の子孫を戴きて國君と爲せり。アルタイ山西よりアム河 Djihoun 地方に至るの諸國は察合台 Tchagatai 家の領土を構成し、裏海并に黒海の北方に連互せる諸國は朮赤 Djoutchi の子孫に服従し、而して最後に波斯に君臨せる君侯は支那皇帝と同じく、成吉思汗の末子拖雷 Touloui の後裔なりき。この三附庸國の國王は何れも北京朝廷より冊封を受けたり。

この四王國には即ち分裂の萌芽の存するあり、且迅速なる勢を以て發達せるより、遂に蒙古人は復た侵略に従事する能はざるに至れり。その權勢の盛んならんとするや、上下の別明かに且能く統一を保ちて充分にその威力を發揮するを得しも、一度征服せる領土に君臨することとなるや、王位相續の争は成吉思汗の子孫の間に數々干戈を動かさしむるの原因となれり。最上權は即ち成吉思汗の宗家に屬すと雖も、長子は敢て壟斷するの權を有せず、候補者に就て撰擇を行ふものは即ち皇族なりき。成吉思汗の法制に従へば、皇族總會を開きて以て新皇帝を選擧せざる可からず。皇帝の政權は、之が同意と之が神聖なる承認とを経て、始めて適法と認めらるるなり。成吉思汗の子孫は忽ちにして非常にその數を加へしが、何れもこの特權を有するが上に大國を領し、且強兵を擁せるを以て、帝位の争起る毎に必ず干戈を執て互に相戦ひ、或はその黨する處に盡さんとせざるはなし。察合台王國の歴史も將た又朮赤王國の歴史も全くこの骨肉相食める殘忍なる

争闘の記事より成れり。而して彼は第十四世紀の中葉に於て、是は第十五世紀の終に於て、共に國祚絶えたり。

内亂の結果一三三六年頃、又波斯に於ける成吉思汗の子孫をしてその政權を失はしめたり。支那よりその帝室の撃退されしは一三六八年にして、今や蒙古の大帝王の後裔は僅に中央亞細亞の遊牧民族を統御せるのみ。

蒙

蒙古人の征服は亞細亞の局面を一變せり。幾多の大帝國は仆れ、幾多の舊王家は滅び、幾多の國民は或はその踪跡を失ひ、或は殆んど消滅し去り、蒙古人の足跡を印する處唯廢墟と觸體とを見るのみ。残忍なること最も野蠻なる人民に超えその征服地にあるや、男女と孩提とを問はず冷然之を屠り、火を都市と村落とに放ちて之を焦土となし、作物を蹂躪し肥沃なる樂園を化して沙漠と爲せり。而もこれ憎惡の念若しくは復讐の情に驅られたるが爲にあらざ、その剿絶せる國民の名稱さへも之を詳にせざりしが如し。若し夫れこの點に關して各國の歴史その揆を一にせずんば、思ふに世人は歴史の記する處、蒙古人の殘虐を誇張せりと信するならん。

史

一度征服のこと成るや、蒙古人は被征服國民のうちなほ生存せるものある時は之を奴隸となし、その白刃の災禍を免れたるものは、即ち残忍なる壓抑の下に呻吟するあるのみ。蒙古人の政府は邪惡の勝利を示すものなりと云ふ可く、高尚なるもの光榮あるものは悉く斥けられ、最も賤陋なる人物はこの悍猛なる主人に仕へその卑む可き勤勞の報酬として貨財を貯へ、名譽を貪り同胞を壓抑するの權利を得たり。

原

蒙古人の歴史はその蠻行の記録なれば、恐る可く厭ふ可きの記事たるに過ぎず、而も爾餘帝國の歴史と密接なる關係を有するが故に、第十三世紀、第十四世紀の大事事件に通曉せんとせば、是非共之を知らざる可からず、之を研究するに方り参照し得可き史料は決して乏しからず。蒙古人自らその事蹟を敘述せるの記録を遺さずとも、その征服せる諸國の史記は假令記事の不備なるを免れずとは云へ能く之が缺を補へり。殊に歐洲語に翻譯されたる支那の歴史の如き最も重んず可し。支那にては幾世紀以前より學藝夙に發達し、就中常に人類の知識のうちにありて歴史の研究に重きを置けるが故に、蒙古人征服の時代并に統御の時代に關し、無數の史料の存するものなくんばある可からず。支那の年代紀には實に蒙古朝諸帝の詔勅を下して編纂せしめたる重要な史籍のことを記載せり、例へば成吉思汗、窩闊台 Ogotai 拖雷 Toulou 貴由 Couyouc 并に蒙哥 Mangou の年代紀なる Tsien-pien 大徳七年十月庚戌翰林國史院進太祖太宗定宗憲宗五朝實錄(校者曰く、馮承鈞譯多蒙古史には Tsien-pien を譯して前編とあり。) 蒙古の習慣并に成吉思汗朝諸帝の下したる規範を蒐集せる經世大典 King-chi-ta-tien 天曆二年勅撰 同王朝の下に發布せる法律を編纂せる大元通制 Tai-Yuan-tong-tchi 至治三年勅撰 等の書名散見すと雖も、吾人は今や唯僅に續宏簡錄 Sou-houng-kian-lou 一名元史類編 邵遠平撰 并に續通鑑綱目 Thoung-

序

kian-kang-mou 商鞅萬安等撰と題する二種の史略の内容を知れるのみ。この兩書は(イ) Gaubil (Histoire de Gentschiscan et de toute la dynastie des Mongous ses successeurs, (ii) Mailla (Histoire générale de la Chine) 并に(ハ) 大法主 Hyacinthe 成吉思汗家初代四汗之歴史(露文)の著書中に翻譯されたるが、續宏簡録は殊に記事の乾燥無味なると事件の間に連絡を缺けること著し。露國、波蘭、匈牙利等の歴史家の撰述に於てはその自國の戰敗に關する主要なる史實を釋ぬるを得可し。又第十三世紀に於て中央亞細亞を旅行せる歐洲人はタルタリー遊牧民の風俗習慣に付き、興味多き詳細の記事を吾人に傳へたれども、而もその史記によりて最も富贍なる且最も貴重す可き史料を吾人に供給するものは、即ち波斯人、亞刺比亞人なりとす。その蒙古人に關する著書のうちにて特に佳なるものは、王立巴里文庫の豊富なる東洋寫本部に藏せられたり。この史籍とライデン文庫の所藏に係る同種の書籍とは、自由に吾人の參考に供するを得たり、吾人は兩文庫の好意を謝するの辭なきを思ふ。這般の史籍は世人の擧て參照し得可きものにあらずるが故に茲に簡單なる解題を掲げ、以てこの書の本文に於ては直ちにその表題を記載することなさん。

回教國の著作家中、始めて蒙古人に就きて記述せるは、Yzz-ud-din Ali Ibn-ul-Ethirなるが如くその著萬國史は

(ii) Kamil ut-Tévarikh 即ち Histoire complète (王立巴里文庫亞刺比亞文寫本)と題し、筆を世界の創造に起して回教紀元六二八年(基督紀元一二三一年)に結べるが、その第十二冊に於て蒙古人の記事を見るを得可し。即ち六一七年(一二二〇年)以下の條にトランスオクシアナ、波斯地方、チギリス、エウフラテス河畔、グルジア、并にカウカサス山脈北方に於ける蒙古人交戰の記事否寧ろ劫掠の記事あり。著者は當時モスル Moussoul に住ひたれば、波斯の西方に起れる事件に就きて正確なる知識を得るの位地にありき。亞刺比亞文を以て述作し、その文體は平易にして時に鹵莽の嫌なきにあらずと雖も、その記事は信を置くに足る可きものあり。

Ali Ibn-ul-Ethir は五五五年五月四日(一一六〇年五月十三日)を以てチギリス河畔の Djéziré に生れ、長じて小侯國の首府なるモスルにその居を定め、幾度か君命を奉じてバグダードの朝廷に赴けり。回教の歴史神學に精通し、その史記は良好なる史籍のうちに數へられたり。博學にして祇虔なると同時に又謙讓の譽高し。六三〇年八月(一二三三年五月)にモスルに於て逝けり。王立巴里文庫藏 Ibn Khalecan 撰 Vahat-ul-Ayam 人名辭書に據る

王立巴里文庫には、Kamil ut-Tévarikh 六冊即ちその後半を藏す。この書の良解題は、Mischoud 氏の『十字軍書史』第二冊のうちにあり。

(ホ) Sirét-us-Soultan Djéjal-ud-din Mangoubirti 即ち『支丹 Djéjal-ud-din Mangou-

birthi の傳』 Ahmed el-Nessaoui (Nessa の人) の子 Schihab-ud-din Mohammed 撰。
 (巴里文庫亞刺比亞文寫本)

支丹只拉兒哀丁 Djelal-ud-din は花刺子模帝國土耳其朝最後の君なりき。父謨罕默德 Mohammed は成吉思汗がトランスオクシアナ并に波斯に入寇せる當時恰も此樂園に君臨せしが、勝ち誇れる蒙古兵が息をも繼がず追跡せるより裏海の一小島に避難し、數日の後同地にありて不歸の客となれり。只拉兒哀丁は印度に出奔せしが、成吉思汗東歸の後再び波斯に至り、政權を回復するを得たり。次で四隣に攻撃の鋒を向け、隣國をして暫くも枕を高うすることを得ざらしめしが、臆て蒙古軍のタルタリより來寇するあり、自ら防禦に腐心するの境遇に陥れり。而も敵兵の勇猛なるに怖れ、忽ちに奔竄してクルド山脈に匿れしが、遂に賊徒の殺す所となれり。

史 古 蒙

この興味ある傳記の作者は、ホラサン Khorassan の北方 Nessa 市附近に位せる Kharendar 城の城主にして只拉兒哀丁の印度より歸れる後間もなく、書記として之に仕へたりと云へり。曰く『余がこの職に就けるや衷心嫌忌の情なきにあらざりき、而もその報酬の充分なるより余は敢て甚しく就職を躊躇することを爲さざりき』と。次で Nessa の知事に任ぜられしが府中を去る能はざるより勅許を経て代官をしてその事を行はしめたり。

只拉兒哀丁の治世は僅に六箇年に過ぎざりしが、當時その書記は種々の重要な任務に當れり。

原 序

而して支丹が Amid 附近に於て蒙古兵に襲はれたるその不幸なる夜に於ては、實に支丹の左右に侍せり、支丹は暴飲の結果全く精神錯亂し敵兵を避けて出奔せしが、遂にクルド人の手に仆るに至れり。謨罕默德 Mohammed 曰く『余はその夜の大半を文書堆裏に費し文案に努めしが、臆て安眠の快樂を貪らんとするや、從僕は余の眠を破りて叫んで曰く、萬事休せりと。余は倉皇衣服を纏ひて立ち出で、あらゆる所有物を擧げて之を委棄して馬に跨り僅に身を以て免れたり。徒だ見る支丹の大纛は、既に韃韃騎兵隊の圍む所となれるを。三日間洞窟のうちに潜伏せる後、余は Amid に至れり。二箇月の終に至りて余は漸くこの町より出立して Erbil に赴き、次に Azerbaïdjan に向ひしが、余は悉く所有物を奪はれたり、されど余はなほ一縷の望を抱けり、何となれば余が過ぐる處道路相傳へて支丹はなほ死せず、將士を糾合しつつありと説かざるはなく、余は數々此の風説を耳にしたればなり。空なる希望を待みて生れ出でたる蜚語なりしよ。遂に Méyafarékín に至りて余は支丹の訃音を確むるを得たり。茲に於て余は人生を味氣なく感じ、命數に満足すること能はざるを悲み、進んで我餘命を君侯に獻じ、余は僅にその小部分を保つ可かりしをと悔めり。

『支丹殂落の後數年を隔てて余は一の史籍を手にせり、この書は謨罕默德 Mohammed の子にして、Ibn-ul-Ethir と云へる名を以て世間に知られたる Ali の撰述に係り、題して Kamil

(全史)と呼べり題名宜しきを得たりと云ふ可し。この萬國史は支丹謨罕默徳の治世の事蹟に就きても、將た支丹只拉兒哀丁チエラルエツヂンの治世に於ける一二の事蹟に就きても、先づ完全に且正確に敘述を試みたるが如し、但し余が彼の運命に翻弄せられたること遙に父王の上に出でたる支丹只拉兒哀丁チエラルエツヂンの爲に傳記を起稿せんと思ひ付けるは實に右の萬國史を繕ける際のことなり』。

Nessa の謨罕默徳の撰述は之を百八章に分ち、筆を花刺子模帝謨罕默徳の治世の晩年に起し其子支丹只拉兒哀丁チエラルエツヂンの治世を敘して以て六二八年(一二三一年)に於けるその殂落の時に及べり。著者がこの書を起稿せるは六三九年(一二四一年)にしてその實見せることとその時代に波斯に起りたることを詳細に描寫せり。これ回教文學にありては多く見ざるの長處なりと云ふ可し、何となればその年代紀作者の多くは、この書の著者が自敘のうちに説けるが如く、單に從來の記録をその儘反覆するに過ぎざればなり。謨罕默徳は充分に觀察し得るの位地にありしを以て、その備忘録とも稱す可きこの著作は蒙古人に就きては、單に筆端之に敘及せるに過ぎずと雖も頗る興味あるの論評に富めり。その敘述の自然に出でて毫も修飾を施さざるは、却て吾人の下に紹介す可き二種の史籍に比して吾人の信用を博し注意を喚起するものあり、蓋し次に掲ぐる兩書を編纂せる作家は何れも文才を具へ、敢て史實の真相を傳ふるの意なく、且讀者の精神に快樂を與へんことを思はず、只管その聽覺に訴へんことのみこれ汲々たればなり。

() Tarikh Djihankuschai 即ち『世界征服者之歴史』。Alai-ed-din Atta-Mulk Djouvéini (即ち Djouvéin の人) 撰。(王立巴里文庫、波斯文寫本)

この書は之を二編に分ち、第一編には先づ成吉思汗の晩年十年間の事蹟を敘し、殊にトランスオクシアナ并に波斯征服の記事は詳備を極む。(次に二代窩闊台、三代貴由在位中の史實を記述せり、一章には畏兀兒人のことを他の一章には西遼 Cara-Khitai 汗國のことを説く。又花刺子模帝國土耳其朝の歴史全部、并に成吉思汗東歸の時よりその孫旭烈兀 Houlagou の波斯地方の實權を握れる時代に至るまでの、波斯に於ける蒙古代官の歴史も亦この第一編のうちにあり。

第二編は皇帝蒙哥の選舉に始まり、單にその治世に於ける初年の事實を敘述せるのみ、されど旭烈兀の波斯遠征并にその阿剌模忒 Alamout の Ismailiyens 國征服の記事はこれを收む。その短刀の能く四隣を威服せるこの Ismailiyens 國滅亡のことを敘するに際し、著者は簡單に Hassan Sabbah 以來の波斯に於ける Ismailiyens の歴史を説き、且之に先ちて埃及に於ける Ismailiyens ハリフハ朝の小史と Schiyyis 派の支流なる Battiniyens 派の起源とを添ふ。

『世界征服者之歴史』は即ち筆を回教紀元六五五年(一二五七年)に止めたれども、その著者は六八一年(一二八二年)まで存命なりき。Alai-ed-din はホラサンの Djouvéin 郡に生れ、二十年間蒙古代官の下に波斯の財務行政を掌れる官吏 Bohai-ed-din Mohammed の子なりき。

その自ら記する處に據れば、生れて二十年ならずして仕官して父の事務を輔け、六五〇年（一二一五年）に Bohai-ed-din が波斯の蒙古代官たりし長官 Argoun と共にタルタリーに旅行を試み、皇帝に選ばれたる蒙哥に朝貢の禮を執りしときは之に隨行せり。Argoun は舊の如く太守の職に任ぜられ、Bohai-ed-din を波斯財務長官に進め、翌年相携へて波斯に歸りしが、歸國の後間もなく Bohai-ed-din は六十歳を一期として逝けり。Alai-ed-din は思ふに父の職を襲ひしなる可く、六五四年（一二一五年）に旭烈兀の波斯に至れるとき、皇帝の許に召喚されたる代官 Argoun は勅命施行のことを監督せしむるが爲三人の官吏を薦めしが、Alai-ed-din は即ちその一人なりき。次で旭烈兀が Ismailiyens に對して遠征を試みたる當時はその大本營の幕賓たりき。弟 Schems-ud-din Mohammed は六六二年（一二六四年）に擧げられて旭烈兀の宰相となり、Alai-ed-din はバグダード縣知事となれり。バグダード縣は Irac Aréb と Khuzistan とを包括せり。翌年阿八哈 Abaca がその父旭烈兀の位を襲ひし後もなほこの收利多き官職を保ち、以て六八一年（一二八三年）臨終の年に及べり。勿論蒙古帝王の下に國庫の管理に參與せしものは何れも無慘なる運命の醜弄を免かれざりしこと本文に述ぶるが如くなるが Alai-ed-din も亦その數に漏るる能はざりき。

その地位を思ふ時は Alai-ed-din が自由に史筆を振ふ能はざりしや固よりその處なり、而も

この史家は却て我祖國を根底より滅却し、更に回教諸國に對し依然として掠奪壓抑を事とせる蠻族の爲に進んで讚美の筆を弄し、成吉思汗并にその子孫のことを語るや只管崇敬を極め、殊に皇帝蒙哥に對しては、有らん限りの誇張的形容詞を排列してその徳を稱せり。否、更に一步を進めてその序文に於て、蒙古軍の回教諸國を蹂躪せるは必要缺く可からざるの不幸にして、却てそのうちに宗教的利益と現世的利益の潜在するを見る可しと云へり。

その言に曰く『知れ、現世の幸、不幸は等しく神意の結果として來るものにしてあらゆる裁斷は深奥なる靈智と嚴正なる正義とに基きて下さるるものなるを。國民四散し善人衰へ悪人榮ゆるが如き最大災禍も、亦この深奥なる靈智によりて判斷するときは、必要缺く可からざるの次第は、不可思議なる方便によりて世人の感知する處とならん、されど六世紀の終に當り外國人の入寇により、我宗教は西洋并に東洋の極處まで傳はる可しと云へる我等の豫言者の託宣を完つせるの事實は我等の觀察し得可き處、親しく世人の視覺に訴ふる處なりとす。神意を測るに即ち外國軍隊の入寇を利用してコーランの軍旗を高く翻へし、その光明を再び赫灼たらしめ、以て回教の靈香の未だ薫らず tekdir 并に ézann の妙音の未だ聞えざる地方に信仰の日光を照さしめんとするにあるが如し。今や既に右の東洋地方に於て多數回教徒の定住するものあるにあらずや。或はトランスオクシアナ、ホラサン地方より捕虜となりて同地方に赴き、職工若しくは牧者としてその

職に従事せるあり、或は徵發せられて同地方に移住せるあり、又商業を營み財産を得んとして西洋より同地方に至れるもの多數は、その住居を定め家屋旅亭を建て偶像寺院の傍に回教寺院と學院とを設立せり。加之、奴隸として回教徒の有に歸したる邪教徒の小兒は回教の信仰によりて教育せられ、偶像信者は進んで回教に改宗し、最後に成吉思汗家の王族の多くは我等の宗教を奉じ、その臣下とその軍隊とは亦之に倣へり。』

著者は次に蒙古人が服従せるものに對して寛仁なりしとて之を賞讃して毫も耻ぢず、但しそのあらゆる宗教の自由を許し、各宗教の僧侶寺祿、寄進に全く課税せざりしことを頌へしは一理なきにあらず、かくて結論すらく、須らく蒙古人に服従せざる可からず、豫言者の語に曰はずや、
注。意。し。て。土。耳。其。人。を。怒。ら。し。む。る。勿。れ、怖。る。可。き。も。の。あ。れ。ば。な。り。と。

Alai-ed-din は幾度か自ら犯せる罪によりて天罰を招けるが、Mahomet はその信徒の爲に天帝に向て、他の國民を惱まし給ふが如き不幸を脱れしめ給はんことを哀訴し、回教徒には長劍の災禍を除くの外あらゆる種類の破滅を下さじ、との約束を得たりとて扱曰く『この長劍を以て罰する方法なくんば、實に世間の甚しき放逸を匡正すること不可能なる可きや明なり、少數の善人は多數の悪人によりて壓抑さるるならん。かかる例外の場合あるは結局神の從僕シモベの幸福なるを見る可し。かくて回教紀元第七世紀の初に當りて Mahomet の信徒の現世の快樂に耽りて腐敗

を極むるや、神はその鹵莽なる行爲を罰し後世子孫に嚴しき教訓を與へ、以て回教に新光明を添ゆるが爲に敢て復讐者の腕に武装せしめたり、されど神はその慈悲心を示すに於て決して踟躕し給はざりき。恰も良醫が相當なる處方によりて人體を惱ます處の病毒を救治するが如く、上帝のその民を復活せしめんとするや、即ちその性質に合ひたるの方法を採用し給ふ。』

著者の自ら記する所に據れば、その友人の勧誘を受け専ら皇帝蒙哥の大功業を後世に傳へんとしてこの歴史の編纂を思ひ立てるは、六五〇年（一二五二年）に蒙哥の朝廷に滞在せるときのことなりしと云ふ、されど初よりその事業の困難なるを感ぜりとて曰く『蓋し良師の助を受くるにあらずんば、何人も亦學問文藝に於て熟達を望む能はざるものなるに、今や世界を轉倒せるの革命に於て學院は滅却し盡され學者は屠殺されりぬ、殊に豫言者の説に學問は即ち樹木にして樹根はメッカにあり菓實を結ぶはホラサンにありと云へるが如く、學問の中心碩學の淵藪たりしホラサンに於て然りとなす。この地方に於て文字あるの人物は悉く白刃の下に仆れ、之に代れるものは微賤より出でたるものにして、唯畏兀兒語と畏兀兒文字とを解するのみ。官吏はその位階の最も高きものも亦皆最下等の出身にして、窮餘の徒の一朝にして富裕の身となりしもの多く、詭計を弄するものは皆或は王侯となり或は宰相となり、鐵面皮なるものは悉く權勢を握り、奴隸は變じて首長となり、頭に博士のターアバンを纏ふものは何人にも博士視され、素性の明ならざる

もの貴族となれり。學問衰退し道義地を掃ふの時代は即ち無智の勢力増進し、腐敗の益々横行するの日にして誠實なるものは悉く蔑視され剛愎なるもの悉く信用を博するの次第なれば學問と文藝とが如何に奨勵を得難きかを知るに足らん。』

蒙古人が來て回教徒を屠れるは却て回教徒の幸福なりとの旨を辯明せる前段の議論とは柄鑿相容れざるこの酷評を試みたる後著者は云へらく、二十七歳の時までは職務多忙にして餘暇乏しく爲に有益なる知識を得る能はず、且不幸にして實父の注意によりて益を得ることなくして止みしが、年稍々長じて理性の熟するに従ひ努めて徒に過せる光陰を償ひ、且又あまた度トランスオクシアナ、土耳其斯坦は勿論更に東方の諸國に旅行を試み某々の出來事に就ては自ら之を目睹し而して他の出來事に就ては能く之を熟知し而もその言の信ずるに足る可き人々の談話を蒐集せりと。Alai-ed-din は自ら措辭に對する批評の寛ならんことを求むるも東洋人の意見に據るに敢てこの謙遜を要せず。第一流の文豪なる史家 Vassaf は Tarikh Djihankuschai が史的眞價を有するはその文體の優麗なるが爲なりしと激賞措かずと雖も歐洲人より見ればその文體は聊か浮華の嫌なき能はず、著者が敘事の排置に苦心して描寫の正確なるや否やに重きを置かざりしは遺憾の至なり。

(4) Kitab tedziyét-ul-emssar ve tezdijet-ul a'ssar 即ち『邦土之分割と世紀之推移

』。Fazel-oullah の子(し) Vassaf-ul-Hazret 即ち陛下之頌讚者の稱呼を以て有名なる Abd-oullah 撰。(王立巴里文庫波斯文寫本)

この書には一二五七年(六五五年)より一三二七年(七二八年)までの蒙古史を收め之を五編に分てり。蒙古王朝の君臨せる時代に波斯に起りたる重要な事蹟を主として、傍ら支那に於ける蒙古帝并に土耳其斯坦トランスオクシアナに於ける成吉思汗裔孫の歴史に就て多少の事實を掲げ、最後に埃及 Fars, Kerman 印度等に於ける同時代の歴史を敘せり。なほ著者はこの書を完備せるものたらしめんが爲に第四編の終に於て Tarikh Djihankuschai より抄出して成吉思汗并にその他の初期皇帝の歴史の大綱をも添ふ。

序 見る可し Vassaf の作の全く Alai-ed-din の前著に倣へるものなるを。その歴史の發端が先輩の史記の結尾を告ぐるの點にあるは自ら明言せる處、實にその第六章は旭烈兀が Ismailiyens の國を征服せる後直に着手したるバグダード遠征の記事に充つ。この處に於て Vassaf は Tarikh Djihankuschai に對して筆を極めて讚嘆の辭を述べて曰く『成吉思汗并にその子孫の大征服の原因を詳にしその處置の極めて苛刻なることとその政治の峻嚴なることを説きその戦術上の材幹とその平時に於ける治術とを明にせる書にして、あらゆる方面に於いて卓越せること前古その比を見ず、古來何人かよくかくの如く椽大の筆を揮へるものやある』と。Vassaf は次に事

實を敘するに際しては一に最も信を置くに足る可き人々の直話を基礎とすと云へり。その序文は六九九年（一二三〇年）の起稿に係りうちに旭烈兀の曾孫支丹合贊 Gazan の讚詞あり、七二二年一月二十四日（一二三二年六月二日）を以て Vassaf は一年前に脱稿し當時四編より成れる自著の歴史を合贊に嗣て即位せる支丹 Oldjaitou に獻納するの光榮に遭へり。Vassaf が久しくこの眷遇を受けんことを望みし末遂に Soutaniyé 市に於て君公に拜謁するを得るに至りしは一に宰相 Raschid の保護によれり、Raschid は Djami ut-Tévarikh の著者なるがこの書に就きては臆して記す所ある可し。宰相は皇帝に Vassaf の文豪なるを上奏せしが Vassaf は大臣に請願して支丹の前に於てその即位を祝せる短詩吟誦の許可を乞へり。Oldjaitou は之を嘉納せられ詩篇の朗吟中幾度か問を發して辭句譬喩の説明を求めしかば、或は宰相若しくは大法官之が解釋を與へ或は作者自ら勅問に奉答せり。Vassaf は次に Soutaniyé 市の美を歌へる短篇を朗誦せり。支丹はこの兩回の朗吟中あまた度感嘆の詞を發せしが深く作者の文才を愛して御衣を脱ぎて之に賜ひ、且 Vassaf-ut-Hazret と云へる稱號を與へ給へり、これ即ち陛下之頌讀者てふ義なり。Vassaf はこの拜謁の際大に自負心を満足せしむるを得しかばその著作のうち全く一章を割きて詳細にその經過を説けり。

Vassaf の文體は餘りに形容に過ぎたり。第二編の序文にこの書編纂の旨意にして單に史實の

敘述に止まらしめば極めて簡明に事實を記載するのみにて満足するを得ん、『而も余の希望は現代の歴史を敘すると共に此書をして美文集たり雄辯集たり將た又修辭の典範たらしめんとするにあり、最も傑出せる文學者をして措辭の洗煉なるに於て行文の流麗なるに於て引證の的切なるに於て文體の優雅なるに於て亞刺比亞文に於けるも將た波斯文に於けるも何人も能く余の右に出づる能はざるの事實を承認せしめんとするにあり、余の著作にして之を何人の述作と比較するも唯これ余の聲價を高むるのみならしめば又遺憾なし。世人の知れるが如く修辭學の上に於ては記事の豊富なるも簡潔なるも共に不可なし、唯場合に從て一を棄て他の一を取れるのみ。簡潔なる記事の讀者に快感を與ふるは恰も相戀の士女がその望を遂ぐる短か夜に似たり。されど豊富なる記事は又美人の頭より垂るる長く艶かなる辮髮の如く讀者を怡ばしむることを得可し。これ余が名譽ある讀者に向て余の精彩ある文體を賞美されんことを望む所以なり。』

實に Vassaf の著作に於ては歴史上の事實はカンヴァスの上に於て最も豊富なる彩色を施されたり。譬喩全篇に満ちて記事を蔽ひ、詩句引證の挿入さるるもの頗る夥しく爲に事件の進行を辿ること能はざるが如きことなきにあらず。著者は能く遺憾なく亞刺比亞語の寶庫を發きて之を利用し文勢抑揚に富み益々この詩的文體に妙味を加へ得たりと雖も、これ史籍にありては餘り相應はしきことにあらず。

この書を支丹 Oldjaitou に獻納せる後十六年にして Vassaf は第五編を増補し專ら Abou-said 治世の歴史を述べて七二八年(一三二八年)に至りてその筆を結べり。この全部五編の史籍は波斯に於ける蒙古王朝の歴史に關して貴重なる史料を收む。

(チ) Djami ut-Tévarikh 卽ち年代紀彙集。Hémédan の人 Abou-l-Khair の子 Fazel-oullah Raschid 12 Raschid-ed-dévlet 又 Raschid-el-hak-ve-ed-din 稱す 撰。(王立巴里文庫波斯文寫本)

蒙

この書の第一冊は之を蒙古人の歴史に委ね二編に分てり。第一編には成吉思汗の時代に於けるタルタリ遊牧民族の名稱を擧げその部族とその起源とを記載し、その住居せる邦土を説明せり。

古史

第二編には蒙古人の起源成吉思汗の祖先に關して蒐集せる傳説を敘述せる後、この征服者出生以來の歴史は勿論その子孫の事蹟をも説き、以て第十四世紀の初に君臨せる支那の帖木耳 Temour 波斯の Oldjaitou に及べり。各時代の終には又同時代の亞細亞諸帝王の歴史の大綱を掲ぐ。

この第一冊は七〇二年(一三〇三年)を以て成れるが著者はその序文に於て述べて曰く『吾人は今日に至るまで蒙古の民族に就きてその各部族の關係成吉思汗生涯の事蹟その子孫の治世に付きて唯極めて不完全なる記事を有するに過ぎず。之を記述せるものは單に俗説を參照せるのみにして且勝手氣儘に之が布置を爲せり。その記載せる事實のうちには成吉思汗の子孫并に蒙古民族酋長によりて否定さるるものも亦なきにあらず。』

原

『さりながら(波斯蒙古汗の)祕閣には蒙古文字を以て記せる由緒正しき蒙古語の史料の藏せらるるあり、但し之を讀破し得るものは稀なり。此史料を世間に發表せんとせられ支丹馬合木合贊 Mahmoud Gazan 汗は之に基きて歴史を編纂せしめんとの叡慮より七〇二年に Abou-l-Khair の子にして醫生 Raschid と呼べる異名をもて知られたる微臣ハバダン Hémédan の Fazel-oullah にこの重任を託し、且勅命を以てこの史料の缺を補ふが爲に、朝廷に仕へたる支那印度畏兀兒欽察及び爾餘の學者に諮問し、殊に現今世上に於て最も能く土耳其民族就中蒙古人の起源歴史に通曉せる王國の大 Noyan、元帥、大臣 Poulad Tchinksank の意見を質す可きことを命じ給へり。この書の目的は重要なる事實の記憶を失はざらしめんとするにありて、今日世上に於て一世紀以前の出來事を知るもの甚だ稀に、蒙古少壯貴族の多數がその祖先の姓名、系統、功業を遺忘せることを思ふときは殊にその必要や益々大なり。』

序

『この勅命を遵奉し余は批評眼を以て入念に祕閣に保存されたる記録を研究し、支丹合贊の朝廷に仕ふる各國の學者に就きて得たる示教によりてその不充分なる點を補ひたる後、余はこの歴史を起稿せるが余は特に事實の按排と敘述の明晰とに重きを置けり、』

第二の序文に於て Raschid は辯明して七〇三年十月十一日(一三〇四年五月十七日)に合贊の殂落せるときにはこの書未だ脱稿せず、代て汗位に即ける Oldjaitou の治世に至りて漸く編

纂の業を竣りたれば、即ち新汗にデヂケートせんと思ひしに、兄、支丹合贊の保護の下に撰述に着手せるに因みその光榮ある諱を卷頭に掲ぐ可しとの勅命に接せりと云へり。

Raschid は次で曰く『支丹 Ordaitou は光陰を割きて有益なる知識を得ることに努められたる皇帝なるが、余の著述を讀みて訂正を加へられたる後勅旨に、未だ世に萬國史の述作一もあるなし、この國には外國に關する年代紀さへもなく、今日まで之を知らんことを欲せられたる帝王亦一人もあるなし、されど今や地球上の大部分は帝の支配を受くるか或は他の成吉思汗の子孫の制令を奉じ、支那、印度、カシ米尔、西藏、畏兀兒、亞刺比亞、佛蘭機等の學者、星學者、歴史家は夥しく帝の朝廷に菌集し、何れも多少自國の史籍を携帶せるを以て、余は須らく這般各國民の史略を完成す可く、然らば帝はデヂケーションを受けさせらるるならん、且余にして之に地圖を添へ地球上各國の地誌を附録となさば、この二冊の書とこの本編とも見做す可き余の蒙古史とは併せて無類の大著述となり帝の記念として名譽ある述作たる可しと仰せられたり。

『余は勅命に遵ひ各國の碩學に諮ひ、外國の史籍中最も高評あるものを鈔録せる後、第二冊萬國史と第三冊地誌とを稿し、全書に題して年代紀彙集と呼べり。

『然れども歴史家は概してその記述せるの事實を目睹せるにあらず、當代の歴史を述作するものと雖も亦風説を材料として之を編纂せざるを得ず、而して風説の常として同一の説者にしてなほ明日は已に今日と異なることあるが故に、世人は右の如くにして編述されたる萬國古今の歴史を以て悉くは信ず可からずとなすならん。同一の事實も種々の影響を受けざる可からず、或は著者が傳説によりその引證する史料によりて邪路に誘はるることあり、或は故らに某の事件を誇張して某の事件を脱漏することあり、或は強て事實を枉ぐるの意なきも敘事の正確を缺くことあり、要するに徹頭徹尾眞理をのみ傳へんとするの歴史家は遂に一葉をも脱稿すること能はずして止まん、されど若し誤謬を恐れ不精密なりとの攻撃を避くるにこれ汲汲とし記憶す可き事實を敘述することなくんば這般の事蹟は忽ちにして埋滅し去らん。故に歴史家の義務は最も高評ある年代紀に就きて各國の歴史を抄出し學問最も該博なる各國の人士に諮るにあり、各國の民は何れもその傳説に基きて事蹟を説くが故に或は矛盾の存するあらん、されど編纂者に向ては之を責むるを得ず。例へば我等回教徒は信ずらく我等の傳説の正確なるは他の國民の傳説の比にあらずと、されどこれを以て他國の歴史の根據となすこと能はず、その基礎は即ち他國民の自ら信じ自ら傳ふる所に據らざる可からず。

今や又各國の最も高評ある史籍を參照し最も能く證明されたる傳説を採用し以て如上の規矩に従へり、されど余は決して自負して目的を達し得たりと爲すものにあらず。この種の事業には該博深奥の知識を要するも余は之を具へず。又壯年の銳氣と多大の餘暇とを要するも余が之に着手

せるは既に頽齡に向ひたる時にして、才識庸劣なるにも拘はらず誤て擧げられて大臣となり多年國務に盡瘁せるの後なりき。余は讀者がこれらの事情を察してこの書のうちに發見せらる可き誤謬に對し之を寛假せられんことを望む。

Raschid は之に附記して曰く『余の序文乙夜の覽に入るや支丹は余に仰せ給ひぬ、今日まで知られたるの歴史に於て傳へ來れる事實が全然真相に合はずとは或はこれあらん、その作者は卿が主張せるの理由によりて之を責めずして可なり、卿も亦然らん、然れども卿の著作中吾人に取りて至大の興味を有するの部分即ち成吉思汗より現代までの蒙古史に就きては何人が能く誠實なる記述に於て之を凌げるものやある。これ我祖先の歴史に精通せる諸臣の異口同音に言明せる所なりと。』

見る可しこの第二の序文は Oldjaitou の勅命により二冊の増補を爲したる後に起草されたるものなるを、然るに第一冊は合贊の勅旨により單に蒙古史に充てられたるに過ぎざりき。この歴史は、吾人をしてタルタリーの古住民成吉思汗の祖先并にこの征服者の初年の傳記を知ることを得しむる唯一の典籍なり。故にこの點に於ては極めて緊要にして缺く可からず、爾餘の編章に敘せる事實の多くは、上文に解題を加へたる諸書のうちに散見し、殊に Tarikh Djihankuschai の如きは原文の儘にて Raschid に引用せられたる所少からず、されどこの宰相の歴史は最も完備せるものにして序次井然として紊れず、その文體も亦雄健簡樸にして能く史筆の體を得たり。

Raschid は筆を合贊汗の殞落に止めたれど、その歴史を續修するものありて Abou-said の治世の終に及べり、この汗は七三六年（一三三五年）の遠逝にして波斯に於ける成吉思汗王朝最後の君主と認めらる可し。續修に従事せる人は Oldjaitou 本紀の初に簡單なる序文を挿入して（一四〇五年に父 Tamerlan の位を襲ぐる）支丹 Schakroukh Bahadour の時既に Tamerlan の歴史に着手し Abou-said 殞落以後の事實を傳へんとするものありしが、支丹は却て支丹 Mohammed Khoudabende (Oldjaitou) 并にその子支丹 Abou-said Bahadour 治世の記事を増補して Raschid の史籍を大成せんことを望まれしより、乃ち信ず可き人々の手に成りたる種々の書籍に基きてこの二代の歴史を起稿せしが編纂の方針は一に Raschid に倣へりと云へり。なほ原稿の終に自記する所に従へばこの作者は Abd-oullah の子にして Mass'oud と稱し八三七年七月四日（一四三四年二月十六日）に編纂の功を竣れりと見ゆ。

Raschid は始め醫員として支丹合贊に仕へしが一三〇〇年にこの支丹に拔擢せられて波斯の行政長官となりぬ。一三〇四年に Oldjaitou の即位するや依然として之に宰相の職を與へしかば Raschid はこの支丹の治世中その位地を保つを得たり。その作 Djami ut-Tévarikh を獻納せしは一三〇七年（七〇六年）のことにしてこの際特に支丹より眷遇を受けたり。然るに

Abou-saidの治世の初に至り遂に蒙古君公に仕ふる宰相の常として不幸なる運命に遭へり。即ち政敵より Oidjaitou を毒殺せりとの誣告を受けて死刑を宣告せられしかばこの學問の該博なるを以て傑出し熱心に學術文藝を奨勵せる老翁は前後十八年間波斯に賢明なる政治を施せる後その身體を兩斷せられりぬ、時に一三二八年(七一八年)九月十三日なり。Mines de l'Orient 第一冊并に第五冊 2. Et. Quatremerre の起稿せる Djouvein の Atta-mulk 并に Hémedan の Raschid の傳記と述作とに關する貴重なる記事あり。

(レ) Kitab raouzat ul-djennat fi evsaf médinet il hérat 極樂之園園一名ヘラット州之記、Moa'yen-ed-din Mohammed El-Esfézari (即ちヘラット縣 Esfézar 町の人の義) 撰。(王立巴里文庫波斯文寫本)。

この書はヘラットは勿論ホラサン全土の地誌を述べ、次に亞刺比亞人の入寇以來著者の生時までの歴史を敘し、以て成吉思汗の軍隊のホラサンを蹂躪せること并に同地方の蒙古人の制令を奉じたりし時のことに就き詳細の記事を具ふ。

Moa'yen-ed-din の自ら記する所に從へば Tamerlan の後裔にして Abou-said の弑逆に遭へる後八七三年(一四六八年—九年)にヘラット地方を略取せる支丹 Houssein Bahadour 汗の朝廷に仕へて重職に就きたるよしにてその治世の第二十六年にこの支丹の保護の下に本書を撰述せりと云ふ。

(K) Mo'izz-ul-anssab 即ち高貴系譜 (王立巴里文庫波斯文寫本)

この稿本には成吉思汗一族并に Tamerlan 一族の公子公主の系譜の兩王朝帝王妃妾の姓名并にその大官の姓名を掲ぐ。作者はその姓名を明にせざれど (Tamerlan の子) Schahroukh Bahadour 汗の命を受け、八三〇年(一四二七年)にこの系譜を作るとの旨を自記せり。Tamerlan の系統は九二三年(一五一七年)に殞せる Bédi-uz-Zéman までを掲ぐ、この系譜の篇末まで同一人の筆に成らざりしこと以て見る可し。

(ル) 萬國史略シリア文 Grégoire Abou-l-faradje (12 Bar Hébreus) 撰。

この小編年史は唯僅に蒙古人が波斯を支配せる時代に關して聊か亞刺比亞波斯の歴史家の敘述せる事實を補ひ得るのみ。記者が成吉思汗の征服并に初期帝王の治世に就きて記載せる所は主として Djouvéini の史籍の抄録に過ぎず。事件の著者の生時に近くに從ひ、その記述は次第に詳細となれり。著者は又數々東洋に於ける基督教徒の事蹟を説けり、これ回教徒の歴史家が殆んど措て間はざる所なり、而して著者の生時にモスル并に Erbil に起れる事件は殊に之を詳敘せり。

Bar Hébreus は一二八六年に死去せるが、その死後この編年史を繼續して降て一二九七年までの事實を記せるものあり、但その作者の姓名は明ならず、この後編には Guikhatou 并に Baidou の治世の主要なる事蹟を詳細に説明せり。

この編年史は世界創造以來のことを敘せるが實は Bar Hebraeus の著述の第一編を爲せるに過ぎず、第二編にはアンチオキア(安都)管長の歴史を説きて筆を一二八五年に止め、第三編には一二八六年までのヤコブ派法主管長并に總管長(Maphrians)のこととネストリウス派管長のことを掲ぐ。この後の兩編は未だ世に出でず。

シリア文の萬國編年史は獨逸の學者 Bruns, Kirsch 兩氏の手により羅匈譯文を添へて一七八九年に出版せられたり。この譯文には誤謬少からりしが Ferdinand Gregor Mayer その著 Beyträge zu einer richtigen Uebersetzung der syrischen Chronik des Gregorius Bar Hebraeus, Wien 1819, in-8° に於て之が訂正を爲せり。

蒙

史

Grégoire Aboul-faradje は一二二六年に Malattia 一に Melitène に生れ Aaron と稱する一醫師の子なりき。少年の時身を僧籍に置き二十歳のときヤコブ派管長より Gobos の僧正に任せられ翌年 Lacabène の僧正に轉じ、後更にアレppoに轉任し一二六四年にヤコブ派の Maphrian 即ち總管長に選ばれたり、これ管長と法主との間に位せる僧職なり。晩年或る回教貴族の請により親らシリア文の編年史を亞刺比亞文に翻譯せり。思ふにこの譯本は Tarikh makh-tassir ud-Duvel 即ち各王國之略史と題してアダム以後一二八五年までの記事を收め、Pocock が Historia compendiosa Dynastiarum と題し、羅匈文の譯文を添へて一六六三年に牛津に

於て出版せるものならん。Grégoire Aboul-Faradje は外に神學、純正哲學、論理學、辯證學、倫理學、政治學、經濟學、物理學、天文學、醫學等の述作あり。Maphrian の職を襲げるその弟 Barsuma は Aboul-Faradje の傳記を草しその終に以上の各學科に就きて撰述されたる書籍三十一種の書目を擧ぐ。

(フ) Schédjère-i-Turki 土耳其系木。土耳其語東方方言にて記す。Abou-I-Gazi Bahadour 汗撰

原

この書は成吉思汗の祖先より撰者の生時即ち第十七世紀の初年までの蒙古史要なり。全書を九編に分ち第一編は遠くアダムに遡り以下降て Jafeth の後裔なりと稱する假想的人物 Mongol までの間に介在せる時代のことを數頁の間に收め、第二編には成吉思汗の生誕までのことを説き、第三編にはこの征服者の傳記を掲げ最後の六編は之をその子孫の歴史に充つ。

序

Abou-I-Gazi 著作のうち吾人の説かんとする蒙古史の時代に相當せる部分は Raschid の史籍を拙劣に抄録せるに過ぎざれば吾人に取りては何等の益する所あるなし。

著者が最も力を込めたるは欽察土耳其斯坦トランスオクシアナ并に花刺子模に君臨したる朮赤の子孫の歴史にして、殊に一五〇六年より一六六四年までの Khorazin 君侯の歴史にその精力を傾注す。一六六四年とは即ちその裔孫なる Abou-I-Gazi Bahadour 殂落の年なり。この部分

は全書の三分の一を占む。

Arab Mohammed 汗の子にして尢赤十二世の孫なる Abou-l-Gazi は一〇一四年三月十五日（一六〇五年七月三十一日）に Ourgandj 國に於て生まれ、一〇五三年（一六四三年）に花刺子模國君の位に陞れり。その子 Anousché Mohammed Bahadour に位を譲れる後間もなく一〇七四年（一六六三年—四年）に逝けり。Abou-l-Gazi はその著作を脱稿すること能はざりしを以てその子 Anousché に之が完結のことを遺命せしより新王は即ち一〇五六年（一六四六年）より Abou-l-Gazi 殂落までの間に起れる事蹟を補へり。

蒙 古 史

吾人がこの書を知るに至れるは全く一瑞典士官の功績によれる者にして、士官はポルタヴァに於て捕虜となりトボルスクに流謫せられしが偶々 Abou-l-Gazi のものせる歴史の寫本を得之を獨逸文に翻譯せしに一七二六年に至り Varenne de Mondesse 氏更に之を佛文に重譯し Histoire généalogique des Tatars と題しライデンに於て出版せり。但しこの翻譯の正確を缺けることは Abou-l-Gazi の歴史の板本世に行はるるが故に之を證明すること容易なり、これ全く故の露國の大宰相伯爵 Nicolas de Romanzow の餘德にして右の原文は伯爵保護の下に一八二五年にカザン大學出版部より一ツ折本百八十三頁の一冊を爲して公にされたり。

次に擧ぐる書籍はシリアと埃及との歴史に關係せるものにして埃及人と蒙古人との交渉并に戰役に對して参照の料に供す可し。

(D) Kitab hassan ul-ménakib is-sériyet el montaza'at min iz-sirét is-zahiriyyét 即ち Zahir 傳記抄出國王美德記。 Schafr el Katib (即ち大臣) 撰。(王立巴里文庫亞刺比亞文寫本)

原

これ一二六〇年より一二七七年まで埃及シリアに君臨せる支丹 Ez-Zahir Beibars の傳記なり。撰者の序文に於て敘する處に據ればこの支丹の秘書たりし Mohayi-ud-din Abou-l-Fazel Abd-oullah と云ふもの Beibars の傳記を編みしも所謂日々の行事を書し且その德を讚美すること誇大に失し、餘りに冗漫にして讀者を倦怠せしむるものありと云へり。 Schafr 即ちその請を容れて之が節略を試みしがこれ即ち本書なり。

序

(カ) Téschri-f-ul eyiam vé-l ou'ssour, bisiret is soultan, el-melk el-manssour 日年々之光榮一名支丹 Al-Manssour 之傳記(王立巴里文庫亞刺比亞文寫本)

一二八〇年より一二九〇年まで君臨せる埃及の支丹 Calavoun の歴史なり。されどこの寫本には第一編の殆んど全部と第三編の發端とを缺けり。作者の姓名も亦詳にする能はず。

(M) Tevarikh us-selatin, ve-l-Imulouk ve-l a'ssaker 支丹王侯軍隊史(王立巴里文庫亞刺比亞文寫本)

この寫本は僅に支丹 Calavoun の子なる埃及の支丹 Abou-l-Feth Mohammed の傳記の斷片即ち七〇四年并に七〇五年（一三〇四年より一三〇六年まで）の記事を存するのみ。Katib Tchélébi の人名辭書に據るに、著者はその姓名を Schems-ud-din el Schudja'yi と云ひ埃及人なりと云ふ。

(タ) Nihayet ul-éreb fi funoun il-édeb 美文各科研究之成績。Abd-oul-Vahhab の子に
 して Novairi なる名を以てより能く知られたる Scheikh Schihab-ud-din Ahmed 撰。
 (ライデン文庫亞刺比亞文寫本)

この高評ある書籍は五部 Fenns 即ち文學の五分科より成り各 Fenn は亦 Cassm 門 bab 編并に fassel 章に細分やる。

第一部は天體氣象時季の區別地界并に七種の氣候を論じ、第三部は有形無形の兩方面より人を記述しその同類との關係を究め政治學を論ず。第三部は動物界、第四部は植物界の記述に充て、第五部には即ちアダム以來第十四世紀の初年即ち著者の盛時までの教界塵界の歴史を敘す。

第一冊の卷頭にはこの大著を組成せる全章の目次あり。Reiske はその著 Prodidagmata ad Hagji-Chalifæ Librum memorialium rerum a Mahammedanis gestarum 二百三十二頁
 以下に於て Koehler の翻譯せる Abou-l-Feda のシリアの目錄の次にこの目次の翻譯を掲ぐ。

成吉思汗并に同王朝帝王の歴史は第五部第五門第十一編にあり。本文に入るに先ちて著者はその引據とせる史料を示して曰く『吾人は成吉思汗經歷の發端よりその諸國を征服せるまでの時代に互りて之が生涯の事蹟を簡明に説かんとす。吾人は寓目せる書物のうちに得たる事實を傳へ人の談話より蒐集せる事實を筆に傳へんとす。その帝國の版圖廣漠たりその起源遼遠たり、將たその同時代の史籍多く散佚せるより吾人はその歴史に關するあらゆる事實を蒐集する能はず、又傳へられたる事實の確否を查察する能はずと雖も、吾人は彼の著名なる事蹟に對し沈黙するを得ずと信ずるものなり、故に吾人は祕書の著せる只拉兒哀丁の歴史と Ethir の子 Yzz-ud-din の著せる歴史 El Kamil とに従ひこの王朝帝王の或る事蹟に就き順序をも立てず之を説くこととなさん。この問題を敘述したる他の書籍に就きては吾人未だ之を手にするの機會に遭はず。且又吾人は前記兩史籍に掲げざるの事實并に兩史家以後の事實をも敘せん、これ吾人が或は蒙古諸帝の爲に我朝廷に使い來れる大使或は蒙古朝諸國に滞在せしことある人々に就きて蒐集したるところなり。』

吾人は Novairi の著者のこの部分に於ては蒙古史に關する史料を求むるの必要を感じず、何となれば吾人はその參照せる材料の外に Djouvéini, Raschid, Vassaf の史籍の如きその書名なくも記さざる數書を有すればなり、思ふに Novairi は這般歴史をものせる波斯語に通ぜざり

しなる可く、隨てその書の存在を知らざりしもの如し。されど埃及の 맘ルク朝支丹の歴史を説ける部分にはこの埃及諸王と波斯に於ける蒙古諸汗との間に於ける交戦并に外交的關係に敘及せることあるを以て吾人の参考と爲すに足る可し。

埃及の年代紀に於ては著者はその生時のことを敘するに當り一身に關することを亦之を掲ぐ。即ち六七七年（一二七八年—九年）の條には次の記事あり曰く『この年十一月二十一日（四月五日）の曉に先てる夜、埃及 Said の Akhmin 市に於て Mohammed の子 Abd-oul-Yahhab の子にして Novairi なる名もて知られたる本書の撰者編者たる Scheikh Schihab-ud-din Ahmed 生れたり』と（本文には家系を敘してハリフ、Aboubékir の時まで遡りたるも今略す）。六九九年（一二九九年—一三〇〇年）の條には Tihyen Coureischite にして Novairi なる名をもて知られたる父 Tadj-ud-din Abou-Mohammed Abd-oul-Yahhab 十二月廿二日（一三〇〇年九月八日）即ち木曜日にかイロ府の Salih Nedjmi 學院室内に於て死去せり、この學院は Malik 禮を講習する所なり、父は六一八年（一二二一年）に Misser の Ma'rounat 學院に於て生れたりとの旨を記す。

Novairi は七〇二年（一三〇三年）に埃及兵が Calavoun の子なる支丹 Nassir の旗下に於て蒙古人に對して大勝を博したる Merdj-us-Sofar の戦に親ら從軍せることを説けり、されどその如何なる資格に於て滯陣せしやは之を言はず。

又この著者は七一〇年（一三一〇年—一年）にシリアに於て官職に任ぜられたることを知らしむ、これ支丹 Nassir 治世中のことなり。その記事に曰く『余は Tripoli 州に赴任して收税官 (Sahib-ud-Divan) の事を行ふ可しとの命令に接せり、余の辭令書はアレッポの Mahmoud の子にして博學なる Molla Schihab-ud-din の起草に係りその子 Le Cadhi Djémal-ud-din Ibrahim の執筆せるものにして一月十五日（一三一〇年六月十四日）の日附なり。余は二月一日（六月三十日）に（カイロ）を出發し Tripoli にありて十月一日（一三二一年二月二十一日）まで前年の官職に従事し次で經理監督 (Nazir ul-Djeisch) に轉任せらる』と。Novairi は久しく在職せざりしがこれ七二二年（一三二二年—三年）の條に於ける次の記事によりて之を知り得可し、曰く『余は五月（九月）の半ばに Tripoli 州經理監督免職の辭令に接しカイロに歸れり』と。

波斯に於ける蒙古朝の時代に相當せる埃及史のこの部分は第五部第五門第十二編にあり。ライデン大學の文庫に所藏せる Novairi の書は二ツ折本にて十二冊より成る、その歴史の部分は殆んど全部を完備す。

(2) En-nudjounn uz-zahiret fi mulouk missr v-el cahiret 煌々たる星宿埃及國王史。

Tangri-virdi の子にして八一五年（一四二二年—三年）に死せる Djemal-ud-din Abou-i-Mohassin Yousseuf 撰。（王立巴里文庫亞刺比亞文寫本）

二二四年（八三八年）に始まり六九〇年（一二九一年）に終れる年代紀なり。

(ハ) Es-sulouk li ma'rifet duvvel il-mulouk 諸王國事情入門。le scheikh (部族長)

Taki-ud-din Ahmed el-Macrizi 撰。（王立巴里文庫亞刺比亞文寫本）

Saladin がファチマ朝ハリフハの政權を挫きしより八四五年（一四四一年）までの埃及史なり。

著者は外に亞刺比亞人に征服されし以來の埃及史を説ける書籍二編を撰みしが本書はその續篇なり。Macrizi は七六六年（一三六四年—五年）にカイロに生れ八四五年（一四四一年—二年）に死せり。

史 (ニ) Kitab fi-l adab is solttaniyet ved-duvvel-il-islamiyet (王立巴里文庫亞刺比亞文寫本)

この書は之を二編に分ち第一編は政治學を論じ、第二編にはアッバス朝ファチマ朝諸ハリフハの略史を述ぶ。寫本の序文聊か滅損して撰者の姓名明ならずと雖もその自ら記す所に従へば、モスル滯在中同市の君侯 El Melik el Mo'azzam Fakher-ud-din に謁見の名譽を得且つ款待を受けしより謝意を表するが爲に之を起草して君侯の用に供し且之と同時に當時既にタブリーズ Tébriz に赴く可しとのことを發表せしを以て一には著者の歴史的記念として之を遺さんとの精神を起せりとあり。寫本の終にはこの書は七〇一年の半ば即ち一三〇二年の初、著者がなほモスルに滯在せる時に成れりとあるを見る可し。著者は Aly 派に屬しその書をデケートせる君侯は波斯の蒙古汗の臣隸にして著者が將に赴かんとせるタブリーズ Tébriz はこの汗の首府なりき。本書が蒙古政府の爲に頌徳文を述べたるは這般の事情あるが爲にしてこの頌徳文は Sylvestre de Sacy の Chrestomathie arabe によりて世に紹介せられたり。

原 (キ) Messalik ul-abssar fi mémalik il-emssar 各國視察旅行。ハリフハ Omar の後裔なるより却し Ibn-ul-Omari の名を以て知られたる l'imam (式僧) Schihab-ud-din Abou-I-Abbas 撰。

序 本書のうち巴里文庫に藏するは唯五四一年（一二四六年—七年）に始まり七四四年（一三三三年—四年）に終れる第二三編一冊のみ。こは主としてシリア并に埃及のことを説ける年代紀なるが Tangri-Virdi 并に Macrizi の歴史に比するに簡略なり。

Ibn-ul-Omari はシリア并に埃及の法衙に奉職し七四九年（一三四八年）にダマスカスに於て逝けり。

(ナ) Duvvel ul islam 回教諸王國 le scheikh Schems-ud-din ez-Zéhébi 撰。（ライデ

ン文庫亞刺比亞文寫本)

二編に分たれたる書にして、第一編は Mahomet に始まりて四八七年(一〇九四年)に死せるハリフハ El Muctédi の治世に終り、第二編は七四四年(一三四三年—四年)にその筆を止む。回教紀年を逐ひ毎年回教世界に起りたる最も重要な事實は之を掲げたれど殊に埃及シリアの事蹟多し。この年代紀は思ふに Tarikh-ul-Islam 即ち回教史と題するこの著者の他の著作を節略せるものたるに過ぎざるならん。

(ラ) Raouzat us-safa 快樂之園。Khavend-Schah の子にして九〇三年(一四九七年—八年)に歿し Mirkhond の名をもて有名なる Mohammed 撰。(著者所藏波斯文寫本)

人口に膾炙せるこの萬國史の第五冊は Djami ut Tévarikh, Tarikh Djihankuschai, Tarikh Vassaf の三書に基きて蒙古史を敘す。この三史籍は何れも第十三世紀以後の爾餘回教作者が成吉思汗并にその子孫に就きて敘述せる際参照に供せるの資料たり。

(マ) Tarikh Monejdim-baschi 天文頭之歴史(著者所藏土耳其文寫本二ツ折本二冊)

この書は一〇五八年(一六四八年—九年)に王位に登れるオスマン朝支丹 Mohammed 四世の朝に仕へて天文頭兼占星長たりし回々僧 Ahmed Efendi のものせる亞刺比亞文萬國史の土耳其譯なり。一〇九三年(一六八二年)までのオスマン家の歴史をもて終れり。この翻譯は一三三

二年(一七二〇年)に大宰相 Damad Ibrahim Pascha の保護の下に Ahmed ben Mohammed Nedim 之を企したり。

(カ) Tarikh Kiptchac-khani 即ち Kiptchac 汗撰歴史(王立巴里文庫波斯文寫本)

一三三八年(一七二五年—六年)までの萬國回教史の極めて乾燥無味なる大綱にして Tahauri Seif-ud-devlét Abd-ous Samed 汗にデヂケートせるもの。

吾人が因て本史の資料を得たるの書籍を數々引用するに當り毎回吾人の採用せる意見を發見し得可き本書の頁數を示すこと能はざるは吾人の遺憾とする所なり。蓋し東洋の寫本には頁附なきを以て、偶然その歐洲人の所有に歸することあるもその寫本の頁數を掲げたりとて毫も同一書籍の他の謄本を参照する人々に取りては何等の效あるなし。されど東洋學者若し引用の正否を確めんと欲するに當り年代紀の體裁に編纂されたる史籍に於ては單にその事件の起りたるを求むるのみなれば之を検出するに於てさまでの困難なからん、而して嚴密に紀年の順序に従はざる書籍にありては標題を閲して後その調査せんと欲する本文を發見するを得ん。

本史の卷頭に挿める亞細亞地圖は士爵 Lapie 氏が世に知られたる最良の材料に基きて調製せる所に係る。小亞細亞波斯并に同王國と印度との間に介在せる諸國はこの有爲なる地理學者が十有餘年の間絶えず研究の目的となし多數の旅行記を参照したる大作より取れり。印度は Arrow-

smithの大地圖并に多數の特種地圖より取れり。中央亞細亞は多くの旅行記に露國の地圖を参照せる結果なり、カシミルより巴達克山パタフシヤン忽斡ホチエンドを経てTaranに至るの間は從來殆んど未知の地方なりしが之に大光明を注ぐを得しを以て満足を與ふるならん、西伯利亞は多くの露國地圖就中Kolyanの地圖より取り一二の旅行記を以て之を訂正せり、支那の大帝國は大に天文學上の觀察を根據とせる支那の地圖より取り多數の旅行記を假りて著しく之を改訂せり。最後に全海岸線は最近の天文學上の觀察に基き世に公にせられたる報告類を悉く參考に供せり。

第十三世紀の初に於ける亞細亞各國の境界は歴史の示す所に從ひて之を劃せり。充分なる資料の缺乏せる爲その位地を明確に指定すること難き三個の都府あり、別失八里 Bishbalik, Yalik 阿力麻里 Almalik 即ちこれなり。(校者曰く、地圖は本文庫本の體裁上遺憾乍ら之を除けり。)

目 次

序 文
原 序
第 一 編
第 一 章

中央亞細亞遊牧民族……五、突厥韃靼古王國……五、支那帝國との關係……五、第十三世紀の初に於ける中央亞細亞……
 五、この時代に於ける韃靼種族の諸部并にその住居せる地方……五、其の風俗……五。

第二章

蒙古人の古傳説……六、成吉思汗の祖先……六、成吉思汗少年時代の事蹟……六、鐵木眞數氏族の長となる……六、その
 初陣……六、客刺亦都汗との關係……六、客刺亦都の沿革……六、遊牧諸民族に對する鐵木眞汪罕の連合遠征……六、兩
 雄の反目……六、鐵木眞の敗績……六、客刺亦都汗に寄するの使信……六、汪罕の敗軍……六、その最後……六、乃蠻部
 に對する鐵木眞の戰勝……一〇〇、乃蠻王の戰死……一〇一、蔑兒乞部の降服……一〇二、塔塔兒部の滅絶……一〇四、鐵木眞の唐古
 特入寇……一〇五、同王國の沿革……一〇六。

第三章

總會議……一〇七、鐵木眞皇帝の位に即き成吉思汗と稱す……一〇七、第二回の唐古特入寇……一〇九、乞兒吉思部、侃侃助特部の服従……一〇九、衛拉特部の服従……一一〇、古出魯克、托古塔の征討……一一〇、第三回唐古特入寇……一一〇、畏兀兒部の服従、同部の沿革……一一一。

第四章

成吉思汗北方支那皇帝に叛く……一二五、契丹人即遼人の王國に就て……一二五、女真人即ち金人の王國……一二七、成吉思汗支那に進軍す……一二〇、山西直隸の侵犯……一二三、金軍の敗北……一二三、遼東に於ける契丹人叛きて成吉思汗に降る……一二五、金の首府に於ける革命皇帝糴果の惨死……一二七、その姪吾賭補の即位……一二八、夏人と金人との交戦……一三〇、成吉思汗の第二回支那戦役……一三〇、山西直隸山東の劫掠……一三〇、罽和……一三三、金帝都を河南汴京に遷す……一三三、蒙古軍の第三回支那戦役……一三三、中都の陥落……一三三、汴梁に對する遠征……一三三。

第五章

成吉思汗蒙古に歸る……一三九、蔑兒乞部の絶滅……一三九、禿馬特部の征服……一三九、遼東叛亂の鎮定……一四〇、木訶里を軍司令官に任じて支那に派す……一四〇、第四回の唐古特入寇……一四〇、哈刺乞解帝國の沿革……一四〇、哈刺乞解皇帝に對する古出魯克汗と花刺子模支丹との同盟……一四〇、古出魯克の哈刺乞解征服……一四〇、蒙古軍の哈刺乞解王國征討……一四〇、并に古出魯克の最後……一四〇。

第六章

花刺子模帝國に就て……一四五、その範圍の次第に擴大すること……一四五、支丹諛罕默德とハリフハ那昔爾との餐隊……一五〇、バグダードに對する遠征……一五〇、支丹諸皇子の食封……一五〇、軍隊の組織……一五〇、母后の威權……一五〇、成吉思汗の使節……一五〇、タルタリより赴ける多數の商人駝駝刺兒に於て殺さる……一五〇、成吉思汗の戦備……一五〇、その大復讐さる……一五〇、花刺子模軍と蒙古軍と土耳其斯坦に於て戦ふ……一五〇、成吉思汗花刺子模帝國に向て進む……一五〇、諛罕默德の防備……一五〇。

第七章

成吉思汗花刺子模帝國の境上に着す……一五六、トランスオクシアナの征服……一五六、諛罕默德追撃軍の前進……一五六、諛罕默德アビスグーン島に退きて殞落す……一五〇、諛罕默德の母后妃妾捕虜となる……一五〇、諛罕默德兩幼子の戦死……一五六、花刺子模の征服……一五二、巴達克山の降服……一五三、拖雷ホラサンを征服し蹂躪す……一五三、支丹只拉兒哀丁哥疾寧に退く……一五三、支丹ヘルアンに於て蒙古軍を破る……一五三、部下將軍の不和軍隊多數の離叛……一五三、支丹印度河を指して退却す……一五三、成吉思汗只拉兒哀丁に向て進む……一五三、印度河畔の戦……一五三、支丹印度に退く……一五三、巴刺、土爾台の兩將印度河を超えて遠征す……一五三、哥疾寧の劫掠……一五三、ヘラツト、メルヴ兩市の滅却……一五三、只拉兒哀丁に叛ける軍隊の最後……一五三、バルクの滅却……一五三、成吉思汗蒙古に歸る……一五三。

第八章

蒙古の兩將哲別、速不台遠征の續……一五七、イラーク・アチエム省アザールバイジャン省并にアラン省の蹂躪……一五七、グルジア人に對する勝利……一五八、グルジア并にシルワンの劫掠……一五八、アラン人并にレズジュエー人の敗北……一五八、欽察人の領土を侵略す……一五八、露西亞人に對する戦勝……一五八、南部露西亞の蹂躪……一五九、クリミアに入寇す……一五九、ブルガル人に對する戦勝……一六〇、この蒙古軍タルタリに歸る……一六〇、イラーク・アチエム省に於ける蒙古兵の新劫掠……一六〇。

第九章

親王朮赤の逝去……一六〇、北部支那に於ける將軍木訶里の作戦……一六〇、金帝と宋帝との交戦……一六〇、唐古特侵略……一六〇。

高麗の歸服……三六、木訶里の死……三七、その子孛魯司令長官と爲る……三三、成吉思汗の唐古特人寇……三五、同王國の
征服……三七、并に滅亡……三六、成吉思汗殂す……三六、タルタリーに於けるその葬儀……三六。

第十章

成吉思汗の戰鬪に於て卓越なりし諸原因……三六、その軍隊の性質……三六、その兵制……三六、その狩獵……三六、その法
律……三五、その妃妾……三〇。

附録

目次	三〇三
註一、森林の民	三〇三
註二、中亞諸部族	三〇四
蒙古部	三〇八
註三、成吉思汗系譜	三一一
註四、塔々兒部	三二〇
註五、畏兀兒人	三二一
註六、哈刺乞解	三二七
註七、蒙古兵の歐洲遠征	三二九

第一編

第一章

亞細亞の中部に當り北方は一帶の山脈を隔てて西伯利亞に接し南方は朝鮮支那西藏シル河Si-hi-
ouh 裏海に界し、西はヴォルガ河より東は日本海に連れる廣漠たる地域には太古の時代より相
異りたる三人種に屬する遊牧民族ありて之に住へり、この三人種の稱呼を擧ぐれば即ち第一土耳
其、第二韃靼一名蒙古、第三通古斯一名女眞 Tchouritché 此れなり、この區別はその容貌の相
違よりもその用語の相違によりて之を示すを得可し。

支那の歴史は遠く太古の日より北狄と稱して中央亞細亞遊牧の民に就きて記載し、地球のこの
方面を攪亂せる革命と次を逐ふてこの地方に勃興せる帝國との記憶を傳へたり。支那の歴史に記
せる北狄のうち最も早く勢力を振へるは匈奴 Hiong-nous にしてその邦家は基督紀元九三年ま
で存在せり。西紀前二世紀半の頃支那大帝國の北方全部に連互せる有名なる長城を築きしは全く
この北狄の入寇を防ぐが爲なりき。匈奴に代りしは鮮卑 Sien-pis にしてその支配は二三三年頃

に終りたり。次に托跋 Topas 一名 Sotous (校者曰く、Hirth 博士原著西山榮久氏譯支那古代史凡例中に Sotous には索虜對音之誤ならんとあり) 出でてタルタリーは勿論北方支那にも君臨せり。第五世紀の初に當りて柔然 Geougenus 起て勢力を振ひしが百五十年の後に至り突厥 Turcs 之を仆して東海より裏海に及び支那西藏より氷海に達するの帝國を建てたり。然るに七四四年支那人回紇 Origouris 并に爾餘附近の國民と同盟して突厥の帝國を滅し、爾來回紇權勢を擅にせしも八四八年乞兒吉思 Kigisises の兵を受けて遂に之に屈するに至れり。

第十世紀の初遼東の北方より起れる契丹 Khitans タルタリーに君臨し間もなく支那北方邊疆の地方をも收めたれど、その王國は一一二五年に女眞 Tchourtches の爲に仆されたり、女眞も亦タルタリーの極東地方に住へる遊牧の民なり。この民族は支那の三分の一を征服しその皇帝は都を支那の本部に定め國號を建てて金と稱せり。その疆域南は淮 Hoai 水に達して支那宋朝皇帝の制令を奉ずる地方に接し東は日本海に面し西は陝西の一部を包有せる夏の王國即ち唐古特の王國と相隣し、西北大沙漠 Schamo の方面は西遼 Cara-Khitai の帝國と相望み、更に北方は遠く黒龍江貝加爾湖を超えてタルタリー全土をその領域内に收めしかば同地方遊牧の民は悉く之に朝貢せり。

這般尙武の民衆は古往今來絶えず支那の禍患を爲せり。その北方接壤地は貧窶にして掠奪を試むる能はず、西伯利亞に唯獵夫の廣漠たる森林を遍歷するあるのみ、他に住民あるなし。かくて亞細亞大陸にありては恰も文明進歩の序次に於けるが如く、遊牧の民は獲物によりて衣食するの民と農耕の民との中間に介在せり。劫掠の慾を満すの時機熟するやタルタリーの遊牧者は支那に侵略を試み、戍兵の狼狽して未だ能く抵抗を冒し得ざるに先ちて一省を蹂躪し分捕品と捕虜とを携へ追撃の困難なる大沙漠を超えて退却せり。その入寇を妨碍するが爲に築造せる長城は曾てその目的を達すること能はざりき。支那政府は例として帝國の北方境上に定住せる蕃族をして、爾餘タルタリー民族を防がしめ以てその部族を擧げて己に服事せしめしも、この制度は時に禍亂を醸生するの源となれり。その兵禍を免るるに就て最も依頼するに足る可きの策は、その首領輩をして互に相反目せしむるにあり、これ支那政治家のその政策の眼目となせし處なりとす。首領等若し軋轢を事とせば支那の皇帝は、這般遊牧民族に對して宗主權を握り、その Taniours (西山氏譯支那古代史凡例中、Taniours に就て) 若くは汗の貢賦を受け之に勳爵を授け印璽封冊紫袍鐘鼓軍旗を與へ單于の文字を當つべしとあり。 若くは汗の貢賦を受け之に勳爵を授け印璽封冊紫袍鐘鼓軍旗を與へて敘任のことを掌りしも、一度功名心に富める有爲の首領出でてその制令の下に這般民族を糾合するや支那の帝王は却て之に向て膝を屈するを常とせり。即ち皇帝は金錢若くは絹布の歳幣を納れて平和を買ふの窮境に陥り、韃靼王侯飽くなきの貪婪心を満足せしめざる可からず、使節は數々支那に派遣せられて絹布麻布茶金錢等の音物を貪り、而して支那皇帝は這般遊牧民族の國王よ

貝加爾湖東には Couris, Coalaches, Bouriates, Toumates の四部住へり、その四部は總稱して Bargoutes と云ひセレンガ河の彼方なる地方を領土となせり、この地方は韃靼種族の占領せる東北の限界に位せるが故に Bargoutchin-Tougroun と稱せらる。Bargoutchin は東より來りしつ、Tougroun は境界の義なり、今日ブリヤート人の住へる湖東地方を Djourie と稱するはその訛れるなり。北方に於て之に隣せるは Boulgatchines, Kernout-chines 并に森林の民と稱する烏梁海人 Ourianguites 等なりき。この最後の部族は通古斯種に屬せり。卷末の註第一參照

これらの民のうちには又 Soumites, Keurloutes, Sacaites, Courcans 等を數ふと雖もその住居せる地方は之を詳にするを得ず。チにはなほ Tekrines 一名 Mekrines と稱する民を擧げたり、これ畏兀兒にあらず蒙古にあらず Ouigourie の山間地方に住へりと云ふ。

最後に蒙古部族は貝加爾湖南方に位せる地方を占めその氏族多きが中に Bayaoutes は Tchida 河邊に漂泊し泰亦赤兀氏 Taidjoutes はセレンガ河畔に放牧し翁吉刺特氏 COUNGCARATES は韃靼地方と女眞地方との境界を劃せる秀でたる山脈の附近に住せしが、成吉思汗の屬したる氏族は Bergadou 一名 Bourcan-Caldoun 山地方をその領土となせり、その山嶺は數多江河の發源地にして土拉 Toula 河の如きは貝加爾湖に注ぎ幹難、克魯倫兩河の如きは流れて東海に入り。チに據ること多し卷末の註第二に蒙古諸部族の名稱を悉く擧ぐ。

この山岳を始として貝加爾湖南に連互せる爾餘の山脈は蒼蒸したる岩石をもて覆はれ樹木は僅にその罅隙に生長するのみ、その最高峯は常に千古の白雪を戴けり。谿谷の地質は概して砂礫を含むこと多くこの地方の河岸は牧場にあらざれば即ち松、縦并に赤楊の森林なり。

タルタリー地方の氣温は海拔の大なるより同緯度に位せる歐洲各地に比するに寒威凜烈なり。貝加爾湖水は通常四五箇月間氷結し同地にありては攝氏寒暖計にて氷點以下二十五度を示すこと珍らしからず。屢々北光を認むるを得可く暴風地震亦多し。Pallas, Voyages 佛譯巴里一七八五年第一冊三七八頁第六冊六二頁 Georgi, Bemerkungen einer Reise im Russischen Reiche 〱テルスブルグ一七七五年二ツ折本第一冊一三〇頁以下 Du Hald, Descrip. de la Chine et de la Tartarie chinoise 巴里一七三五年一ツ折本第四冊二〇頁二二頁 Wissen, Noort en Oost Tartaryen 第三版ムステルダム一七八五年一ツ折本第一冊第二冊各處。

この韃靼種族の容貌は頗る支那人に類すと雖も、一見その地球上に棲息せる爾他種族と異なるを認む可し。眼は褐色にしてその位置斜に鼻に對し顴骨秀でて之を壓するが爲に充分に開く能はず頬は廣くして鼻は平たく唇は厚く顔と頭とは圓くして皮膚はオレイフ色を帯び顴部の鬚は疎なり。これその特色とする所にして今日その後裔なる蒙古人カルムク人ブリヤート人も亦之を特色とせり。身長は中位にして肩幅濶く腰部狭し。

頭髮はその頂に於て蹄鐵形に之を剃り更に後頭部に於ても之を剃りその中間に生長せるものを辮髪となして耳の後に垂下せしむ。頭には扁平なる帽子を戴けり、その着色は種々あり縁は稍々脹起せるも後部には長くして太き

椽欄の尾の垂下するあり。その頭節の縁に結び付けたる二本の紐は之を頤下にて結束し、紐より垂るる二個の附屬物は風のまにまに動揺せり。衣服は腹部にて斜に之を重ね且帯もて身體に緊縛す。冬には二枚の裘を纏ひ一は毛皮を身體に密着せしめ一は之をその表となす。女子は頭被の高きを戴くもその服装は男子に異ならざるを以て之を識別すること難し。

家屋の築造法は人の高さほどの編垣を圓形に列ね之を支ふるに柱を以てし柱の末端を木環にて結束してこの小足代を覆ふに毛氈の織ぎ合せたるものを用ゐる馬毛製の綱を以て之を緊縛し家屋の周圍に繞らすにあり。出入口は必ず南に面し亦毛氈を垂れたり。頂の圓形を爲せる所は開きたるままにて空氣の流通炊烟の通過を容易ならしむ、竈はこの全家族を收容せる狹隘なる家屋の中央部にあり。

家畜は駱駝牛綿羊山羊殊に馬より成りその生計の資を之に仰ぎ之を以てそのあらゆる財産と爲せり。最も馬肉を好み、肉類を貯藏するには之を小片と爲して或は空氣中に曝し或は竈の烟に燻べて之を乾かせり。その他如何なる獸類の肉をも之を食ひその病に斃れたるをも嫌はず、又好んで馬乳の醱酵せるものを飲みこれを *Coumiz* と稱す。

加之、家畜は殆んどその總べての需要を満せり。即ち之が皮革は衣服となり、之が毛髪は毛氈綱繩の原料となり、之が腱は縫糸若くは弓弦となり之が骨は矢鏃となり之が糞を乾燥せしむるときは砂漠地方に於ける唯一の燃料となり、牛馬の皮革は之を製造するときには革囊となり、羯羊の一種なる *arjac* の蹄は直に酒を盛るの器となる。

家畜繁殖の必要より這般遊牧の民は絶えずその居を轉ぜざる可からず。その放牧せる地方の牧草漸く乏しきを告ぐるや家屋を疊みて家財器具幼兒と共に之を動物の背に託し一家を擧げて出發し新牧地を求む。各部族は皆固有の徽章を具へ之を家畜の毛に刻せり。何れも一定の範圍内を以てその放牧地となし季候に従ひて數々その居を轉ず、即ち早春山嶺に向て進み冬季の近くに隨ひ平原に歸るが如し。冬季に於ては家畜と雖も親ら蹄もて積雪を掻き除くにあらざれば食料を得る能はず、融解に次ぐに嚴霜を以てするときは家畜は堅氷を破碎し得ざるより飢餓に逼りて斃る。馬は脛の強壯なるを以てこの危険を感ずること少なく家畜のうちにおいては常にその數多し。故に韃靼種族の經濟は専ら馬群の繁殖を圖るにあり。

妻女の數は情慾の濃淡と資力の多少とに従ひて一定せず。處女を迎へんとするや先づ納幣として相當の家畜をその兩親に贈る。妻女は各々その家屋を有して別居せり。男兒は父の妻女にして寡婦となれるときは之を扶持せざる可からず、時にはその實母にあらざるときは之を納るるものあり。兄弟も又嫂姉の寡せる時は之を保護するの義務あり。妻女は頗る活潑にして夫を助けて牧畜のことに任じ衣服を製し毛氈を織り馬車を御し駱駝に駄し且馬に乗りて大膽なること男子に讓

らず。男子はその狩獵に出でざる時は、光陰の大半を懶惰のうちに過し、概して狡猾詭詐貪婪の譏を免れず、且風儀あしく飲酒に耽る、蓋し爛醉は敢て否徳なりと認められざるなり。

病に罹るものあるや槍をその小屋の前面に樹て看護の任に當る可きものの外は何人も入るを得ず。その死するや兩親故舊は大聲を揚げて泣叫び次で速に埋葬の事を行ふ、その既に惡魔の爲に制せらるるを信ずればなり。死者の前に食物と馬乳とを列ね、親密の關係ありしものは來て飲食を供す。墳墓の側に於て生前の愛馬を盛裝せしめて犠牲に供し、且家財弓矢を墓前に列ね故人をして他界に於て使用するを得しめんとす。この儀式に與れるものは二箇處に火を焚きてその間を通過し故人の小屋并にその一切の所有物を淨め、而して後故人の記念として齋を行ふ。

されど王侯の死するや家屋を造りて遺骸を中央なる座席の上に横へその前に卓を備へて一皿の食物と一杯の馬乳とを列ね、牝馬とその駒と盛裝せる牡馬と并に貴重なる財産とを擧げてこの家屋と共に葬る。この土饅頭の所在を秘密に附するが爲に頗る注意を加へ、或は守護を置きて人をして之に近づくことを得ざらしむ。故人の家屋は之を滅却し、三世代目までは諱みてその名を口にするを禁ず。

韃靼種族の信仰迷信的慣行は北方亞細亞に於ける爾餘遊牧民族蠻民と極めて相似たり。上帝を信じ之を *Tangri* と呼べり天の義なり。日月山川諸元をも崇拜せるが、家屋を出でては南方に

向て膝を屈めて太陽を禮拜し、又酒を注ぎて天體諸元に敬意を表せり。Oron と稱する木製若くは毛氈製の小偶像を家屋の内壁に掛けて神體となし、この偶像の前に跪拜し食事の際必ず先づ食物と馬乳とを取りてその口を磨し神に供ふること了て自から食せり。迷信的思想は頗る夥しく、死者は唯他界に赴くに過ぎず、他界の生活は、現世に異ならずとなせり。不幸は惡魔の殃する所なりと信じ、その怒を和ぐるが爲には或は犠牲を供へ或は僧侶の助力を乞へり、この幼稚なる宗教の僧侶は *Cames* と稱し、一身にして魔術師と醫師とを兼ね夢の吉凶を判じ、一切の卜筮を行へり。僧は自ら稱して神靈に通じその力によりて過現未の祕密に通ずと云へり。太鼓の音に和して咒文を唱へて神靈を迎へ次第に起き上りて痛く昏迷の域に陥り、遂にその神靈の移り來るや左右に跳躍し激しく顔面を歪め以て神託を宣ぶ、人生の大事一として之に諮らざるはなし、何となれば僧侶等は事實の豫言と相矛盾するものあるや、乃ち我學問は確實なるも之を覆へるの原因ありたりと唱へて以て愚民の盲信を失はざればなり。

この遊牧民族の生活は頗る軍務に従事するに便宜を與へたり。野獸と等しくその嗅覺聽覺視覺は極めて鋭敏なりき。周歲野營し幼少の時より乘馬弓術を練習し險惡なる氣候の下に困難痛苦を嘗めて身體を鍛へしを以て恰も戰鬪の爲に生まれたるやの觀あり。乘馬は、體驅小にして外觀美ならずと雖も極めて駿足にして能く疾驅し疲勞に堪へ嚴寒を恐れず且騎者の動作に忤はざるを以

て馬上の人は韁を用ゐずして之を操縦し優に騎射を行ふを得可し。戦時には一人にして能く數頭の駿馬を携へたり、何となれば皆乗馬して戦へばなり。身體を防ぐには革甲を以てし弓を以て主要なる武器となせり。故に遠距離にありて攻撃を試み遠矢を放ちて一進一退敵兵を惱ましその背進するの際も亦騎射を廢せざりき。然れども白刃を揮て接戦することは努めて之を避けたるが如し。但し乗馬の駿逸なるが爲機械的に突撃せること極めて多かりき。露營するや敵陣に逼り首將を中心となして圓形を劃せり。小家屋と馬乳を納れたる革囊と鍋とはその行李を組成せり。その家畜の一部を牽ひて出陣し以て之を食用に供し、携帶品を滿載し馬尾に繋げる革囊の上に坐して以て渡河せり。

部長は諾延(那顔) Noyan 又は Taischi と稱し民族の王に従ひその職は世襲なりき。各部は又族に分れ族長あり、同族に屬するものは常にその住居を共にし Noyan に對して毎年一定の家畜を納めたり。その服従せる部長の権力は無限にしてその財産は勿論その身體をも恣に處分するを得可し。組織せられて軍隊を成すや韃靼遊牧の民は絶えず戰鬥に従事しその一度一首領の下に糾合さるるや單り亞細亞のみならず歐羅巴の一部をも征服し了れり。

第十三世紀に於けるタルタリー旅行記には Carpin (Vincentii) Hungundi, Speculum historicum; Venetis, 1591 (ゴヤウ收む), Rubruguis, Marco Polo, Jean de Mandeville, Hatton の Histoire Orientale (一七三五年 La Haye 出版) Bergeron の Collection de Voyages (ゴヤウ收む) 等あり。近世旅行家の蒙古人カルムク人ブリアト人等の風俗を記載せるものには Pallas, Samlungen historischer Nachrichten mongolischen Völker-schaften ベテルスブルグ一七七六年一八〇一年出版(二ツ折本二冊) Geortz (上文を見よ) 四ツ折本(一冊なり) Benjman, Nomadische Streifereyen unter den Kalmluken リガ一八〇四年出版四ツ折本四冊。

第二章

蒙古人は文字を書するの術を知らず祖先の姓名と部族の歴史的事實とを口頭にて語り傳へたり。

この傳説に従へば成吉思汗の生誕に先つこと二千年前蒙古人はタルタリーの他の民族の爲に征服され殲滅されたることあり。この際殺戮を免れたるは、二人の男子と二人の女子とあるのみにして、その男女は阿兒格乃哀 *Erguéné-Coum* 山脈によりて遮斷されたる地方に避難したり、阿

古

兒格乃哀とは嶮しき岩石てふ義なり。この地方は地味肥沃なりしを以て腦古 *Tégonu* 并に乞顔

史

Kiyau Kiyauとは激流の義なり。 と呼べる兩避難者の後裔は迅速なる勢を以て増加し部族に分たるるに至れり。直立せる岩石 チに阿兒格乃哀山を目標せる蒙古人はその甚しく峻嶮ならざることを語りたりとあり。 の境界線内に限局されたるを以てこの人民は自

ら之を越ゆるの策を講ずることとなれり。初めこの山脈中より鐵鑛を採掘し來れる所ありしが茲に夥しく木材を積み之に火を放ちて七十個の風櫃を以て火勢を強め鑛坑を爆發せしめ以て新民族の爲に通路を開けり。成吉思汗の子孫なる蒙古朝の帝王はこの事蹟の記念祭を舉行し毎年除夜鍛冶等帝王の面前に於て熱鐵を鍛へ滿廷の人士嚴に之を上帝に謝するを以て典禮となせり。これ即ち蒙古 *Mongol* 人の起源なり、蒙古とは素樸羸瘦の義なり。チ參照

第八世紀の中葉に當りて阿兒格乃哀山脈より出で鞏難、克魯倫、土拉一に *Toungoula* 諸河の河畔に定住せる部族の多くは孛兒特赤那 *Bourte-Tchina* 狼鹿の義 を戴きて首領とせり。その八世

の孫朵奔巴延 *Dounboun-Bayan* 死するや火魯拉思氏 *Courlasse* より出でたる妙齡の妻阿闌郭鞏 *Aloung-Goa* と二子布兒古訥特 *Belguétei* 伯古訥特 *Bégoutei* とを残せり。夫の死後數

第

年にして阿闌郭鞏身めるあり、朵奔の父母之を詰るや答ふらく夜中夢寐に幾度か煌々たる光線の上部の窓より屋内に入り化して美少年となるを見たりと。Vedelou のタルタリー史に曰く契丹阿保機の母は四百年前の人なりと云へり。チのこの説を立つるに於て參照せり。は日輪懷に入るを見て身むと。チには *Alanoula* と云ふ舊史は思ふに *Alan Daffer* 金紀錄と題せるものならん。 光明に感じて生めるの子三人ありき、不哀

編

1 哈塔吉 *Boucoun-Catagui* 不固撒兒只 *Bouskin-Saldji* 并に孛端察兒 *Boudantchar* 即ちいれ

なり。チロ參照ハは一八二九年。ペテルスブルグの出版にして元史を譯出せり。チに朵奔巴延とあるを明史并に *Sanang Setsen* の蒙古史には *Toubon-merguen* とあり。後者は又阿闌郭鞏を *Tummed* 氏 *Khoritai* の女となす。ロハには阿闌郭鞏は *Toubon-merguen* の子問に *Boucon Khatagui* と *Pouhouni Saldji* 一名 *Bogdo Saldjiki* とを設け夫の死後は孛端察兒を生めるのみとし布兒古訥特、伯古訥特に就きては記載せず。蒙古名の讀法はチを始として亞刺比亞文字の書依頼し難し。故に *J. Schmidt* 氏の獨譯文を添え一八二九年にペテルスブルグに於て出版せる薩囊辭 *Sanang-Setsen* の蒙古文東蒙古史(蒙古源流)に依りて益を得たること多し。 孛端察兒は成吉思汗八世の祖なり。その生誕せるは第十世紀の初に當れりと云ふ。この三兄弟の後裔は頗る夥しく別れて數氏となりしが、蒙古民族に屬する爾餘諸氏と區別しその系統の清潔なるを示さんが爲に異稱して尼倫

Niroun と呼べり肋骨よりてふ義なり、ラシッドの言に據れば尼倫の通常蒙古人に於けるは恰も眞珠の介殼に於けるが如く、又菓實の樹木に於けるが如しと。この波斯の史家は更に云へらく、

この氏族はその數夥しと雖も皆能くその祖先を知れり、これ蒙古人が亞刺比亞人と等しく家系の記憶を傳ふることに注意を加へ、子女をして之を諳ぜしむること恰も宗教の初歩を教ゆるに異ならざるものあればなりと。卷末の註第三參照

李端察兒の孫瑪哈圖丹 *Makha-Toudan* チには土敦滿衛 Doutoun-menen とありへには Minen-Dou-doun とあり 年壯にして死し妻莫奴

倫 *Monouloun* とその七子 チには九子 を遺せしが、うち六子は母と共に不幸の死を遂げたり。初め

金帝の軍札刺亦兒部 *Djelairé* を克魯倫河濱に襲ひて大殺戮を行へり。茲に於て札刺亦兒部の、

ち七十戸は戰勝者の白刃を避けて莫奴倫の領土に移り飢餓に逼りて莫奴倫の諸子が乘馬練習用に

供し來りし牧地に於て草根を掘れり。チには Sordousoun と稱する草の根にして同地方に於て食用に供すと。ロ記事のうちには説けるは即ちこの草根なる可し。 莫奴倫は牧場の平面に凹凸を生ずるを好まず乃ち之を妨げんとして馬車を驅

りて札刺亦兒部人に向て馳せ怒に乗じてその多數を傷けたり。茲に於て札刺亦兒部人は莫奴倫の

馬群を逐ひ立てて之が復讐を試みたり。諸子は革甲を著くるに及ばずして直に走て戰へり。莫奴

倫憂慮休む能はず諸姫に命じて革甲を携へて諸子の許に赴かしめしに、その至るに及ばずして諸

子は既に戰場の露と消えぬ。札刺亦兒部人は次に莫奴倫をも殺せしかば家族のうち後に遺りしは

唯、孫海都 *Caïdou* の乳母の機智によりて薪材を積める處に匿はれしと、第七子納臣 *Natchin*

の肯布特氏 *Pays De Barbour* の女を納れて歸家に定住せしとあるのみ。

納臣 蒙古語にして猛禽の名なり 實母と諸兄との凶報に接するや直ちにその放牧せる地方に赴きしに唯少數の

老婦人ありて海都を撫育せるあるのみ。復讐の念熾に起りて抑ふ可からず掠奪せられたるものを

擧げて之を回復せんと欲せしも亦家畜なし、幸にして一頭の栗毛馬あり馬群の掠められし際惟り

遠く遁れて今又歸來せしかば納臣は乃ち之に跨り札刺亦兒部人の方向に之を驅れり。行く行く二

人の騎士の稍々離れて何れも手に一羽の鷹を携へて來るに遭ひしが熟視するにその猛禽は即ち曾

て諸兄の所有に屬せるものなりき。納臣騎士の年少なるものに近き之に問ふに栗毛牡馬の馬群の

先頭となりて東方に向へるを見ざりしやを以てす。少年は否と云ひ、納臣の來りし方面に當りて

鴨その他の野禽の有無を知らんとす。納臣は乃ち之れ有りと答へて嚮導の任に當らんことを約せ

しが、岸に沿ひて蜿蜒たる道路の屈曲せる處を過ぎて少騎士を刺殺し馬と鷹とをその屍に緊縛し

靜かに他の騎士に向て進み馬群に就きて同一の問を起せり。この騎士は又前の騎士を我が子なり

と稱しその何が故に久しく地上に坐せる儘なるやを問へり。納臣は衄血に苦めるなりと云ひ時機

の可なるを利し復たこの老騎士をも殺せり。暫しありて數百頭の馬の谿谷に放牧され之を守れる

兒輩の投石の戲に耽れるを認めたり。乃ち高きに攀ぢて四近を願望せしに何人をも見ざりしかば

直ちにこの少年等を襲ひて之を殺し雙手に鷹を携へ馬群を驅りて莫奴倫の住地に歸り海都と老婦

人等とを伴ひて肯布特氏の許に走れり。

海都の成年に達するや納臣と肯布特氏の一族とは之を戴きてその指揮を奉ぜり。新首領は札刺亦兒部人を攻めて之を服従し黒河 Kara Keul の河岸にその都を定めたり。諸氏の一族は次第にその保護の下に立ちその臣民の数は日々に増加せり。

ハ、ロ参照。Burgou 國は貝加爾湖東に位しこの湖水に流注する Burgoutchin 河よりその稱呼を得たり。

海都はモンゴリアの極端に位せる Bourgoutchin-Tougroum 地方にその國を建てしが死後三子を遺せり。長子拜桑古兒 Bai-Sangcor は托邁乃汗 Toumbagai-Khan の父にして汗は亦九子あり、九子何れも數多氏族の祖先となりしが人口は二世紀の間に著しく増加し、遂に一三〇〇年にはその多くは二萬戸乃至三萬戸を數ふるに至れり。

托邁乃の第六子哈不勒汗 Cabotil Khan は父に嗣ぎて蒙古部一派の首領となれり。傳へ云ふ汗の女眞皇帝の朝廷に入覲せる際食慾の非凡なるをもて帝を驚かし又一日酒宴に侍せるとき身を忘れて手を擧げて皇帝の髭を撫せしことあり。醒めての後その非禮の行爲たりしを知り處罰を請ひしに皇帝は笑て應ぜず且赦免の意を示さんが爲に歸國を許可すると共に厚く贈與する所あり。然るに哈不勒の發程するや間もなく北方支那の帝王は侍臣の邪なる進言に誤られて歸朝の命令を之に發せしにその拒絶に遭ひしかば支那の使節は強て之を拉して歸らんとせり。哈不勒は巧みに之を遁れて住地に歸りて奴隸をして追躡し來れる皇帝の官吏を殺さしめたり。

哈不勒汗は六子を遺せり諸子の威力と豪勇とは實に能く乞要特 Kiyoutes 即ち激流の異名に

適しこの稱呼は遠く子孫にまで傳はれり。始め阿兒格乃袞山を出でたる氏族はこの稱呼を冒せしが朶奔巴延の後裔蕃殖して幾多の氏族を爲し特種の名稱を採用するに至るや即ち乞要特の舊稱は何時とはなしに廢絶に歸せるなり。この頃蒙古部と塔塔兒部との間に謀殺事件起りてその結果交戦を來せり。始め哈不勒汗の義弟賽因特斤 Sain-Tekin 哈不勒の妻の諸子の實母にして翁吉拉特氏 Coultour Coultour の弟なり。 病を得しかば之を救はんとして塔塔兒巫者 Came を聘せしにその妖術效なくして賽因病に仆れたり。兩親は巫者を追ふて走りその靜かに歸り來るを待ちて之を殺せり。茲に於て塔塔兒部は直に兵を執て同胞の爲に復讐の師を起せり。この交戦に於ては哈不勒汗の諸子は何れも小舅の兩親に一臂の力を添えしがその戦局の結果に就きては何等の傳ふる處あるなし、その後海都の曾孫にして泰亦赤兀氏 Taidjoute の長たる俺巴該 Ambagai Caan 海都汗の第二子扯勒黑領昆 Tcherga Langkoun の子朶兒郭都魯赤那 Sourcandou Goutchina の子な。 Caan は可汗 Khaan の 妻を迎へんとして塔塔兒部に至りしに給かれて女眞皇帝の手に渡されたり、皇帝は哈不勒汗に官吏を殺されたるを忘れず俺巴該を木馬に釘せり、これ遊牧民族中の叛徒を罰するの法なり。

俺巴該の最後はその一族の復仇を促せり。即ちその子哈丹太石 Cadan-Taischi は哈不勒汗の子忽都刺 Coudilai 并に汗の孫にして成吉思汗の父なる也速該把阿禿兒 Yissougai Bahadour と合して女真人に向て兵を進めたり。忽都刺威力に於て將た勇猛に於て諸兄弟を凌ぎ、哈不勒

汗の後を襲ひしかば即ち選まれてこの遠征隊の司令官となれり。その兄烏勤巴兒哈合 Fukin-Bercan も亦塔塔兒人に捕へられて女真人に引渡され俺巴該と同じく虐殺されしを以てこの仇をも亦報ひんとせり。かくて忽都刺はあまたの蒙古部族長を従へて支那の領土に入寇し敵軍を破り多大の掠奪物を得て歸れり。

この忽都刺は英雄として蒙古詩歌の好題目となれり。その詩歌中に賞讃する所に従へば音聲は雷鳴の如く山嶽に反響し、腕力は熊掌に異ならず、宛も矢を折るが如く、容易に人をその掌裡に握殺し了れり。又その紘する所に據れば冬の夜大木を燃せる爐邊に裸體の儘にて眠を貪り火花燃片の飛び來るあるも毫も之感ぜず覺醒して火傷を知るや昆蟲の螫したると一般視せり。又一日にして能く一頭の羊を食ひ盡し且馬乳もて製したる酒を夥しく飲みたりと云ふ。

支那の遠征より歸りて後忽都刺は一族中の有志と共に狩獵に耽りしが偶々蒙古部に屬する朵兒奔氏 Dourban の武士によりて襲はれたり。隨從は微弱にして四散せしかば身を以て脱せんとして沮洳地に入りしに乗馬泥土に委して深さその頸に達せり、乃ち鞍上に立ちて一躍この泥濘甚しき地を出でたり。朵兒奔人時に追ふて彼岸に至りしがその馬を棄てたるを見て忽都刺を嘲りて曰く『乗馬を失ひたるの蒙古人何をか能くせん』と。

この間忽都刺に隨從せる人々はその計報を傳へたるを以て成吉思汗の父也速該は贊を携へてその妻を訪ひ共に葬儀を擧げんとせり、然るに忽都刺の妻は夫の死去を信ぜずして曰く『その音聲は能く蒼穹の上に達しその腕力は三歳の熊の掌に比す可きの勇士、焉くんぞ敢なくも朵兒奔人の手に仆れんや、その歸宅の遅れたるには又原因の存するものなくんばある可からず、我等は間もなく夫の出で來るを見るならん』と。

實に忽都刺は敵兵の去れる後沮洳地に歸戻し鬣を握りて乗馬を引き出し之に跨りて曰く『何ぞや、かかる懦夫の爲に屈辱せらる可きや、一物をも掠めずして空しく歸宅せんや』と。朵兒奔人の領域に當りて牝馬の一群の走るを認めしかばその先頭に立てる牡馬を抑へこの馬群を驅りて居住地に歸りしに時に人々集りて忽都刺の爲に哭泣しつゝありき。

忽都刺の兄、把兒擅把阿禿兒 Bartam-Bahadour 四子ありその第三子也速該把阿禿兒 Yis-sougai-Bahadour Yissouin 又 Yessouin は蒙古語にて九の數を指す、土耳其、韃靼種族は九の數を以て吉となす Yissouin-gai とは第九といふの意ならん、Bahadour Bightour は土耳其語にて大膽の意を有する異稱なり。

資性勇敢なるを以て選まれてその一族より成れる乞要特氏尼倫族の長となりたり。爾餘の蒙古諸族は勿論支那人塔塔兒人と交戦せること頗る夥し。賽因特斤の病を治すること能はざりし巫者を殺せしより以來哈不勒の子孫は塔塔兒人に對して常に敵意を挾めり。塔塔兒人は一一五五年に也速該に破られ且その役に際し領袖二人を失ひしがその一人は帖木眞兀格 Temoutchin-Oga と稱せり。この遠征より歸るや妻女の一人にして蒙古族なる斡勒忽訥特氏 Olconoutes に出でた

る謬倫額格 Ouloun-Eke 謬倫は雲の義にして額格は母の義なり。Samang-Seisen 六三。迭温布兒答克 Diloun

Bouldac チに據る。Samang-Seisen には幹難河に近き Deligun-Bouldac とあり。布兒答克は蒙古語丘陵の義なり。支那人は

第二册二二六頁 山附近の地に於て男子を擧げしかば最近の武功を記するが爲に之に命ずるに鐵木眞

を參看せよ。 Temoutchin 鐵木眞とは蒙古語にて精鐵の義なりハに譯出せる語彙には之を以て鍛冶の義を有する土耳其語 Temoutchi

と見え一八二〇年に恰克圖より北京に旅行せる Tinkowski は庫倫の西南百九十三露里に位せる Darkhan 山附近を通行せる

時タルハンとは蹄鐵工てふ義にして成吉思汗がこの山麓に於て鐵を鍛へたるが爲にこの名ありとこのことを聞き出だせり 佛譯

七年巴里出版) の名を以てせり。チに曰く鐵木眞生誕の日は正確に知り難しと雖も太陽曆にて七十二歳大陰曆にて

七十四歳と約三箇月の壽を保ちて六二四年の二月(一二二七年二月)に始まれる猪

年秋月の第十五日に崩じたりと云ひ又同じく猪年の出生なりとのことなればこの誕生の年は六週紀前の猪年即ち五四九年十一

月(一一五五年二月)を以て始まれる年となさざる可からずと。但し口には一一六一年、イには一一六二年とあり。綱目并に

蒙古源流に壽六十六とあるを是と

せば出生は一一六二年となる。

由是觀之成吉思汗として雷名の世に轟けるこの人物は、宇内に於ける二大帝國の目下の境界線

附近に於て生れたるなり。傳へ云ふそのこの世に生まるるや血液の凝塊を右手に握れりと。也速

該の領土は鞏難、克魯倫、土拉諸河の發源せる峻嶺 Bourcan Caldoun 山脈 當今蒙古人滿洲人は之

地方に位せるが妻、謬倫額格との間に更に朮赤 Tehoutchi 哈準 Catchoun 帖木哥 Temongou

の三子を擧げたり。その子孫は Butchoukin と異稱して之を爾餘の乞要特氏と分てり、灰色の

眼を有すてふ義なり。

也速該の死するや鐵木眞齡僅に十三なりしを以て父の在世中之に服従せる尼倫族は皆離叛せり。

蓋し少年の制令を奉ずるを好まず皆海都汗の後裔にして當時蒙古族のうちにおいて最も有力なる

泰亦赤兀氏の長、塔兒忽台 Targoutai 上文に見えたる哈丹太石の子なる阿達

り。俺巴該哈汗の刑せられたる後その家族と泰亦赤兀氏の領袖輩とは協同して之が繼嗣を立てん

と欲せしが新君主の選擇につきて一致を見る能はざりき。故に何人が之に代りて泰亦赤兀氏を統

率せしやは明ならず、唯その也速該の死後その子に對して干戈を執りし當時阿達爾罕の子塔兒忽

台を戴きて氏の長者となせることを知り得るのみ。也速該の寡婦は馬に跨り手に馬尾を以て爲り

たる蘇 Toug 支那に於て Taou 又は Tou と云ふ。支那皇帝が土耳其鞑の諸王侯を封冊するときこの蘇を授くるこ

は元來犛牛の尾をも を握りて親ら尼倫族を追撃せしが、僅にその少數を抑留し得たるのみ。

て爲れるものなり。 その後爾餘諸部の離叛するもの益々多く鐵木眞の勢力は漸く萎靡振はざるに至りしが、そのう

ち最も著しきは札只刺特氏 Djadjerates にしてその氏の長札木哈 Djamouca は色辰 satchan

の異稱ありき聰明の義なり。この札木哈の領土は Iron 河沿岸の地に位せしがその一族給古察兒

Tegoutchar 是騎士を従へて鐵木眞の領土なる撒里客額兒 Sari-kihar サリ 呼ハ

に隣せる鳥 近しとあり

拉該布拉克 Oulagai-boulak Oulagai は紅色の義にして Boulak は河源を意味す即ち水源に近き河流の義ならん、

後者に合すと云へる Oulai- 村に至りて掠奪を試みたり。その地に近く彼の莫奴倫を殺せしが爲奴隸と

して鐵木眞の祖先に仕へたる某札刺赤兒氏の子孫拙赤塔兒蔑勒 Djoudji Termela の居處あり



き。拙赤は身を馬群のうちに潜め給古察兒の近づき来るを見るに及び矢を放て之を殺せり。この殺戮の結果として札木哈は深く鐵木眞に對して敵意を抱きその極部下を擧げて泰亦赤兀氏に屬するに至れり、その他亦乞刺思氏 *Ikirasses* 兀魯特氏 *Orourtes* 那牙勤氏 *Boucalines* 火魯刺思氏 *Courlasses* 等も亦之に聲援を與へたり。

少年のとき鐵木眞は一日單身泰亦赤兀氏に捕へられたることあり。氏の長塔兒忽台異名を哈刺兒禿克 *Keretouc* と稱す憎む可きものでふ義なり。命じて *cangue* を以て鐵木眞を罰せしむこの刑具は二枚の板より成りその一面を凹形に削りて罪人の肩に宛て而して之を連結して以てその頸部を挾む。傳へ云ふ鐵木眞の俘囚となるや一老婦ありて之に奉侍し爲にその頭髮を梳り又刑具の皮膚に接せる所に毛氈の細片を宛ててその苦痛を和げたりと。鐵木眞は遂に脱走の策を發見し一小湖水に至りて身を匿し刑具を水中に投じ水面には唯僅にその鼻孔を出せるのみ。泰亦赤兀人はこの地に來りて搜索せしも之を發見する能はず、唯そのうちに一人の速兒都思人 *Seidoize* ありて鐵木眞を認めしも而も之を助命せんと決心せり。かくてその隊伍の遠く去るに及びて水中より少年鐵木眞を救ひその双肩を壓逼せる刑具を去りて我が住宅に案内し羊毛を積める車輛のうちに潜ましめたり。搜索隊は隈なく附近を尋ねしもその效なく遂に速兒都思人の家に來りて嚴密に搜索を試み鐵木眞を藏匿せる羊毛のうちに杖を投ずるに至りしも全く無効に了れり。その辭して去れる後速兒都思人は鐵木眞を牝馬に跨らしめ焙りたる獸肉を與へ武器を給して以て歸國することを得しめたり。然るにその後この鎖兒干失刺 *Schébourgan-Schiré* Sanang Seseu には と呼べる速兒都思人は泰亦赤兀人の憤怒を避くるが爲に出奔するの必要に逼り鐵木眞の朝廷に赴きしに鐵木眞はその受けたるの恩義を忘れざりき。

又ある時鐵木眞は更に大なる危難に遭遇せしことあり。即ち左右に僅に博爾朮 *Bourgordji* 并に孛兒忽勒 *Bourgouti* と云へる二人の友人のみを従へしとき十二人の泰亦赤兀人の一隊をなせるを認めたり。然るに大膽に之に向て進みしに十二本の矢は一齊に放たれ、口と咽喉とに負傷し苦痛甚しかりしを以て知覺を失ひて仆れ兩友の馳せ近づくや激烈なる搗搦に陥り地上にありて展轉煩悶せり。孛兒忽勒は乃ち數個の石を熱したる後之に雪塊を投じかくして蒸發氣の發散せる所に鐵木眞の口を暴露し遂に咽喉に凝結せる血塊を排出せしめ以て稍々その呼吸を容易ならしめたり。降雪甚しかりしかば博爾朮は着衣を脱し双手を以て負傷者の頭上に之を支へ終夜その位地を改めず積雪腰部に達するに及びり。天明に至りて馬上に鐵木眞を安置し以てその家に導けり。博爾朮と孛兒忽勒とは後年この際に於ける獻身の盡力の報酬として *berkhan* の特權 (博爾朮、孛兒忽勒、木華黎、赤老溫。俱以忠勇佐元主創業。賜號都爾木庫魯克(撥里班曲律)。猶華言四傑也。(通鑑輯覽) 若刺罕譯言一國之長。得自由之意。非勸成不與焉。太祖龍飛日。朝廷草創。官制簡古。惟左右萬戶次及千戶而已。丞相順德忠獻王(哈刺哈孫)之曾祖。啓昔禮。以英材一見。遇。擢任千戶。錫號若刺罕。至元壬申) (校者曰く、) (印は田中博士補註、舊本欄) を與へら 世祖錄勳臣。後拜王宿衛官。襲號若刺罕。(陶宗儀。輟耕錄卷一) (外にあり、今行間に收む、以下之に倣ふ)

れたり。チに據るこの稱號を帶するものはあらゆる課税を免ぜられ、戰時に鹵獲せる分捕品を悉く我が所有となすを得、何時によらず自由に君侯に謁見するを得、又罪惡を犯すことあるも八回までは處罰を受けず、その刑せらるるは唯第九回の犯罪後のことなりとす。へに據る

その後鐵木眞は首尾克く某々の氏族を制令の下に糾合するを得て泰亦赤兀氏に對して戰勝を博し始めて利運を收むるに至れり。敵騎三萬入寇し來れりとの報に接するや直ちに部下の兵を巴勒渚納 Baldjouna 河の平野に召集せり、河はインゴダ河に注げる細流なり。その兵僅に一萬三千人に過ぎざりしも進んで泰亦赤兀氏を攻めて之を破れり。この河畔に森林あり鐵木眞は八十の鏝を並列して捕虜を烹たりと云ふ。この成功を得たるの結果として多數の小部族は翻て鐵木眞の旗下に走れり。

塔塔兒部の一酋長摩勤薛里徒 Moutchin Soutou 一一九四年を以て金帝麻達葛 Madagou に對して叛を圖りしを以て帝は之を征服するが爲に丞相完顔襄 Onanien-Siang の指揮せる一軍を派遣せり。多數の遊牧民族も亦之と同時に叛徒に對して進軍す可しとの命令に接せり。鐵木眞は多年蒙古部の仇敵たりし部族を惱ますの好機至れるを喜び附近の地に於て得たる少數の兵士を召集し幹難河畔を發して塔塔兒人の女眞軍に追撃せられて北方に退却せるを襲ひその部長を殺しその輜重とその家畜とを掠めたり。チに分捕品のうちに嬰兒用の銀格車と之に附屬せる金鑰匙とあり蒙古人々に驚けりとの傳その熱誠に報ゆるが爲

完顔襄 一に完顔相。チにはこの將軍の支那官名 Tching-sang と云へる。は鐵木眞に察兀特忽里 Tchaout-Couri を擧ぐるのみ。イに據るにこれ宰相 Tsai-siang の訛れるなり。の支那官職を與へり
ハには察兀特忽里 Tchaou-tou-tou とありて叛徒を征する將軍の義なりと解す。チにはこの時金の宰相又容刺亦 Keraites 部長脱忽魯兒 Togroui に汪罕 Ong-khai の稱號を與ふ即ち王の義なりとあり

たり、即ち大將軍の義なり。チに據る。チに又曰く鐵木眞の時四十歳に達すと。されど一一六一年の出生とすればなほ三十三歳に過ぎず。イ、ロ、ハの三書を参照せよ。

一一九五年に鐵木眞はその臣下のうちに汪罕の弟札罕不 Diagamou 本名を乞謀 Keraiti と云ふ。兒察忽思不亦魯黑汗 Courda-couz-Bouyourouc Khan の第三子なり、幼にして唐古特人の捕虜となり札罕不の稱呼を得たり。チに據るに唐古特語 Dia は國の義なり。Gambou は大ホルールの意なりと云ふ。ハには Tchassi-Gambou と書す。Gampou は西藏人國王を呼ぶの稱也。を加へ、翌年客刺亦部長の訪問を受けたり。客刺亦部は Orcoun 河并に土拉河畔及び Caracou-roum 山の附近に定住せる人口の夥しき部族にして Tchirkir, Toungcaite, Toumaoute,

Sakiate, Eliate, Keraité の諸氏より成り最後の客刺亦氏より出でたる王侯支配の下に統一せられしより以來總稱して客刺亦部と云ふに至れるなり。その風俗習慣用語は頗る蒙古部に類似せり。この部族は基督教徒にして チに據る 第十一世紀の初に當りネストリウス派僧侶の手によりて改宗せられたるなり。Aboufardje の東方史に一〇〇一年より一一二一年までバグダードに於けるネストリウス派管長の位にありし Jean がキーラサン Marou 市の大僧正 Ebed-Yeshou より、東北方突厥の内地に住ぐる Cherith 人の王偶々雪中獵に出でて途を失し聖徒の出現して之を嚮導して歸國するを得しめし以來深く基督教に歸依し先づ商人の基督教を信するもの、滞在せるより之に途を問ふて洗禮の事を聞き僧都の派遣を求め來れりとの報に接し大僧正に命じて二人の僧都と役僧とを派遣せしめたりとのことを敘し且これを以て回教紀元三九八年(一〇〇七年) 基督教は既に遠き以前に於てのことなりとなせり。シリアの學者 Mares 及管長 Joseph の傳記中に之を説く

這般東方諸國に傳播せり。一六二五年に支那陝西省の首府なる西安府の附近に於て發掘されたる碑銘は七八一年の起草に係りネストリウス派のシリア出身傳道師が六三五年以來支那に根據を定

一一九七年春鐵木眞と汪罕とは月兒斤 Bourkine 氏に向てその兵を進めたり、是より先その一部は既に鐵木眞によりて撃破されしが遂に薛徹別乞 Satcha Bigui これ土耳其人の Beg 12 Bay 究第一冊三〇三頁にはこれ支那の伯 Beg より出づとあり 并に泰出 Taidjou 兩酋長を虜にせり。秋に至りて同盟軍は蔑兒乞 Mer Kites 部に對して遠征の師を起せり。この遊牧民族は又一に兀都亦特 Ondouyouste と稱し Ohoz, Modon, Toudacalin, Djoun 四氏より成り何れも別乞 Bey 托克塔 Toucta の命を奉ぜり。其一氏色稜嘎 Selinga 河附近孟察 Mouldje の地に戦ひて敗れしかば鐵木眞はこの戦勝によりて得たる分捕品を悉く汪罕に與へたり。かくて汪罕は鐵木眞の助力を得て漸くその權勢を回復するに至れるが翌年遂に之に謀らずして能く充分に兵力を整へ新に蔑兒乞部に對して遠征を試み不兀刺客額兒 Toucar Kehré に於し之に克ち托克塔の子士古思別乞 Tekoun Bey を殺しその弟忽圖 Coutou 并に赤老温 Djilaoun と呼べるその子をも捕へ、之が家族と家畜とも鹵獲せしが蒙古部長には毫も之を分配せざりき。托克塔王は色稜嘎河の彼岸貝加爾湖の東岸に位せる巴兒古眞 Bargoutchin に出奔せり。チ、ロ、イ、ノ參照。

一一九九年に汪罕と鐵木眞とは兵を合せて乃蠻部を侵せり。始め乃蠻部長亦難赤汗 Inardje Belga Boucou Khan チに據るに亦難赤は土耳其語堅信の人 Beg は爵位、Boucou Khan は戦功盛なりし畏兀兒古王の名也 の死後その二子太亦布哈 Tai Bouca 并に不亦魯黑 Bouyourouc は共に父の一愛妾を私せんとして互に不和を醸し反目益々甚しく遂に相分離せり。 不亦魯黑は股肱と恃める部民を従へて阿爾泰山脈に近きを濕渤巴失 Kizil tatch の山地に退き、兄、太亦布哈父の邸宅と平原地方とを保てり。チに據るに乃蠻とは蒙古語人の義にしてこの部族の領土は大阿爾泰山脈、Caracouroun 山脈并に Ardisch (齊桑) 湖、Ardisch 河流域及びこの河流と吉利吉思部との間に走れる山脈とを包括し北は右吉利吉思部東は客刺亦部南は Ouzgouie 西は Cancalis 部に界すと云へり。チに又乃蠻部に隣し Sikin bki と稱する部族ありその長 Cadir Bouyourouc Khan と云ひ乃蠻、客刺亦諸部よりも勢力ありしが成吉思汗の時代には衰微して Ongoues と合併せられたりその女子は乃蠻部の女子と共に美人の譽高かりきとあり。 乃蠻部の君侯は多くその汗號に添るに或は土耳其語にて強大の意味を有する古出魯黑 Goutschlouc 或は元帥の義なる不亦魯黑的稱號を以てせしが、太亦布哈は Tai yang 即ち大王と云へる支那の稱號を金帝より得て之を用ゐたり、蒙古人之を太陽 Tayang と發音せしかば歷史上この名稱にて知らるるに至れり。兄弟は依然として軋轢止まざりしかば鐵木眞と汪罕とはその閼墻に乗じて不亦魯黑を襲ひその部民家畜を掠むること夥しかりき。不亦魯黑は乞兒吉思部に屬せる侃侃助特 Kemir-Kendjoute の領土に避難せり。然るにその將に撒卜刺黑 Sairac と云へるあり可克薛古 Guengussu 土耳其語にて肺勞又は喉聲の義あり の異名を有せるが冬に至りて一隊の兵を率ひ進んで敵軍を破らんとせり。始め兩軍鋒を交へしも日暮に及びて止むなく戰場に相對持し天明に及びて將に輸贏を決せんとせしに、蒙古部なる札只刺特氏シァウエライトの長札木哈 Tchamouca 異稱して色辰 Satchan 即ち狡猾と呼びしもの鐵木眞を嫉みて汪罕に對して巧みに離間の言を弄せしより客刺亦部長は之に動かされ熾に火を焚きてその勢を示せる後秘密に營を抜きて去れり。この意外の離叛に遭ひて鐵木眞は

是非なく背進しかくて撒里客額兒 Sari-Kihar 客額兒は蒙古語平原の義なり の住地にその軍を班せり。

撒卜刺黑は親ら汪罕を追撃し、也迭兒阿爾泰 Iderou-Altai に至りしその二弟伊勒哈 Bilka

并に札罕不 Dja-gambou に追及してその家族家畜輜重を奪ひ更に客刺亦部の領土を侵し境上に

近き帖列禿 Daldou 并に阿馬撒刺 Amaschéra 地方に於て人畜を掠めたり。汪罕の兩弟は辛う

じて身を以て脱れて再び兄の軍に合するを得たり。汪罕は敵軍に對してその子伊勒哈鮮昆 Iico

Singoun 刊に鮮昆は支那にて公子の義なりとあり(校者曰く馮氏は相公之稱を以て之に宛つ) を派遣し又使を以て援をその同盟に乞へり。鐵木

眞は直ちに博爾朮 Bourgoudji 木訶里 (木華黎) Moucouli 孛兒忽勒 Bouroucouli 赤老溫

Tchilaocan の四將をして兵を率ひて出發せしめたり。その至らざるに先ち鮮昆敗軍せしも四將

は乃蠻兵を襲ひて之を敗走せしめ捕虜と云はず家財と云はず將た家畜と云はず悉くその掠め去れ

るものを回復し鐵木眞の命によりて悉く之を汪罕に還附せり。この功勞に酬ゆるが爲に客刺亦部

長は蒙古援軍の司令官たりし博爾朮に與ふるに衣服一襲と黄金の大杯十個とを以てせり。刊、ハに據る

間もなく鐵木眞の弟朮赤哈薩兒 Djoutchi Cassar は兵を進めて乃蠻部を伐ち大勝を博するを

得たり。ハ、ロ参照。

托克塔は是より先二弟忽敦 Coutou 忽兒章 Ordjank を泰亦赤兀氏に遣りて援兵を出さん刊

とを求めしかば、泰亦赤兀氏の領袖中有力なる益庫兀庫楚 Oracou Hacooudjou 忽里兒 Courri

忽都答兒 Coudoudar 并に塔兒忽兀哈刺兒禿克 Tarcontai Keriltou 刊に益庫兀庫楚は激怒の意義を有し塔兒忽台は本名にして哈刺

兒禿克は精銳の 義也とあり は之と大砂漠のうちに相會せり。刊には蒙古の大砂漠なる斡難河地方に會すとあり、ハには斡難河附近とあり 汪罕と鐵木眞とは

一二〇〇年の春撒里の平原に會見を遂げて泰亦赤兀氏に對して兵を進むるの議を決し之を敗北せ

しめたり。忽都答兒と塔兒忽台とは追撃を受けて恩古特禿刺思 Elenkout-Tourasch と稱する

地に於て捕虜となりて殺害せられぬ。塔兒忽台を殺せるは速兒都思人鎖兒干、失刺の子赤老溫な

りき。この戦役の唱首たりし益庫兀庫楚は托克塔の兩弟と共に巴兒古眞に出奔し忽里兒は乃蠻部

に遁れたり。

一

爾餘蒙古諸部は既にその獨立の維持に就きて危惧する所ありしがこの新なる戦勝の報を得るや

益々安んぜず遂に隆々たる鐵木眞の勢力に反對して連衡のことを策するに至れり。即ち哈答斤

Catagrine 撒兒助特 Saldjoute 朮兒奔 Dourban 翁吉刺特 Courcourate 諸氏并に塔塔兒の

某部は相合同し、刊に據るに阿雷布拉克 Arou-pouliac 附近に於て その最も神聖視せる宣誓の式を以て盟約を堅うせり。刊に曰く是より先成吉思汗使節を哈答斤、撒兒助特兩部に派す。蒙古の例に従ひ公文脩辭の妙を極め謎語の如く解す可からず、一青年ありこれを説明して曰く我等と同族ならざるものも蒙古人は悉く我等に従へり我等と祖先を等らざるものは特に我等の友たらざる可からずと。兩部の民之を嘲り使節を辱しめて泰亦赤兀部と同盟し久しく成吉思汗に抗すと。 諸部の長は同時に劍を抜きて馬、牛、羊、犬、山羊各一頭

を屠りて下の如く誓へり、曰く天地よ我等の宣誓を聞け、これらの動物は何れもその種屬の長な

るが我等はその血を注ぎて誓はん、我等若し約束に背かば進んで彼等の如く死なんと。乃ち鐵木

編

眞と汪罕とを攻撃せんことを同意せり。鐵木眞等は翁吉刺特氏の長にしてその外舅たる特因諾延 Dain Noyan の密告を得て斡難河に近き虎敦 Courtoun 湖畔を發して捕魚兒 Bouyouir 湖畔に至りて前記諸部の兵に會し激戰數刻遂に之を四散せしめたり。

汪罕は冬季の近くに及び克魯倫河畔を發して忽八海牙 Courta-caya に赴かんとせしとき偶々弟、乞誅、客刺亦部の四將と共に弑逆の陰謀を企てしこと發覺せり。乞誅は通常唐古特名札罕不によりて世に知られしが出奔して汪罕の仇敵なる乃蠻部長太陽汗の許に身を寄せたり。汪罕は冬季を忽八海牙に送り鐵木眞は女眞領土の境に接せる察哈察兒 Tchanga-tchar にありて之を過せり。

この地に冬季を過せる後鐵木眞は曩に連衡して鋒を向けたる諸部の酋長を伐ちたり、即ち蔑兒乞の阿刺兀都兒 Alac-Oudour 泰亦赤兀の哈罕太石 Carcan Taischi 塔塔兒の察忽兒 Tchaour-cour 開兒伯克 Keleiker 等その勇氣と云ひ將たその野心と云ひ何れも當り難きものありしが、鐵木眞は之を捏木兒格思 Temourkin の野に襲ひて大勝を博しその所有せるものを掠めたり。蒙古部制御の權を一身に收めんと志せる豪傑は少からざりき。この競争者は即ち乞要特月兒斤氏の薛徹、札只刺特氏の長札木哈、鐵木眞の弟朮赤、并に阿刺兀都兒等にして最後に最も有爲にして最も幸福なりし鐵木眞はその弟を除く外悉くその競敵を仆すを得たりき。

翁吉刺特氏亦乞刺思氏 Ikirasse 火魯刺思氏 Couroulassé 朮魯奔氏塔塔兒部哈斤氏并に撒兒助特氏等は一二〇一年に刊 Kian 河畔ハに據るチには Kem 河畔とあり誤なりに集會して札木哈を選みて元帥となし之に古兒汗 Gour Khan の尊稱を贈りたり、即ち大汗の義なり。次で土拉 Toulra 河畔に至りて鐵木眞に反對するの同盟を締し宣誓して曰く『我等の畫策を洩すものあらば正にこの土の如く毀たれ將たこの樹木の如く切斷さる可し』と。之と同時に足を舉げて土塊を崩壊せしめて河中に投げ劍を抜き樹木を伐りたり。かくて不意に強敵を襲はんと欲せしが鐵木眞は火力台 Courtidai と云ふものより豫めその謀計を漏れ聽き進んで之れに向ひ亦堤火兒罕 Yedi-Courgan の地に之を破れり。札木哈は出奔して僅にその命を全うし翁吉刺特氏は鐵木眞に服従せり。チ、ロに據る。ハはこれを一二〇〇年のこととなし戰地を哈里雅爾台和囉噶 Kalaiarai-Khorog とす。

一二〇二年春鐵木眞は兀魯回失魯楚兒只特 Oulcoui-Sidjoudjout 河兀魯回河は興安嶺の支脈 Seyouka 山より發源す。畔を發して塔塔兒部征伐の途に上れり。この部族は女眞の國境に近き捕魚兒湖四近の地方に住し當時七萬戸あり分つ Toutoucaloutes, Ilchi 按赤 Ans- Tchagan, Coutin, Térate, Tercouiri の六氏となし何れも其氏族の長を戴き互に劫掠をこととし交戦止む時なかりき。塔塔兒部と蒙古部との間には從來軋轢殊に甚しかりき。鐵木眞は塔塔兒部の察罕、按赤二氏を侵して之を征服せり。始め陣中に布令して約すらく敵を破るに當り心を分捕に奪はれず激しく追撃を行はば全勝を

得たるの後平等に鹵獲物を分配せんと。然るに伯父、火察兒 *Cordjir* 叔父答力台 *Daritai* 從弟阿勒壇 *Altan* 阿勒壇は把兒壇把阿禿兒の第二子捏坤太石 *Nesun-Taischi* の子なり。火察兒は忽都刺哈汗の子にして哈不勒汗の孫なり。答力台は把兒壇把阿禿兒の末子也。 令に背きしと聽

き鐵木眞はその分捕品を沒收し且鹵獲の分配に際して一物をも與へざりき。この嚴明なる處分は三領袖の感情を害するの原因と爲り、三領袖は汪罕の爲に鐵木眞に對して不都合の行爲に出で、その極應て汪罕鐵木眞彼此の間に不和を醸すに至れり。

蔑兒乞部長托克塔は巴兒古眞より歸り來りて鐵木眞を攻めんとせしが再び敗北せり。茲に於て乃蠻部長の弟不亦魯黑汗の援助を求めしにその軍旗の下に集まるもの朵魯奔塔塔兒、哈答斤、撒兒助特并に衛刺特 *Ouirate* 等の諸氏族何れもその前敗に報いんとするの輩にして、この多數の軍隊は一二〇二年の秋に汪罕と鐵木眞とに對して進發せり。汪罕と鐵木眞とは兀魯回河畔の陣を撤し支那皇帝の國境に沿える哈喇温赤敦 *Cararun Tehidun* 山の方角を指して退却せり。敵

兵追尾し來りてこの山嶺の間に入りしが偶々風雪大に起り寒氣凜烈を加へ士卒の多數は四肢凍りて動かず、既にして暗夜となり咫尺辨ず可からず人馬共に懸崖の麓に墜落せり。軍隊のこの隘路を通過し了するや最早之を用ゐるを得ず、敵の追躡を放棄するの窮境に陥れり。札木哈は乃蠻部の軍に合せんとして進軍中なりしもその遠征の全く失敗せるを見るや茲に背進の令を下し沿途同志の部族を掠め次で汪罕の軍に投ぜり、汪罕時に鐵木眞と共に阿刺兒 *Arat* 蒙古語 湖畔に陣せし

が應て汪罕と鐵木眞とはその冬季の舍營地を阿兒卻宏哥兒 *Alchia Cunnagour* ナに曰く成吉思汗と汪罕とは *Onoou*

(ラシツドは長城の義に之を用ふ)を超えて阿兒卻宏哥兒(宏哥兒とは蒙古語栗毛馬)に冬營を定む、これ昔、翁吉刺特の冬季の舍營地となせし所にして阿里不哥が皇帝呼必查と戦ひしこの地なりと。又呼必查の傳記には一二六一年の條にこの戰の事を敘し *Semoulai* 湖に近く *Khondia Bouldac* 山の前面に當れる阿兒卻宏哥兒の地に戦はれたりと記せり。ナには又 *Djai-Alcha* 山と稱してアレクサンドルの長壁の如く契丹と蒙古とを分割せる山脈ありと記せるありこれ確に興安嶺のことなり。宏哥兒とは北緯四十三度の邊に於て *Taal* 湖に注げる小流にして阿兒卻山に發源するが故にこの兩名稱を合して地名となしその關係を示せるならん。ナに長城を超ゆとあるは誤なり。ナには長城と興安嶺とを混ぜること少からず。に定め

たり。その地哈喇温赤敦山を距る遠からず大沙漠の中にあるも降雪によりて飲用水の缺乏を補ふを得可し。この地に滞在中のことなりき、鐵木眞は長子朮赤 *Djoutchi* の爲に汪罕の女、察兀兒別乞 *Tchaour-Bigui* を娶らんとし、汪罕は又鮮昆 *Singoun* の子禿撒(布)哈 *Cousch-Boca* と鐵木眞の女、豁眞別乞 *Coutehin-Bigui* との間に婚儀を擧げしめんと望みしが、何れも議熟するに至らず、却て汪罕と鐵木眞とをして相反目せしむるの媒介となれり。

鐵木眞は乃蠻兵の潰走せるの後札木哈を攻撃せんとの心算を抱きしに汪罕が却て之を歓迎せるを見て心竊に樂まず、一日君長汪罕に向て語て曰く『臣の公に對するは宛も砂漠の雲雀の如くなるに、他の臣隸は鶴に異ならず、雲雀は夏冬の別なく北方に住ふも、鶴は寒氣の近くや飛で南方に向て去る』と。この諷諭は以て汪罕の腦裡に札木哈に對するの嫌疑を起さしむるを得たり。然るに札木哈は又應て鐵木眞に向てその怨恨を霽らすの機會を捕捉せり。婚嫁の議二つながら熟せずして不和を醸せるに乗じて札木哈乃ち鮮昆に向て讒して曰く鐵木眞秘に客刺亦部の宿仇たる乃

蠻の太陽汗と交通すと。ハに機會を窺ひて鐵木眞を殺さんとの議を決せしに、容易に蒙古部の二領袖并に鐵木眞の近親三人を説きてこの陰謀に加はらしむるを得たり、三近親とは彼の鹵獲品を奪はれたるより鐵木眞に報復せんことを思へる人々これなり。鮮昆は父の異議をも顧みずしてその劃策を固執し、仇敵を捕獲せんとして詐て鐵木眞の請を容れてその子朮赤の爲に我が女を許さんと約し官吏を派して鐵木眞を招き我が帳幕に來りて華燭の典を擧げんことを語れり。鐵木眞は之に應じて發程せしが途上、實母の再歸せる蒙力克額赤格 Minguelik-Itchiga の許に立ち寄りその旅行を思ひ留まる可しとの忠告を受けて踵を返したり。

第一回の劃策失敗に歸せる後鮮昆は一二〇三年の春を以て不意に乗じて鐵木眞を襲はんと決せしに鐵木眞はこの新計畫を知るを得たり。汪罕の重臣の一人なる哀客扯闌 Yéga-Tcharan と云ふものその天幕に歸りて決義の次第を妻子に語りしに、偶々家畜の乳を齎らし來りし二人の牧人ありてその談話を漏れ聞き、相諮りて往きて蒙古汗に向てその一身に逼れるの危難を密告せり。鐵木眞直ちにその幕營を撤して失魯楚兒只特 Seloudeldjit 丘陵地方に近き一小偵察部隊を卯溫都爾 Mou-ondour-diss 山に派遣せり。汪罕も亦間もなくこの山の前面に進み來りしがその附近には紅色柳樹の森林ありき。牧場にありて馬群を管せる伊兒吉歹 Itchidai-noyan の二僕先づ敵兵を發見し互に競走して之を鐵木眞に報ぜり、鐵木眞時に哈蘭眞額列特 Calantchin-Alt

又 Calantchin Calaitchin と云ふ、チには又哈蘭眞額列特は女眞の境上兀魯回河を去る遠からざるの地なりとあり。ロには Halachon 山又 Kalantchin 山、クには Kahagoun Oia とあり、これ興安嶺の一部なる可く之に發源せる Kalika 河支流のチ D'Anville の地圖にありて馬に跨れり。天明兩軍既に互ひに相認む可し。鐵木眞はその兵力遙に及ばざるを以て諸將を集めて軍議を凝せり。忙兀特 Mingoute 氏の忽亦兒答兒色辰 Youidar Satchan 進んで敵陣の背後に位せる丘上に我が纛 Touc を樹立せんとて士氣を鼓舞し、遂に首尾克く客刺亦兵の側面を過ぎて奎騰 Koutban と稱する前記山上にその旗幟を建つるを得たり。鐵木眞直ちに兵を提げて客刺亦部兵を襲ひしにその部族のうちにおいて最も大膽なる只兒斤氏 Tchirkires 背進し Touncaite も亦潰走せり。蒙古兵は深く汪罕の麾下に進入し鮮昆は面部に矢傷を負へり、而も鐵木眞は奮闘努めたりと雖も結局衆寡敵せず僅に命を全うしてその軍を斂むるに至れり。チに曰くこの役は蒙古人の間に有名となり今日なほ之を語ると。時に鐵木眞の部下離散し去るもの多かりしかば乃ち巴兒渚納 Baldjouna 附近に退却せり、その地殆んど水涸れ泥土より搾出せる水滴を飲むの窮境に陥れり。鐵木眞はかく落魄せるもなほ左右を去らざる部下諸士忠誠の誼に動かされ、手を合せ天を仰ぎて爾今以後卿等と甘苦を分たんと約し、若しこの言に背くことあらば巴兒渚納トには巴兒渚納の水源とありて巴兒渚納は泥水の義なりとあり。ハには鐵木眞 Baldjouna 河畔に退くとあり。鞏難河北方の高原に Baldjouna 湖あり、北流インゴダ河に注ぎ、Touca 河の水源なり。の泥水の如くならんと云ひ、之と同時にこの水を飲みてその杯を部下の將校に與へしに諸將は決して鐵木眞を棄てざる可しと宣誓せり。當時隨從せる諸士は後に特に巴兒渚特延 Baldjouniens と稱せられ厚く

その誠忠に對して報賞を得たり。鐵木眞に敵の謀計を告げたる牧人乞失力克 Kischik 巴歹 Badai リにはこの二人は蒙古の Keligoues 出身なりこの語は蒙古語にて吃の義ありと見ゆ の二人はその後 Terkhans の列に加へられたり。 ハ、

照ハ 鐵木眞は次で鄂爾 Or 河畔に赴き更に哈勒哈 Cala Calah は興安嶺に發源し捕魚兒湖に注ぐ今の Badaha 河なり 河附近、哈兒

達克哈特 Galtakai-Cada の地に達せり。將士漸く聚り來りその兵數四千六百人に上れり、哈勒哈河に沿ひてその軍を進め董嘎 Tounga 湖畔の脫兒哈火魯罕 Tourouca Courgan と稱する地に駐營し同地に於て Iltourkine 氏の阿兒海者溫 Erti-Djoun と云へるものを使節として客刺亦部汗の許に派せり、その使信に曰く

古 史 『嗚呼、汗よ、我父よ、曩に卿の叔父古兒罕 グエルン がその兄不亦魯黑 ブユルグ の死後卿が政權を掌握し且二人の弟を殺せるより卿を追躡するや、卿は哈刺溫哈卜察 Caravoun Cabdjial チに據ればこれ黒林の義にしてその地 Belta 河畔にあり に避難し包圍攻撃を受けしが、當時卿をしてこの地より逸出することを得しめしものは即ち我父にあらずや。卿は我父より得たる援兵を以て歸國し古兒罕を忽兒奔塔刺速特 Courban-Belassout に求めて之を驚かせしかば古兒罕は百計盡き僅に二三十人を從へて難を合申 Cauchi 河西即ち唐古特也 に避け爾來復た出で來らず。卿が我父と諸達 アムダ の約を結びしは當時のことにして、余が卿を我父たる汗と呼ぶはこれが爲なり。これ卿が受けたる第一の大恩義なり。 チに據る

『乃蠻部の卿を攻撃せしとき卿は西方日輪没するの國に出奔せり。余は卿の弟、札罕不 Tchass-si-gambou が女眞皇帝の領土にあるを聞き、直ちに人を派して余の許に來らんことを誘ひしに、途上蔑兒乞部民の追撃を受けたり余は我兄弟二人をして急に赴かしめ以て之を殺さしめたり。これ卿が受けたる第二の恩義なり。 ハに據る

『卿が落魄して余の許に來訪するや、卿の膚は衣服を透して現はれその状宛も太陽の雲を隔てて見ゆるが如く、飢餓に惱める卿の歩行は遅々として宛も勢を失へる火炎の如くなりき。余は直ちに兵を握て立ち木里察克速兒 Mouritchac-Moual に駐營せる部族を襲ひてその羊その馬その財産を奪ひて悉く之を卿に贈れり。卿は羸瘦憐む可きものありしも余は半月の間に於て卿を肥滿ならしめたり。これ卿が受けたる第三の恩義なり。

『蔑兒乞部民不兀刺客額兒 Toucara の野に在りしとき余は托克塔別乞 トクタクベギ の許に使節を派せしもこれその情を窺ひしに過ぎざりき。然るに好機乘ず可しと見るや卿は豫め余に圖らずしてこの部族を襲ひ、托克塔の妻とその兄弟の妻女とを奪ひ、その弟忽圖 Toudoun 并にその子赤老溫 チロウオン を虜にしかくて兀都亦特蔑兒乞部 ウイトムトメルクキ を掠りしも而も余には一物をも贈らざりき。而も間もなく可古薛 クグイフス 古撒卜刺黑 クサフク が乃蠻部兵に將として卿の奥魯思 Oulouss を劫すや、余は四將を派して乃蠻部兵の捕獲に歸せる卿の部民を奪ひて之を卿に與へ再び卿の政權を樹立せしめたり。これ卿が受けたる

第四の恩義なり。

『余は鷹の如く赤兒古山 Tchourtonnen 上を翱翔し捕魚兒湖上に至りて卿の爲に足の藍色にして羽毛の灰色なる鶴を捕捉せり、即ち赤兒奔井に塔塔兒の部民これなり。次に余は古闌 Keule 湖に轉じて再び卿の爲に足の藍色なる鶴を擒へたり、哈答斤、撒兒助特、并に翁吉刺特諸氏の民即ちこれなり。これ卿が受けたる第五の恩義なり。』

『嗚呼、汗よ、我が父よ、卿は記憶せらるるならん曩に哈刺 Caria 河畔卓兒格兒痕 Tchourcan 山附近の地に於て、若し蛇の潜に我等兩人の間に入りて我等をして知らず知らず毒舌を弄せしむることあるも、我等は決してその奸策によりて給かれざる可く、互に會見を遂げて説明を盡すまでは必ず同盟を破棄せざる可しと誓へるを、然るに卿は余に關する蜚語を正さずして余と相遠かるるに至れり。嗚呼汗よ、我が父よ、何すれぞ余が卿に歸服せしめたる同一部族の力を假りて余を追撃するや。何すれぞ暫く休息して卿の兒孫をして穩に安眠の快樂を食ふことを得しめざる。卿の子たる余は決して、余の配當は餘りに些少なり、余はその更に大なることを欲すと云はず、又余の配當は愈惡なり、余はその更に良好なることを望むと云はず。車の兩輪のうち其一若し破損せるとき牛をして努めて之を牽かしめんか牛はその頸部を傷く可く、即ち之を解かざる可からず、茲に於てか車輛は道に横はり盜賊來りて之を掠奪せん。然らずして若し依然として牛を之

に繋がんか牛は飢餓に逼りて因頓斃死せん。余は即ち卿の車輛の一輪にあらざるか』

鐵木眞は又使節をして伯父火察兒并に從弟阿勒壇に云はしむらく『卿等は余を殺さんとて謀計を凝せり。されど余は把兒擅把阿禿兒の子并に薛徹 Satcha と泰出 把兒擅把阿禿兒は鐵木眞の祖父にして泰出は伯父、薛徹は從弟なり

而して共に哈不勒汗の裔也。 』とに志を語れることあり、焉くんぞ難河畔の我等の領土をして主君なからしむる

て余は之に就て悲めり。余は捏坤太石の子なる火察兒 Catcher 卿に向て云ひぬ、我等の汗たれと、卿は之を聽かざりき、余は又阿勒壇、卿に向て云ひぬ、卿は君侯たりし忽都刺哈汗の子なり又君侯たれと卿は之を欲せざりき、かくて卿等が余に卿自ら我等の長たれと云ひて固執せるより、余は卿等の請を容れて部長となり父祖の領土と風俗とを保守せんことを宣言せり。チに據 余は最

上權を窺視せることありや。余は我等の祖先が三河 斡難、克魯倫、土拉の水源に於て 附近に占領せる地域の他人

の政權の下に移るを避けんとて全會一致の投票もて選舉されたるなり。ハに據 諸余は思へらく多數人民の君長として余は須らく余に忠誠を盡すの人士に贈遺を爲さざる可からずと、即ち家畜帳幕婦人小兒等を夥しく劫掠して之を卿等に分ち、卿等の爲に平野の禽獸を圍み卿等の方向に山嶽の禽獸を驅れり。チに據 卿等は汪罕に仕ふ、而もその變心の甚しきを記せざる可からず。汪罕の

余に對せる措置は卿等の目睹せるが如し、その卿等に對するや更に甚しきものあらん』と。ハ參照

鐵木眞は栗毛馬と銀の裝飾を施せる鞍并に絡頭とを戰鬪の際に遺失せるを以て之を還附せんことを汪罕に請求せり。次で鐵木眞は汪罕を始としてその子鮮昆、札木哈、火察兒、阿勒壇并に爾餘の領袖に向て各一人の吏員を派遣して相互の間に蟠れる紛議を解決せしめんことを切願し、捕魚兒湖附近に會合地を定めたり。

汪罕は使命を聽き了てその子の忠告を聽くを欲せざりしことを譴めたり。伊勒哈鮮昆父に向て曰く『今や時局は著しく進捗せるを以て我等は計畫を委棄するを得ず。我等は唯全軍を擧げて攻撃を加ふ可きのみ他に策の取る可きあるなし。我等勝利を得ば鐵木眞我等に仕へん、我等敗北せば我等鐵木眞に仕へん』と。乃ち諸領袖に代りて鐵木眞の使節に答ふらく我等は何人をも派遣せず唯進軍せんのみ、紛議は總て干戈に訴へて之を決せんと。チ、ハに據る。

鐵木眞は使節出發の後既にその兵を進め翁吉刺特氏 *Coungcarates* の一部族を掠め巴兒渚納の岸に至りて駐營せり。

哈蘭眞額列特カランジンアルトの役後汪罕は起特忽魯哈特額列特 *Caït-Coulgat-Alt* にその營を移せり。時に忽都帖木兒 *Coutou-Timour* 荅力台、火察兒、阿勒壇、札木哈等その盟主を暗殺せんと陰謀を企てたり。汪罕その謀計を偵知し之を襲ひてその輜重を奪へり。荅力台、蒙古部尼倫の一部并に客刺亦部のうちなる撒哈夷特氏 *Sakiales* と共に鐵木眞に投降し、火察兒、阿勒壇、并に塔塔

兒部領袖忽都帖木兒は乃蠻汗の朝に赴けり。

鐵木眞は一二〇三年の夏季を巴爾渚納河畔に過せしが、秋に至り客刺亦王攻撃の目的を以て斡難河附近にその軍隊を糾合せり。而もその備へざるに乗じて之を襲はんとし詭計を施したり。初め弟朮赤チエチカサル、哈蘭眞額列特の役に於て大損害を蒙りその妻子をも客刺亦部兵に掠奪されしがその後獨り狩獵によりて僅にその口を糊し以て巴爾渚納河附近に於て鐵木眞に再會するの日に及びり。鐵木眞朮赤の二臣に命じてその主に代りて汪罕に使命を致さしめて曰く『余は目下、兄の何處にありやを知らず、されど余は我が妻子の卿の権力の下にあるを知る、嗚呼、汗よ、我が父よ、余は僅に樹枝を以て食と爲し土塊を以て枕となし、獨り寝ぬること既に久し、余は家族に會せんと欲するの意切なり。されど余は卿が如何に余を遇す可きやを知らず。閣下よ、卿若し余の前過を赦免し余の舊功を思はば、余は服従の精神を傾注して再び卿に歸せん』と。汪罕は往事は之を不問に附せんと約し且その言に一層の信用を置かしむるが爲に朮赤の使節に添えて一人の官吏を派遣し、少量の血液を牛角に盛りて齎らしこの血液を飲酒に混じて以て宣誓を行ふの用に供せしめたり。ク、ロ、ト、スにはこの習慣の Scythes 間に行はれしことを記せり。Pomponius Meia 曰く、行く行く蒙古 Axiacae の誓約するや必ず血液を注ぎて之を飲むと Axiacae も亦スキタイ種の一なり。 使節の一人は遙かに遠く鐵木眞の軍旗を認めたり。客刺亦部の官吏の乗馬駿足なりしを以てその疾驅主君の陣營を驚かさんことを恐れ、馬蹄に細石を夾みたりと稱して下乗し、客刺亦部人に向

て暫く歩を駐めて之を除かしめんことを請へり。かくて使節を抑留せるの間に鐵木眞來着し二人の使節を嚮導と爲し部下の兵士に令して口に枚を啣ましめ之を率ひて終夜進軍を繼續せる後、徹兒溫都爾 *Tchetcher-Ordour* クには Tchetchenur-Ora とあり、温都爾は蒙古語、丘陵の義なり、イにはこの山脈は土拉、克魯倫兩河の間に介在すとあり。 山附近に於て不意に汪罕を襲へり。激戦の後、汪罕父子は敗走して乃蠻部の領土に入りしが客刺亦部長は捏坤烏孫 *On-Oussoun* 土耳其語、兩河の義 と云へる地に於てその境上を守る乃蠻の兩將に殺されたり。兩將のその首を國王に送るや國王は痛くこの薄倖なる老翁を殺害せるを怒り、その髑髏を白銀のうちに藏めて之を保存せり。鮮昆は幸にして波魯土伯特 *Bouri-Tibet* チに據る。Carpin のタルタリーに旅行記に Buri-Tabeth とあり。 に避難せしが、暫らくして同地の住民その掠奪的所業を悪みて之を襲はんとせしより、更に喀什噶爾、和闐兩州に接近せる *Couman* 校者曰く、馮氏は「應是曲先之誤、蓋親征録」に奔れり、この地は土耳其種に屬する哈刺赤 Calladjies 部支丹克力赤哈刺 Kildj Cara の領土たりき。苦先古察兒喀思每 Kussatou-Tchar-Kaschme と云へる地に於て捕へられその妻子と共にこの支丹の命令によりて殺されたり、支丹はその後間もなく成吉思汗に歸服せり。

鐵木眞はこの戦勝の結果客刺亦部民とその領土とを征服せり。冬季に際し暫く帖蔑延客額兒 *Ziman-Kehre* クには Temégus 河、附近なりとあり 地方に於て狩獵の樂を縱にせる後その斡耳朵 *Ordou* Ordou とは王侯一門の帳幕なり、邸宅并に臣下の總稱なり、Ponte なる語はこれより出でたれどその意義は異なれに歸り、翌年の春を以て新銳の敵手を潰敗せしむるを得たり。

乃蠻部の太亦布哈は却て太陽汗の稱呼を以て世に知らるる王なるが、蒙古部長の勢力隆々たるを見て心安んぜず汪古 *Orgoute* 部長阿刺忽思的斤 *Alacousch-Tekin* に使節を派して、協力して正に勃興し來れる野心家に當らんことを切願し、その野心家を嘲罵して山林の領袖と呼べり、これ蒙古人が森林地方に住へるを以てこの譬喩を用ひたるなり。阿刺忽思はこの誘導の次第を鐵木眞に報じ且友誼の渝らざるを保證せり。 チに曰く汪古部は成吉思汗の時并にその以前に於ては契丹(金)の *Alai Khan* に仕へたり、蒙古人に類するの民にして總計四千戸ありき。契丹の帝王アルタン汗が蒙古部客刺亦部乃蠻部等の入寇を防ぐが爲に *Tchourchhe* 海(黄海)の海岸より *Caranouran* (黄河)の河岸まで長城を築くや之が守備を汪古部に委ねたり。この長城は蒙古人の *Ongon* と呼び土耳其人の *Bourcouca* と呼ぶるものなり。成吉思汗の時より汪古部長は阿刺忽思的斤忽里 *Tekin Couri* と稱せり。阿刺忽思は木名にして的斤忽里は爵號なりと。この部長の名に據りて按ずるに汪古部は土耳其種に屬せるが如し、何となれば阿刺忽思は土耳其固有の語にして色彩の様なる鳥の義あり、的斤は土耳其人部族の長を呼ぶの稱號、忽里は鐵木眞の與へたる尊稱なればなり (思ふに忽里にあらずして *Cou-ize* 又は *Fou-ize* ならんか) イには白 *Tata* と稱する部族の長 *Alaouise* は突厥種に屬すとあり、汪古と云へる名稱は支那の長城に起りしにせよ將た支那人の陰山と稱する *Ongou* 山脈より出でしにせよこの異稱あるが爲に吾人は遂にその木來の稱呼を知らず。 鐵木眞は之が機先を制せんことを決心せり。乃ち一二〇四年の春を以て帖木該 *Temégus* 河附近に *Couriltai* 即ち總會議を召集せり。諸將の意見は今の時季にありては馬匹羸瘦せるを以て須らく秋季に至るまで敵國に對するの進軍を延期す可しと云ふにありしが、鐵木眞の叔父斡赤斤 *Utchukin Noyan* 并に弟、別勒格合 *Belgoutei* 奮然起つこの意見に反對して曰く『同僚諸子は我馬匹の羸瘦を説くか。直ちに進發せん、乃蠻部民は傲語すらく我が弓矢を掠奪せんと、

乞ふこれが機先を制せん。諸子はその領土の尨大なるとその牲畜の夥多なるを以て之を畏怖せるが如しと雖も我徒に取りてこれ何かあらん、攻撃せん、世人は即ち云はん、彼の徒太陽を擒にせりと、我徒が太陽を擒にす可きは神ぞ知る』と。鐵木眞は之と同説を懷抱せしを以て前進を開始せしも乃蠻部の領土に達せざるに先ちて駐營し夏期の間全く爲すなく秋に至りてその進軍を繼續せり。太陽は阿爾泰山を發して杭海 *Khanggai* 山麓にその本陣を据えたり。その軍旗の下に集まれるは蔑兒乞部長 *ツグタ*、客列亦部族の領袖阿隣太石 *Altin-Taischi* 衛刺特の公子忽都哈別乞 *Coutouca Bigui* 札只刺特氏の領袖札木哈その他朵兒奔、塔塔兒、哈答斤、并に撒兒助特等の諸氏族なりき。兩軍大に相接近するや偶々敵營より逸走し來れる馬の羸瘦せるを見て乃蠻軍は蒙古軍の騎兵を以て不良の状態にありと判斷し、太陽は部下の諸將に向て徐ろに背進して更に一層敵を疲勞せしめ然る後之を攻撃せんと發議せしに、彼の先に客刺亦部の汗王を殺害したりし火力速八赤 *Courissou-Badjou* 怒氣を帯びて太陽の父亦難赤哈汗 *イナンチエ* は決して身の背面をも將た馬の臀部をも敵に向けしことあらずと詰りしかば、太陽はこの非難に激してその計畫を放棄せり。兩軍互に相對陣するに至り鐵木眞は中堅の指揮を弟朮赤哈薩兒に任せ、親ら軍を列ねて開戦に備へたり。札木哈蒙古軍の陣容を望見し、部下の將校に語て曰く『乃蠻人はこの軍隊を見ること綿羊并に山羊の牧群を見るに異ならず、思へらく能く之を粉碎し盡して其皮革をも將たその四肢をも剩さじと。余の所見に従へば今やその佳良なる状態にあること從來曾て見ざりし處なり』と。戰鬥の結果の可ならざるを卜し部下の將士と共に陣を撤してその跡を晦ませり。この日宛かも蒙古軍と乃蠻軍とは稍廣濶なる谿谷に於て接戦を開始し勝敗久しく決せざりしが日没に近づくに及び乃蠻軍遂に敗走せり。Candir は一二四六年に韃靼皇帝の許に赴かんとせる時乃蠻軍と哈喇哈魯軍とが Cingis 乃蠻の王は滿身に負傷してとある丘陵の上に退却せり、重臣等百方之を鼓舞せんとし火力速八赤 *クイリスバチユ* きは妻妾殊に寵姫古兒八速 *Keirbassou* の盛粧してその帳幕に待てることを絶叫せしもその效なく、血液を失ひて疲勞せるより太陽は地上に仆れて又動かざりき。茲に於て火力速八赤は爾他の領袖輩に向て説て曰く徒らに君王の最後を目睹せんよりは如かず再び戰場に歸り君王の眼前に於て潔よく討死せんにはと。かくて相列んで山顛を下りて蒙古軍に向て突進し、鐵木眞がその決死の勇氣を以て戦へるを認めてその生命を失はしめざらんと欲せしにも拘はらず降伏するを拒み悉く手に武器を携へたるまま戦死せり。古兒八速は臆て捕へられて鐵木眞の妻となれり。

乃蠻兵は戦勝精銳の追撃を受けて納忽 *Nacou* 嶺の最も峻峻なる側面に驅逐せられ、暗夜、斷崖の麓に墜落して戦死せるもの夥しかりき。チ、ハに據る。 蒙古兵は太陽の宰相にして畏兀兒種出身なる塔塔統阿 *Tatatingo* の敗走せるを執へ、その保管せる黄金の玉璽を獲たり。鐵木眞はその面前に引き出されたるを見て之に向てその帶有せる器具を携へて何處に往かんとするの意な

りしやを詰れり。畏兀兒はこの印璽は君侯より託せられたるものなれば、君公に繼ぎて相續す可きその家族に之を交付せんと欲せしなりと答へたり。鐵木眞はその誠忠を賞し次で印璽を熟視せる後その使用の方法如何を問へり。塔塔統阿答へて曰く『我が君公は金錢若くは穀物を徴收せんとし或は臣下に辭令を與へんとする毎に常に必ずその命令にこの印璽を捺し以て之が確實の證を示せり』と。鐵木眞は塔塔統阿に命じて之を保管し爾來之を使用せしむることなし、且諸子に畏兀兒語畏兀兒文字并にその法律習慣を傳習せしめたり。塔塔統阿は後に窩闊台に仕へて重用せられその死するや尊稱を贈られたり、Abai Kamusat 氏がその新亞細亞雜纂第二册六一頁に邵遠平の元史類編によりて起草せる "Tatars and Tartars" と題する記事を參看せよ。その他口、并に "Khatpou" の一八一四年に出版せるカウカサス、グルジア旅行記第二册と一八二二年巴里に於て出版せる伯林王立文庫滿漢書目の附録なる畏兀兒言語文字考を參照せよ。

タルタリー諸民族の間に有名となれるこの戦役に於て蒙古軍の中堅を指揮せる朮赤哈薩兒は且つ慎重に且つ勇敢にその任務を盡せるより兄鐵木眞は之に酬ゆるに一族中の上席を以てせしが、この役後塔塔兒、朵兒奔、哈答斤、撒兒助特の諸部は戦勝者に歸降せり。然るに蔑兒乞部は之に倣ふを欲せずして出奔せり。太陽の千古出魯克 Courtchioug は叔父不亦魯黑汗の許にその身を託し、蔑兒乞部長托克塔も亦往きて同じく之が保護を求めたり。

鐵木眞は蔑兒乞部民を追撃して先づその兀注思 Ouhouse 氏を襲へり、その長帶亦兒兀孫 Dair-Oussoun 部民と共に塔兒 Tair 河畔に駐營してその交戦の意志なきを聲明し、親から鐵木

眞の陣に至りその女忽蘭 Coultan を納れんことを乞ひ、且その部民馬群并に家畜缺乏して従軍する能はざるの事情を訴へたり。鐵木眞乃ち令して兀注思蔑兒乞部民を百人宛の隊伍に分割せしめ、その司令官を任命し輜重の附近に従屬せしめたり。然るに鐵木眞の出發後この隊伍は蜂起して軍隊の物資を掠奪するの擧に出でたり。輜重護衛の事を管せる蒙古の士卒は相協力して首尾克く之を撃退しその一旦劫掠せるものを克復するを得たり。茲に於て叛徒は逃走して僅にその生命を全うせり。

台哈勒忽兒罕 Origal-Cougan と稱する城寨に避難せる Ondoyoute-Merkite は遂に屈して捕虜となり、蔑兒乞部に屬する爾餘の麥端 Modounes 脫塔哈林 Toudacalines 并に Dijounes 等諸氏も次で同一の運命に遭遇せり。次に鐵木眞は薛楞格河附近に位せる呼魯哈卜察城寨に蟄居せる帶亦兒兀孫の部民に對してその兵を進めしに、これ亦等しくその兵器を抛て降服するに至れり。

間もなく鐵木眞はその仇敵のうちにおいて最も怖る可きの一人を獲たり、即ち札木哈はその部下に賣られて捕虜となれり。鐵木眞はその語達の關係あるを思ひて之を殺すを欲せず、その家族とその來て主君を賣れる部民の一部とを擧げて之と共に我が姪 Itchidai-noyan に與へ、爾餘の部民は主君に對する叛逆の罪を名として死刑に行へり。Itchidai はその捕虜をして久しく餘

命を貪らしめざりき。傳へ云ふ令して逐次にその四肢を切斷せしめしに札木哈はこれ公平なり、何となれば武運若し我に利あらば我亦敵を待遇すること之に等しかる可ければなりと揚言し、親らその關節を劊手の劔に加へてこの酷刑の執行を敏活ならしめたり。チ Dourians の條參 看 時日明ならず

かくてこの北方各地に於ける遊牧民族の多數は服従に歸せるを以て鐵木眞は彼の同盟を失ひて孤立せる塔塔兒部に對してその兵を進めたり。塔塔兒部は支那北方諸國のうちにおいて最も富むる部族にしてその氏族のうちにおいて殊に Tontoucalioutes はその強大なること遠く爾餘諸氏を凌げり。然るにその戰場に敗るるや殆んどその部族を擧げて滅却せしめらるるの域に陥り、この部民は蒙古部の宿仇なりとて婦女孩提に至るまで虐殺に遭へり。鐵木眞は嚴令して一人をも助命するを得ざらしめたり。然れども鐵木眞の妻妾に二人の塔塔兒出身の婦人ありその他、將士の妻女にこの部族より出でたる者多く何れも密に塔塔兒の嬰兒を助け、且鐵木眞の弟朮赤の如きも捕虜の分配に際してその千人を虐殺す可しとの命を受けしが、塔塔兒の生れなる妻の哀願に動かされ唯之が半數をのみ屠りて他の五百人を隱匿せり。後に鐵木眞この悖逆の所行を聞くや激怒當る可からざりしと云ふ。その他出奔してこの虐殺を免かれたる塔塔兒人も亦少からざりき。故にこの部族は全滅し盡せるにあらず、塔塔兒人にして成吉思汗の子孫に仕へたる者には將校は勿論部隊をも亦之を認むるを得可し。チ塔塔兒部の條參看。ハには全くこの記事を缺く。

然りと雖も當時假りにこの部族滅絶せりとするもその稱呼は忽ちにして之を滅ぼしたる英傑の經略によりて宇内に轟くに至りしなり、而して韃韃てふ稱呼は勿論頗る失當の嫌ありと雖も今日もなほ種々の民族の名稱として用ゐらるるなり。蓋し、支那人はこの稱呼の下に Schamo 沙漠北方の領土を占有せる同一種族の諸遊牧民族を包括せり、これ這般民族のうちにおいて塔塔兒人が最も支那領土に隣接せるが爲なりしか、或はその人口に於てその富力に於て最も強大なりしが爲なりしならん。而して支那人と西亞諸國と交通ありしよりその配下の遊牧民族に與へたる總稱は隨て同地方に傳播するに至りしならん、請ふ見よ成吉思汗勃興の發端より這般遊牧民族は西隣の民によりて韃韃人と呼ばれその名稱は次第に國民より國民に傳はりて遂に歐羅巴の末端に達せるを、而してその實戰勝の民族はこれ我徒が滅絶し盡せる仇敵の名稱なりとて之を蔑視して排斥せるなり。卷末の註第四を參看せよ。

鐵木眞親らタルタリ地方尙武民族の悉くその制令を奉ずるを見るや、その眼孔は自から渴望の情を漏らして支那に向へり、支那の殷富なる古來曾て北方遊牧民族の粗暴なる貪婪心を刺戟せざる事あるなし。從來の戰勝にては僅に人畜牧地を獲たるに過ぎず、各種の極めて貴重なる天產物工業品は將來戰勝の報酬たらざるを得ず。今や多數の野蠻なる民族を征服し得たるを以て亞細亞南部の文明國民を劫掠するの兵力は既に足れり。茲に於て先づ夏 Hia の王國に對して入寇せ

り、これ蒙古人が當時合申 Caschi と呼び次で唐古特 Tangoute と改稱せるものこれなり。
 Caschi 一に Coschi と云ふは河西の訛れるなり、チに曰く成吉思汗の合申王國に克つやその子窩闊台男子を設けしを以て合申と命名す、然るに合申飲酒の中毒を以て天死し當時未だなほ父の存命なりしより合申の名稱を廢して唐古特と改むと、これ蒙古語にて「カシ」國の義なり。之に君臨せるは黨項人にして國號を夏と稱す。この王國は支那の陝西省北部と長城の北方并に西方に當りて同省に接せる地方とより成り、東方と南方とは女眞即ち金の帝國に界せり。夏州は即ち今日の寧夏ニンシヤにして陝西の北に位し當時之が首府たり。夏王は支那人が黨項 Tang-kiang と呼べる西藏種一遊牧民族の首領李繼遷リキエエンの裔にして、この民族は支那と西藏との境界を劃し黄河の長流の水源に當れる山嶽地方に起れり。第十世紀の末葉に當り宋朝の支那統一に先ちて内亂の甚しかりしとき夏州地方の總督たりし李繼遷は帝國の新君主に服従するを拒み、却て契丹人の君主を戴きて之が宗主權の下に立てり。然るに一〇三四年その孫趙元昊チヤオユエンハオ宋帝の制令を奉じ夏王の稱號を授けられたり。夏王の領土は當初極めて隘少なりしも陝西地方を征服せるより著しく擴大せられたり。第十二世紀に至りては又金帝の附庸となり、而して李繼遷七世の孫なる李純祐リチンユ夏王の位にありし一二〇五年に鐵木眞其領土に入寇し夥しき戰利品を獲て北歸せり。ロ、イ、Dr Halde 支那誌第一冊、チ等に據る。チに成吉思汗先づ力吉里 Eimilki (又 Ekiniki, Iiki) と稱する堅城を圍み數日の後之を陥れ次に乞鄰古撒 Kelenkouschi (又 Kelenkouschi, Assakinkelouss) と稱する大都に進みて之を掠め莫大なる鹵獲品を携へて歸るとあり。ハには乙丑の年成吉思汗西夏を侵し Iairi 城を拔ける後 Iossoloto に進むとあり。綱目の記事も亦然り。Iairi は唐古特語聖山之義なり。(ハ、附録參看)。チには成吉思汗と同時に唐古特に君臨せるは Li-yang Schadigou なりとあれど當時王位にありしは一人にあらす。

第三章

韃靼種族の遊牧民族をして法令の下に歸服せしむるに至れるを以て鐵木眞はその新權勢に相當せるの尊號を要することなれり。茲に於て一二〇六年の春鞏難河源の附近にあらゆる民族の長官を以て組織せる總會議即ち Couritai を召集しその他に九個の白纛 Toungs を重ねて製したる一旒の軍旗を樹てたり。闊闊出 Guenkijou と稱するト者 Came あり蒙古人の間に信用厚く數々之に向て神託を傳へしが、嚴かに鐵木眞に聲明しけらく既に古兒罕 Gour Khan 蒙古語古兒は總體の義を有するを以て古兒罕とは即ち蓋世之汗の義也 即ち大汗の稱號を帯びたる幾多の君侯を擊破し滅亡せる後に於ては、彼の光輝の損傷せられたる同一の尊稱を用ゐるは甚だ以て相應しからず、天の命ずる處により成吉思汗 Tchinkguiz Khan Tchink は蒙古語強健の義 guiz は復數を示すの義なり 即ち強大なる汗と稱す可しと。諸氏族の長官はこの意見を贊成して鐵木眞を祝して成吉思可汗 Tchinkguiz Khacan の尊號を上れり。ハ、チ、ロ、ヘに據る。時にこの皇帝は四十四歳なりき。チに據れば五十一歳、元史は此年より治世の年紀を數ふ。
 術士闊闊出は帖卜騰格理 Bout-Tangri 即ち神像と稱する異名を有し、蒙古人の間に尊重を受けて數々灰色の斑點ある駿馬に跨りて昇天すと稱してその信用を博せるより揚々として萬般の間

題に就きて鐵木眞に向てその意見を吐露せるが、成吉思汗はその態度の無遠慮なるを憚らず、且その私に威福を弄するの意あるを察して、最早この詐冒者を信用するを欲せず、その鹵莽の言辭を述べんとして營所に來ることあらば弟朮赤に命じて直ちに之を殺さしめんとせり。間もなく術士は來て成吉思汗を訪ひ例に従ひて説法を始むるや、彼の膂力の非凡なるより哈薩兒蒙古語猛禽の總稱なりを參照の異名を得たる朮赤は痛くこれを蹴て皇帝の殿帳より驅逐し遂にその生命を奪へり。闊闢を參照の父は蒙古部晃豁壇 Conggotans 氏の千戸にしてその名を蒙力克モンケリクと云ひ成吉思汗が母、諤倫額格 Ouloung-tga を再歸せしめし人なり。成吉思汗は蒙力克に種々特別の待遇を與へ、常に我が右側に侍らしめて諸將の上に置けり。蒙力克はこの時宛も席に列なりしも親らその子の帽子を拾ひ上げ、之が生命危篤に瀕せりとは信ぜざりき。而もその非業の死を聞くや沈黙を守り之に就きて一語をも發せず、飽くまで成吉思汗に忠誠を盡したり。他になほ三子ありしが何れも千長たチに據るりき。

Corritfai の解散後成吉思汗は太陽汗の位を襲へるその弟不亦魯黑フユルグクに向て兵を進め、土耳其人の兀魯黑塔 Ouloug-Tag 即ち大山脈と呼べる山嶺の附近なる莎酌 Soudja 河に近く、その狩獵せるに乗じて不意に之を襲へり。この大山脈はバルカシ湖彼岸の方向に當り小阿爾泰山脈の西方に走て組成せるものにして西伯利と古突厥との境界を劃せり。不亦魯黑は殺害せられその家畜その他あらゆる財産は擧げて成吉思汗の掌裡に入れり。太陽汗の子なるその姪古出魯克コチルクは蔑兒乞王托克塔トクタと共にイルチシ河の灌漑せる地方に出奔せり。

一二〇七年に於て成吉思汗は唐古特が約の如く貢賦を獻ぜざるを以て再び之に入寇を試みその領土の一部を蹂躪せり。

同年成吉思汗は又二人の官吏を派して乞兒吉思 Kirgises 部王并に侃侃助特 Kenn-Kenn-Djoutes 部王の許に赴き歸服のことを遊説せしめたり。乞兒吉思部は土耳其種に屬し、その占領せる地域は廣大にして正南は小阿爾泰山脈によりて乃蠻部の領土に隣し東南は薛楞格河セレンガを境界線と爲し北と東とはアンガラ河に達せり。ラシッドの記する所に從へばこの地方は専ら遊牧民族の住へる處なるも幾多の町村の存在するものありきと云ふ。チ、コ第七世紀の中葉乞兒吉思人は支那皇帝の宗主權を認めて之に従ひ、七五九年には當時タルタリーの覇權を握れる回紇人に服するに至りしが、一世紀を隔てて後叛を謀りて回紇人を破りその政權を仆せり。かくて戰勝民族の君侯は支那皇帝より汗の稱號を受け乞兒吉思人の王國は乃ち回紇人の王國に代れり、而もその王國は永續せざりき。コ并に Vistator タ降て成吉思汗の時代には乞兒吉思人も將た侃侃助特人も共に

國王を戴き國王は何れも亦難兒 Inai の稱號を用ゐ、その一人は斡羅思亦納兒 Orrouss-Inai チの乞兒吉思部侃侃助特部の條にその四境等を敘せる後、その最も有名なる地方は Djein an bidi と稱しその君主は……と稱すとありて巴里王立文庫所藏の寫本は二種あるも何れもその名を缺けり。次に又他の地方の名は Bidi Queen (他の節には Bid

Atoun)と云ひその王は Orons Inal と稱すとあり。乞兒吉思の領土は Kam 河即ち露人のイニセイ河の兩岸に跨り而して侃侃助特は思ふに東流して北緯四十六度附近に於て Kam 河に注げる Kendjik 即ち小ケム河岸に住へるならん。この河口に建てられたる露、滿兩帝國の界標を Kem-Kemchik-Bon と稱す(クラブプロト露清國境に就きて参照)。第十世紀の亞刺比亞學者 Ebn-Haoucal の地理書はその寫本をライデン文庫に藏するがその乞兒吉思の領土境界に就きて記する處成吉思汗の時代に於ける居住地に同し。五六九年に皇帝 Justin の突厥の可汗 Disaboul の許に派遣せる大使 Zemarque の談にも乞兒吉思の名稱見ゆ。Memander 等の Excerptis de Legationibus に記し曰く突厥の可汗は Zemarque 2 Kherkins と稱する部族の一婢を と稱せり。この兩王は蒙古汗に對して服従を誓ひ音物として白眼の大鷹を貢せり。この大鷹は頭、脚、嘴、眼皆赤かりきとあり。トにはこの年(一一〇七年)成吉思汗 Alpan, Borou の兩使を乞兒吉思に送り間もなく Idumeie Aldar 使節を派遣し強猛なる大鷹を貢すとあり。

成吉思汗は一二〇八年の夏季をその龍庭 Yout 即ち直轄地に過し、秋に至りて古出魯克、托克塔を伐たんが爲めイルチシ河に向て進軍せり。途上、忽都哈別乞 Bey Coutouca の號令せる

衛刺特 Ouirate 部に遭遇せしが忽都哈は抵抗を試むるの力なくして降服の決心を定め、却てそ

の兵力を増して親ら嚮導の任に當れり。古出魯克と托克塔とは眞 Djem 元史類編には Tani 蟻河とあり Vastolon を參看せよ。

河附近に於て攻撃を受けたり。托克塔は戦死しその弟と其子とは畏兀兒の領土に出奔せり。古出

魯克も亦幸にして身を以て免かれ途を別失八里 Bisch-balik に取りし苦又 Couidia 土耳其斯坦の

州に至りそれより土耳其斯坦大汗の朝廷に赴けり、大汗の領土は畏兀兒領とトランス

オクシアナとの間に位し當時哈刺乞解 Cars-Khitai と稱せり、その君臨せる王室が契丹種族に

屬するを以てこの稱呼あり。チによ

一二〇九年秋成吉思汗は三度唐古特に入寇せり。先づ國王李安安全の世子の指揮せる軍隊を破り

兀刺海 Ouiraca 唐古特語長城に於ける通路の義なり、Ouri は於て又は中 是は壁 是は通路の義を有す。こ 市を略

し夷門 I-men 城を陥れ再び唐古特軍を破りて首都中興 Tchoung-sing 府に圍を置けり、これ

今日の寧夏府にして黄河の西岸に位せり。乃ち河水を轉じて同府に水攻を加へんとせしが、その

築造せる堤防決潰して洪水陣營に氾濫し已むを得ず圍を撤せり。次で一人の使節を中興府に派し

て媾和のことを提議せしに國王之を容れ且その女を成吉思汗に與へしかば成吉思汗即ちその師を

班せり。ロに據る。ハには唐古特人堤防を決潰して蒙古軍の陣する平原に浸水せしむとあり

タルタリーに歸るや成吉思汗は畏兀兒部王の使節を遣して服従の意を通ずるに會へり。畏兀兒

部は土耳其種にしてその領域は乃蠻部の西南に境を接せしが往古には Caracouroun 山脈に發

源せる Orcoun、土拉、薛楞格諸河の流域地方に定住せり。當初突厥帝國に服従せしが六二六年

より六四九年まで君臨せる太宗皇帝の時より支那の保護を受くることとなれり。かくて支那の官

吏はこの種族を組成せる各部民の領土に駐紮して之が統御のことに任じ、且畏兀兒の世襲部長は

帝國陸軍に於ける上將軍の稱號を受けたり。支那人の骨力斐羅と稱する部長は突厥帝國の國難に

乗じて七四五年に遂に之が滅亡を果しその領土を奪へり。この英傑はその君長たる支那の皇帝よ

り懷仁可汗 Boucour-Khan の稱號を授けられたり。これ即ち回紇帝國の開祖にしてその領域は

東は大砂漠の極處たる山脈西は阿爾泰山脈に達せり。されどこの王國は辛うじて一世紀間繼續せ

るのみ、八四七年に至りて乞兒吉思人と支那人との聯合攻撃によりて亡ぼされたり。畏兀兒人はその廣大なる領土のうちにおいて唯僅に Caracouroum 山脈の西南に位し天山山脈の崛起せる地方に於ける小侯國を保有せるのみ。その部長の隱退せるは即ちこの地にして之が子孫は亦都護 Idicourt と稱し首府を別失八里 Bisch-Balik Visdelou 參看 J. Klaproth 氏は亞細亞論第二冊のうちに別失八里市は今日の烏魯木齊の所在地に位せりと云へり。(校者曰く、馮氏之を誤とし、濟木薩の北なりと云へり) に定めて支那皇帝の臣隸となれり、亦都護とは土耳其語國君の義なり。畏兀兒人の宗教は最初亞細亞北部爾餘民族と等しく今日吾人の稱して薩滿教 Schamanisme と呼べるものにして、Carnes と稱する卜者は即ちこの草昧なる宗教の僧侶たりき。次で佛陀の宗教を採用して始めて文明の進歩を來し遊牧民族より進んで農業國民となれり。基督教も亦この民族の間に行はれ、且この民族は文字を用ゐるしがその多數は極めてサバ教徒 Sabéen の字母に類似せり。一一二五年頃この侯國は哈刺乞鰓新帝國の朝貢國となれり、この新帝國は契丹王國が女真人即ち金人によりて亡ぼされたる時支那より移住せる遼國帝室一契丹公子の建設せる所に係れり、畏兀兒人の領土には哈刺乞鰓皇帝を代表せる一人の太守の駐劄せるありき。成吉思汗が大砂漠の北方に於ける遊牧民族全部に對してその霸權を確立せる時畏兀兒人の亦都護即ち國王なる巴兒朮 Bardjouc この名はチに據る。イには續弘簡錄によつて(巴兒朮阿兒朮的斤) Partehoukorte Tikin とあり。Visdelou 氏は Balthou-arthe とあり又 Klaproth 氏の亞細亞論第二冊には Barchu-Are とあり。的斤は土耳其人の稱號なり。1110 九年の春を以て沙均 Schoukenn と呼べるこの太守を合刺火者 Carakhotia に於て殺

さしめたり、沙均が收斂甚しかりしより人民の嫌忌を受けしが爲なりと云ふ。成吉思汗はこの事件を耳にするや二人の官吏即ち阿勒潑魚土克 Alp Outouk 并に迭兒拜 Derbay を畏兀兒部に派遣せり。亦都護はその復命に當りて同じく二人の使節を之に同伴せしめて成吉思汗に云はしむらく大王の莊嚴にして雄偉なること藉甚たるより茲に使節を大王の許に致し、以て哈刺乞鰓の古兒罕との新關係を傳へしむ、蓋し大王の使節の突然來訪せるや小弟に至大の快感的驚喜を起さしめ「宛も積雲散じて光輝八紘を照らせる太陽を顯はし堅氷碎けて玲瓏澄澈たる清流を認め得るが如く懐籥たりし精神は忽に一變して歡樂その極まる處を知らざるに至れり、乞ふ弊邦を擧げて之を獻じ大王の子となり臣隸とならんことを望む」と。成吉思汗は曩に托克塔の弟と四子とが眞 Djien 河畔の戰に敗れて奔竄し來るや畏兀兒王の之が保護を拒みしを知れり。乃ち使節を欸待し更に之が歸國に際し阿勒潑魚土克并に迭兒拜をして之に伴はしめ言はしむらく、その聲明するところ若し僞なくんば親ら來りて服從の誠を表し且その寶庫に藏せる最も貴重なるものを獻納せよと。成吉思汗がこの使節を派遣せしは一二一〇年の夏のことなりき。而して一二一一年春唐古特に對する第三回の遠征を了りて斡耳朵 Ordou に歸るや、畏兀兒は宛も來訪しありて厚聘を齎らせり。Visdelou 并に Klaproth 參照。 成吉思汗は之と同時に更に哈刺乞鰓の古兒罕に隸屬せる土耳其種柯耳魯克 Turcs-Carlouks 部長にして Cayalik の領主たる阿兒思蘭汗 Arslan-Khan と阿力麻里 Alma-

Ilk の領主たる Ozar との投降を受けたり。Ozar は間もなく出獵せる時捕へられ古出魯克^{グヂルック}の命をもて殺されしかばその子 Sikanak Tekin は成吉思汗の命に従ひて位を襲ひ且その長子朮赤の一女に配するを得たり。阿兒思蘭汗は亦成吉思汗家の一公主を迎へ^く。且その女 Altoun-Bigun を畏兀兒王に許嫁せり。卷末註第五
を見よ

第 四 章

成吉思汗は今や幾多遊牧民族を配下に屬し之を以て組織せる強大なる軍隊の首領となりたれば遂に支那攻撃の計畫を抱くに至れり。三世紀以來支那帝國內の數省は外國人の桎梏の下にありき。唐朝は六一六年より九〇七年まで支那全土に君臨せるがその滅亡後、この厖然たる地域は節度使として各地に兵馬の權を握れる幾多官吏の横領する所となり十國に分割せられたり。この分裂の結果として内亂を招き、隨てタルタリーに於ける新國の勃興に便宜を與へたり。彼の女真人滿洲人と同種族に屬する契丹人は^{ラシツドは中亞遊牧民族に土耳其蒙古滿洲三種族の別あるを知らざりしもの如く、即ち哈刺乞解人は遊牧の民にして言語習慣極めて蒙古人に類すと云へり。}數世紀以來支那の東北に當り南は西喇河東^{シラ}は松花江西は興安嶺を境界となし大沙漠に接近せる地方に定住せり。この民族は交る交る突厥可汗支那皇帝の制令を奉じ八部に分れて各々その大人を戴けり。Che-liou 部は支那人の耶律 Ye-liou と發音せるものにして現時の巴林 Parin 地方を領有せるその部長阿保機 Apaki ^{チウチは Djoulandji と云ふ。} 九〇七年に最高權を得契丹の兵力を糾合して中亞の人民をその政權の下に服従せしむるの基礎を建てたり。九一六年に皇帝の位に即き更に十年を隔ててその殂するや統轄權の及ぶ所東海より西、阿爾泰山脈の間に互れり。その子德光

Tékouan 支那の一將軍の反逆を謀れるものに兵力を以て援助を與へ之をして戰勝を博して帝位に陞ることを得しめたり。新皇帝は汴ヒエン即ち黃河の南岸に位せる今日の開封府カイフオンフーにその首府を定めたるが、この勞に酬ゆるが爲に德光に對して直隸、山西、遼東諸省に於て十六州の地を割讓し且毎年絹布三十萬匹を輸す可きを約するの已むなきに至れり。支那皇帝は親ら契丹帝の臣隸となり、その之に寄する書信に於て親ら孫と稱し臣と稱せり。然るにその繼嗣となれるものこの義務を變改せんと欲せしを以て、德光は之に對して宣戰し黃河以北の支那州縣を征服し、汴を陥れ皇帝を執へてタルタリーに押送せり。支那の習慣に従ひ契丹帝は九三七年にその王朝の爲に新號を撰びて遼と稱せり支那語にて鐵の義なり。

唐帝國の滅亡以來五代の小王朝は相續ぎて開封府の帝位を占めたり。九六〇年頃宋朝その廢址の上に建國し殆んど支那全土を統一せり。この王朝の諸君主は契丹人に對して戰端を啓きしも曩に割讓せられたる十六州の地を克復する能はず、却て一〇〇四年に契丹兵支那に入寇せる結果宋帝は和を求むるが爲にその君主に銀絹の歲貢を約せり。

契丹帝國は二世紀間その命脈を保てり。之が帝王は支那の習慣儀式制度を輸入し支那の名作は之を契丹語に翻譯しその便を圖るが爲に九二〇年に阿保機の命を以て書寫の文字を創定したり。然れども文明の進歩は尙武的精神を弱め、無能懦弱の庸主は有爲英邁の明君に繼ぎて立てり。そ

の政府の無力に陥るや女眞 Tchourchès 支那人は之を Tschou-民族の一英傑は即ちその虚に乗ぜん

Edes と呼ぶ

とするに至れり、女眞民族は當時北は薩哈連江 Sagalien 即ち黑龍江を境界とし西は松花江に

よりて契丹人の故土に接壤せる地方に於て漂泊をこととせる遊牧の民なりき。この部族の首領阿

骨打 Agouta と云ふものその軍旗の下に多少の軍隊を糾合し一一一四年に叛を企てて契丹軍に

對して勝利を博し翌年女眞皇帝の位に即けり。その新國家に命名して Aïdjin Couroun と呼び

しが支那語にては金國 Kir-koué の義なり、曰く契丹君主の如く鏞を生ずる金屬の名稱を以て

國號と爲すを欲せざりしが爲にこの稱呼を擇べるなりと。

阿骨打は契丹帝國全土を征服し一一二三年に殂せるが二年の後その繼嗣は遼の第九代にしてその王朝最後の君たる耶律延禧チヤチヒを捕獲せり、遼は二百十九年にして亡びたり。

支那皇帝は女眞人の契丹人に對する企圖に聲援を與へたるのみか却て之を刺戟し以て契丹人の領有せる直隸省の一部を克復せんとせり。その目的は之を達せしも間もなく新興國の氣力旺盛なる却て契丹の舊帝國に比して遙かに危険なるを感知するに至れり。一一二五年に女眞兵は支那を侵し翌年深入して黃河に達し宋の帝都開封府を圍めり。當時支那に君臨せる皇帝は怯懦にして媾和を求めんとして女眞軍の營に赴きしが却て虜にせられてその家族を擧げてタルタリーに徙されたり、傳へ云ふ家族の數三千人以上に達せしと。一人の弟あり當時帝國の南部にありしを以て獨

り俘囚となるを脱かれ支那人に推されて皇帝の位に即けり。
 女真人即ち下文に於てその王朝の名稱に基きて吾人の金人と呼べるこの戦勝の民は支那の北部を略したる後更に揚子江を越えてその兵を進め浙江省の首府臨安を陥れその他幾多の戦勝を博し遂に一一四二年に宋帝と締結せる平和條約によりてその征服地を割讓せしめたるのみならず、更に年々純銀二十五萬オンス絹布二十五萬匹を貢賦として納む可しとの約束を得、宋帝は金帝の臣隷たることを聲明せり。爾來淮水漢水の水路は即ち兩國の境界線を組成し金人は直隸山西山東河南全省并に陝西南部を領有することとなれり。かくて宋帝は首府を浙江の臨安に移せり後に杭州と改稱せるものこれなり。

二十年の後金人は再び干戈に訴へて支那の南部に向てその領土を擴張せんとせり。此戦役は一六五年の條約を以て終結し境界は従前の如く確定せしも宋帝の歳貢を減額し且之に加へて典禮に變革を行ひ爾來宋帝は金帝に對して臣の君に事ふるが如くするを要せず姪の叔父に於ける敬禮を盡す可しと定めたり。然るに宋人一二〇六年を以て新に戦端を啓くや徒らに敗軍の不幸を招き、平和を購ふに際し支那皇帝は金人に對する歳貢を復舊するの窮境に陥れり。

金帝は第十二世紀の中葉に當り、その首府を今日の北京府に定め之を中都と稱せり。支那を三分してその一を保ちしより隨て支那帝國の習慣法律制度を採用し、且契丹人に倣ひ文字を創定せしめてその言語を記すの用に供せり、但しその用語は今日支那を統御せる滿洲人の言語に同じ。

金人の政權はタルタリ一全土に行はれたり。之が舊主たる契丹人はその臣下となり一一六二年に一旦叛を謀りしも金兵の征討に向ふや降服せり。是より先數十年前金人は蒙古人を伐ちて敗軍せしことあり、一一四七年多少の讓歩を爲して平和を購ひ始めてこの戦役を終結するを得たり、爾來蒙古人の部長は汗の稱號を用ゐるに至れり。

支那史籍に記せる此最後の事實は成吉思汗の大祖父忽都剌汗に關する蒙古人の傳説と契合せり。縫鞞人はこの時代に金帝に從へる支那の北部を *Khitai* 遼東を *Car-Khitai* 黑契丹と稱せしがラシツドに據れば金帝國の全土は之を *Tchacout* 即ち *Tchao* 國と呼びしと云ふ、支那人より得たる稱呼なるを疑なし。支那人は金人の略取せる支那の北部を *Khnanai* 宋朝の據れるその南部を *Manji* と稱し鞞鞞人は之を *Tchakras* と稱す。支那全土は支那人之を中國と呼ぶ、

「廿二史劄記曰。金元取中原。後俱有漢人南人之別。金則以先取遼地人為漢人。繼取宋河南山東人為南人。元則以先取金地人為漢人。繼取南宋人為南人。」その他又王朝の名稱をも國號とす。故に基督紀元前三世紀頃秦朝の時代には之を *Mani* と稱せり。印度人これを傳へて北方支那を *Tchin* 南方支那を *Maha-tchin* 即ち大秦と稱し轉じて波斯人亞刺比亞人の間に行はれたる *Tchin* *Matchin* となる。支那人は又女真人を *Nour-tchis* 契丹人を *Khitan* *atse* 即ち契丹子と呼べり。(チ、ロ并に *Abhalae* *Beidevei* *Hist.* *Siemens* 參看)。金の首府たりし今日の北京は是より先燕京兼都中京と稱し一一五三年に阿骨打第三代の繼嗣この地に遷都するや中都大興府と改稱せり、鞞鞞人はこれを *Khan* *balis* 汗の市即ち帝都と呼べり。金に五京あり遼陽州を東京、大同府を西京、今日の北京を中都一に中京、汴梁即ち開封府を南京、老哈 *Lohe* 河畔の大寧府を北京と云へり。

蒙古の新君主は支那攻撃の決心を立つるに當り女真人の羈馭の下に呻吟せる契丹人の應援を打算せり。且新皇帝の即位はこの計畫の實行に便宜を與へたるが如し、金帝麻達葛一二〇九年十一月を以て殂し同王朝第七代の君王繩果 *Tchong-hei* これ女真人名なり、支那名は允濟にして即位して 衛紹王と稱す *Visdelou* タルタリ一史參看 其の位を襲ひ一二一〇年使節を成吉思汗の許に派し之に即位を報じ且貢賦を求めたり。この使節は成

吉思汗に向て支那の典禮に遵ひ膝を屈して君長の命令を受く可しと主張せり。成吉思汗問ふて曰く『新皇帝を誰とか爲す』と、使節應へて曰く『公子縑果なり』と。茲に於て成吉思汗南方に向て唾して曰く『余は以爲らく天子 Tien-tse は須らく非凡の人物たらざる可からずと柔弱縑果の如きの徒にして果して能く帝位を辱しめざるを得るか、焉んぞ之に對して屈辱の禮を執るを得んや』と。馬に跨りて曠野に出で避けて遠く走れり。コ、イ、ハ參照。ハには鐵木真一二〇六年を以て帝位に即くに先ち金帝公子允濟を靜州に遣してその貢賦を受けしむ允濟その野心満々たるを看破し之を金帝に告ぐこれより叛意ありと見ゆ。而して Hyacinthe は靜州は Douhan Coucou 地方にありと註す。即ち長城の北、大同府を去る約三十リグに位せるなり。Gaudi には靜州は北緯四十度四十九分北京西經四度四十八分なる現時の Coucou-Khotoun (校者曰く馮氏歸化城に作る) なりと云へり。

準備悉く整ふや成吉思汗は脱忽察兒 Tougoutchar に二千人の兵を授けて不在中新に綏服せる諸部族の控制并に斡耳朵 Ordous 整備のことを託し一二一一年三月克魯倫河畔を發して支那攻撃の途に上れり。〔廿二史劄記曰。衛紹王紀。大安二年(一二一〇年)九月。忽書京師戒嚴。蓋因蒙古兵入也。然上文上年之戒嚴。別有兵禍。而非蒙古者。〕この遠征を企つるに先ちとある高嶺の頂に於て上天の援助を切願したり。即ち頸に帶を繫げ著衣の紐を解き跪きて禱りけらく『嗚呼、長への神よ、余は伯父、巴兒哈合 Bercan 并に俺巴該 Hembocai が阿勒壇汗 Altan-khans Altan と云ふ Aloun と云ふ、土耳其語蒙古語にて金の義なり、土耳其人阿骨打の子孫を稱して Alan-Khans と云ふ。の爲に辱しめられて殺害されたるを以て兵を擧げてその仇に報いんとす。若し夫れ之を嘉納せらるるならば願くば昊天より余の雙腕に援助を貸せ、而して下界の人類善神妖魔に令して合同して

余を援けしめよ』と。ナに據る。

蒙古汗は四子朮赤、察合台 Tchagatai 窩闊台 Ogotai 拖雷 Toulou に伴へり。その軍隊には極めて嚴密なる規律を實施し、土耳其人韃靼人の舊慣に遵ひて千人の大隊百人の中隊十人の小隊に分ちその指揮官は什長百戸千戸と稱せり。一萬人の大部隊は Tounan と稱し將軍之が指揮に任ぜり。大元帥の命令は Touadhis と稱するその幕僚によりて一萬人の司令官に傳へられかくてその部下に達せり。

蒙古の軍隊は全部騎兵を以て組織せられたり。各々身に革甲を纏ひ頭に革冑を戴き、弓斧劍槍を帶び、數頭の馬匹を従へたり、これが飼料は曠野の牧草能く之を辦ず可し。軍の後には多數の家畜を引率し兼程行軍の準備として各々少量の肉と乳とを携帶したり。〔并に Carpin, Marco Polo 參照。〕成吉思汗は長城に達するに先ちて約百八十リグの道程を経ざるを得ざりき。即ち蒙古語にて Gobi 即ち砂漠と稱し支那語にても砂漠即ち Scha-mo と呼ぶ。一大砂漠を横斷せざるを得ず。克魯倫河畔を發するの後間もなく既にこの乾燥せる曠野に入り滿目蕭條唯赤裸々たる丘陵の起伏し鹹水湖の點在せるあるのみ牧草清水乏しく樹木は全くその影をも止めず。歐洲人にしてこの砂漠の旅行紀を傳へたるは一六八二〇年に恰克圖より北京に至り翌年更に北京より恰克圖に歸れる露人 Linkowski の紀行の佛譯せられて一八二七年に巴里に於て Voyage à Péking, à travers la Mongolie と題して出版せられたる、并に大法主 Hyacinthe 氏が十年間の任期中北京に滞在して俄羅斯牧師長の職務を盡しチムコウスキー氏と同伴して歸國せる時の紀行のその蒙古誌に收められたる等なり。こ

の蒙古誌は第一編に紀行第二編に蒙古事情第三編に韃靼種族の略史第四編蒙古法律の沿革を掲ぐ。蒙古軍は支那と蒙古とを管制するの大高原を横断して山西省に向て進めり、同省の北境には砦を設備せる長城ありて之を擁護せり、これ支那の皇帝がタルタリ遊牧民族の入寇を防ぐが爲主として基督紀元の第五六世紀に於て黄海海岸より同帝國の西端までの間に築造せる所に係る。

金帝チユンヘイ纒果は境上を守備せる納哈塔邁珠 *Nahata-Maitchou* より蒙古人戰鬪の準備に汲々たりとの報告を得しが敢て之を信ぜんとせず、詰問すらく朕と蒙古部長との間には反目を惹起す可き問題の存するあるなし、何等の根據ありてかこの報告を致せると。納哈塔 *Nahata* 立證すらく蒙古人は絶えず矢と楯との製造に従事し、親らその車輛を挽く可しとの命令に接してその馬匹を休養し、且夏王は王室の一公主を納れてその部長の妻となせり、その帝國を侵略せんとするの意なるや疑ふ可からずと。纒果は納哈塔を以て徒に隣國の民に不平の理由ありと誣ゆるものなりと見做して之を拘禁せしが、間もなく蒙古人の敵意又疑ふ可からざるに至りしより之を釋放し、且西北路招討使鈕祜祿 *Nioukhourou* を蒙古軍の本營に派して媾和を提議せしめたり。然るにこの提議斥けられしを以て纒果は平章通吉遷嘉努 *Toungui Tsianganou* 參政完顔和碩 *Ouanyen Hoschou* 完顔は金の帝室の苗氏なり。 并に赫舍哩呼沙呼 *Heschéri Houschacou* をして叛徒に對して進軍せしめたり、赫舍哩呼沙呼は大同府即ち西京の留守なり。

蒙古軍はその戰鬪の初に當り長城の北に屯營せる汪古部長阿刺忽思斤アラクハシキョウの金帝に叛けるが爲大に便宜を得たり。下に據る曰く阿刺忽思は問もなく部下に殺され姓 *Sargoun* 之に代ると。 成吉思汗は將軍定薛 *Taschi* を破りて大水灤、并に豐利兩縣の地を略し、その將哲別 *Tchêbê* は通吉遷嘉努并に完顔和碩の兩將が未だその防備を完成し得ざるに先ち大同府を掩護せる烏沙堡の城寨を攻拔せり（九月）。烏月營城寨も亦同一の運命に遭遇せり。蒙古軍は大同府の東一リーグ一リーグは四四四四米なり一に位せる白登城のバイテン小市を奪掠し遂に同府を圍めり七日の終に至り呼沙呼度を二十五リーグに分つ。は守兵と共に開城し包圍軍を破て血路を求めしが、三千の部隊激しく之を追撃して北京の北に當れる昌平州を距る遠からざる地に至りしを以て、その部下の大半を失へり。成吉思汗は乃ち西京并に宣德府（宣化府）括弧のうちに記せるは今日の地名なり。以下做之。 及び撫州を奪へり。金の招討使完顔糾堅 *Ouanien Kioukien* 并に監軍完顔鄂諾勒（萬奴）*Ouanien Ouannou* は大同府を東に距ること遠からざる野狐嶺附近に至りて陣地を占む可しとの命令を受けたり。完顔和碩もその大部隊を引率して之が後繼となれり。成吉思汗その進軍の報を得て進んでホエルツイ權兒背に陣せり。明安 *Mingan* と稱する一將校あり糾堅より偵察の目的を以て分遣されしに却て蒙古軍に降りその敵軍に就きて知らんと欲せしあらゆる事實を漏らせり。之が爲に蒙古軍は糾堅の部隊を襲ひてその隊伍を紊亂せしめしかば騎兵は倉皇その歩兵を蹂躪し夥しき戰死者を出せり。

蒙古軍はこの發端の成功に乗じて更に敵の本隊に向て進みしに、完顔ワアンエンホシヨ和碩はその來るを俟たずして既に退却せり。而もその軍隊は追蹙せられ會河ヘイホフの岸に於ける城塞會河堡に至りて全く潰亂し和碩シヨ辛うじてその命を全うして免るを得たり(二〇月)。この戰勝のち蒙古軍は德興府テシフ(保安州)を攻拔し、その搜索兵は進んで居庸關キョウヨウカンに達せり。この要塞は斷崖を爲せる巖石の上に位し首府に至るの通路に當れる四リーグの峽路を扼せるを以て極めて重要なに、その守將完顔福壽 Oranien Fourtcheou は倉皇その守を撤し、將軍哲別チエベ容易に之を略せり。この地は帝都を掩護せるを以てその落城するや滿都人心恟々たりき。乃ち急遽之が防禦の策を講じ、男子をして兵器を携帶して出城することを得しめざりき。蒙古騎兵の枝隊長驅して中都城壁の下に薄るや、皇帝は狼狽して領土の南部に避難せんとせり。されど禁軍は皇帝をしてその決心を醸さしめんとし飽くまで奮闘す可しと誓約せり、實に蒙古軍は幾度か損害を受けて撃退せられ皇帝も遂に首府に止まらんと決心を定むるに至れり。完顔和碩は怯懦なる振舞の罰として貶黜されしが軍人社會はその罰の輕きに失するを議し爾來軍隊の規律は漸く卒伍の間に行はれざらんとせり。蒙古軍は至る處に戰勝を奏し且不意に御料牧場に闖入してその馬群を掠めたり(二月)。

之と同時に尤赤、察合台、窩闊台の諸公子は何れも一枝隊に將として轉戦し山西省長城以北の六州を奪ひ雲内、東勝州、武州、朔州、豊州、蔚州これなり、按ずるに陰山と長城との間に介在せる黄河の支流圖爾根河の流域ならん。現今はKoutou-potoun 市の地にあり。他の枝隊は又直隸省

北部の諸市を略して海に達せり。

蒙古兵は一二二二年の初に昌州 Tchang tcheou 并に桓州フアンチユ 兩市を下し將

軍木訶里 Moncouli が桓州と黄河との間なる長城以北の諸城寨を陥るるや成吉思汗は大同府

に圍を加へたり。金將赫舍哩ヘシエリ并に糾キウ堅の多數の軍隊を以て同市の援兵を増大ならしめしかば成

吉思汗は權兒ケン背 Tsuang-ell-tsoui 町附近に於て之を襲ひて全く撃破せり。次で(八月) 將軍奧敦

Otoug の指揮せる部隊をも粉碎せしが成吉思汗はその再三大同府に加へたるの攻撃撃退されし

を以てハ、イには成吉思汗この攻撃中流矢に中りて負傷し爲に退却すとあり。圍を解き全軍を擧げて長城の北に退却せり。〔譯者曰く元史類編太

二年)の條に帝破桓撫奉聖等州。師次野孤嶺。金將紇石烈。完顔九斤等。率兵四十萬來援。與戰于獲兒嘴。大敗之。(元史太祖七年の條にも略同様の記事あり)とありて元史類編には綱目資治通鑑俱作上年事と註せり。多桑はこの兩説を二個の史實と見做しもの如し。而して元史類編には之(○嘉定四年(西紀一二二一年)秋七月。鞏州國兵。與金人戰於灰河。凡三日に接して秋圍金西京帝中流矢遂撤圍とあり。〔勝負未決。成吉思皇帝選精騎三千馳擊之。金人大敗。金帥執中以百騎奔還。鞏州國兵至翠屏口。金人又大敗。九月攻奉聖洲。後二日破之。進野孤嶺。金人又敗。十月鞏兵至晋安縣。距燕京百八十里。五年正月。鞏州國兵至居庸關。金將完顔福壽棄關遁。金主允濟。以細軍五千自衛。欲奔南京。會細軍自相激厲。誓死迎敵。鞏兵損折頗多。遂敗兵。(宋劉時舉)撰續宋編年資治通鑑抄出〕

金帝國に對する成吉思汗の計畫は遼東に於ける契丹人の蜂起によりて聲援を得たり。始め成吉思汗の敵對を開始せる時、遼の王室の後裔なる耶律留哥 Ye-liu-Liouco と云ふもの金の軍隊に仕へ帝國北方境上に於ける千戸たりしが、他の遼人の子孫と等しく蒙古人の入寇に乗じて叛亂を企つるの意志ありと疑はれて龍安ルンアンに遁れ遂に一二二二年の初同地に於て兵を擧げたり。かくて成

吉思汗に向て款を通ぜんとせしに成吉思汗は之に先んじて部下の將校諾延按陳 Noyan Antchin を派して協同の敵に對する同盟を提議せしめたり。契約は金 Ken 山上に於て留哥と按陳との間に締結されたり。白馬黒牛各一頭を犠牲とせる後矢を取りて之を折り北方に向て宣誓すらく、彼は蒙古の君主に對して忠誠を盡くす可く是は主君を代表して金帝に對し契丹公子の保護を約す可しと。ロ、イに據る。イには奉天府の北四五十リ、イグなる金、四、山に於て誓約すとあり。留哥は忽ちにして援兵を要するに至れり。一萬六千の軍隊は完顔和碩の指揮を奉じて征討に向ひ、且金帝は何人にもあれ叛魁の頭を齎らすものには鉅額の金銀と重要な官職とを與へて之を賞す可しと約せり。留哥は其新主君に援兵を乞ひて三千人を得たり。かくて皇帝の軍隊を破りその輜重を奪ひて之を蒙古君主の陣營に送り更に著しき援兵を給與されたり。即ち將軍哲別は遼東經略を助くるが爲に支那に派遣せられたり。哲別は遼陽即ち東京を圍みたり。〔元史太祖本紀には七年（一二二二年）に哲別東京に克つとあり、然るに吾也而の傳にはこれを以て五年（一二一〇年）のこととなせり。〕始め同市に攻撃を加へたる後その威力を以て之を陥るるの困難なるを認め乃ち籌略を講じたり。即ち恰もその目的を放棄せるが如く背進運動を起し、而して遠かること數日程に及びたる後、その輜重を委棄し各駿馬の粹を抜きて之に跨り馬首を回らして兼程行軍を試み、市民の最早憂ふ可きものなしとて守備を懈れるに乘じ不意に城市を襲ひて之を奪へり。（一二二三年）留哥は契丹人群を爲して來りてその軍旗の下に集りその故土を回復せるより成吉思汗の同意を経て遼王の位に即けり。

蒙古汗は一二一三年再び支那に入り先づその退却後金人の克復したる都城の攻撃を開始し、再び直隸省の北部に於ける宣德府を略し（八月）、且末子拖雷と Altion の子なる駙馬赤渠 Tchirki とをして德興府（保安府）を圍ましめしに、共に陣頭に立ちて城壁を攀ぢその地を奪へり。成吉思汗は宣德府の南東十五リ一グに位せる懷來の城市に向て進み金の行省完顔綱 Ouanien-king 左監軍高琪 Kao-ki を破り大にその兵を虐殺せしかば死屍の地上に狼藉たること四リ一グの間に及べり。蒙古兵は長驅して長城の要塞古北口に至れり。金軍が再び居庸關の堅城に據れるを以て之に由りて中都に向ふの困難なるを知るや、同地の北方に監視軍を置き將軍怯台薄察 Ke-tedji 洪鈞曰く怯台、布札の二人なりと。をして之を指揮せしめ、乃ち首府の西方に轉じ太行山脈の狹隘を扼せる紫荊關の要塞を陥れ（八月）、山西直隸の境上なる五回嶺附近に於て金軍を破り、中都を西に距ること遠からざる涿州易州の兩市を攻拔せり。之と同時に古北口の城塞は契丹の將訛魯不兒 Oulian bar 之を獻じたり。

この頃帝都には悲惨なる革命の起れるあり。女眞の將軍呼沙呼は前年四月中一旦解職流謫の刑に遭ひしがその後、右丞相圖克坦鑑 Touctani を始めとして爾餘大官の反對ありしにも拘はらず右副元帥に擧げられたり（六月）。かくて往きて帝都の北に屯營せる軍隊の指揮に任せしが蒙古兵居庸關に據れるも悠々狩獵をこととせり。然るに皇帝の之に對して詰責する所あるや呼沙呼怒

りて遂にその復職以來念頭を去らざりし復讐の計畫を實行するの決心を定めたり。乃ち先づ蜚語を放ちて知大興府圖克坦南平原文録と南平とを混ず今之を改む。謀反の計畫ありと稱し軍に將として親ら帝都に至るの勅命を受けたりと偽れり。首府の軍隊の反對を恐れ虚妄の警報を以てその鋒を轉せしめんと欲し騎兵をして疾驅城門に近づきて告げしむらく、韃靼兵北方の郭外に逼ると呼沙呼は協議す可きことありとて圖克坦南平を招きて手から之を殺害し次で宮城に入り禁軍に代ふるに部下の軍隊を以てし政權を掌裡に收めたり。翌日皇帝を他の屋宇に移し數日の後一宦官をして弑逆を敢てせしめたり(九月)。

呼沙呼は百尺竿頭一步を進めて親ら帝位を掠奪するの意ありしも懸てその即位の多大の反對に遭遇す可きを感知するや即ち當時河南の彰德府チヤンテラフにありし帝室の一公子を奉じて帝位に即かしめたり。かくて完顔珣 *Ouanien-Siouh* は中都に赴けりその女眞名を吾睹補 *Outorbou* ウルクボ。成吉思汗は易州イナユにありて遼東より來會せる將軍哲別チエベを分派し南方より居庸關キヨウオンクワンを攻撃せしめたり。哲別はこの城塞を抜きてその北方に屯營せる將軍怯台薄察ケテボサと連絡を遂げたり。兩將はその部隊より精銳なる五千の騎兵を選抜し往きて首府の監視に任せる將軍怯台 *Kota* 哈台 *Khata* の軍隊を増援せしめたり。

この間蒙古の一軍は進んで貝河ハイホに至り高橋ガナチャオを渡らんとせしかば呼沙呼も亦その對岸に陣せり。

會々足に負傷せしを以て即ち車に乗じてその軍を督せり。一度蒙古軍を破りしも翌日敵軍は再び來りて戰鬪を開始せり。呼沙呼は疼痛激甚を加へしより出陣する能はず珠赫呼高琪 *Tchouhou-Kao-ki* に命じて五千人に將とし敵に向て進ましめたり。然るにその蹶蹶してこの命令を果さざるを見るや軍律に従ひて之に死刑を加へんと欲せしが、皇帝その舊功を思ひて之を赦免せり。茲に於て呼沙呼は高琪の兵力を増し之に攻撃を行ふ可しとの命令を與へ若し勝利を博せずんば斬に處す可しと脅逼せり。高琪は干戈を交へ日没より天明に至るまで苦戰頗る努めしも遂に是非なく城市より退却せり。乃ち呼沙呼のその威嚇を實行せんことを恐れて之が機先を制せんと決心し往きて元帥の第を圍みたり。呼沙呼は出奔して以てその命を全うせんとせしが垣を越えんとするに際しその著衣に妨げられて墜落しその手を傷けたり、高琪の部下馳せてその首を刎ねしを以て高琪はこれを携へて宮廷に赴き裁決を乞へり。皇帝はその罪を問はざりしのみか之を左副元帥の職に進めたり。

蒙古人が金帝國の北邊を擾せる當時帝國の西境は夏人の攻撃を被れり。始め領土の相接壤せる金と夏との間には八十年來平和の状態存續せしが、夏王が三度成吉思汗の攻撃を受け援兵を金帝に請ふや之を受くる能はざりしより乃ち條約を締結して蒙古兵の撤退を買ひ且一二一〇年に金人と不和を醸せり。この戦役はさまで激烈ならず一二一三年の末に至り夏人は境上の都市涇州キンチユを取

れり。

金帝國の兵力は更に離叛するもの多かりしが爲め益々振はざるに至りぬ。部下の兵を率ゐて成吉思汗に降附せる將軍一二に止まらざりき。成吉思汗は這般亡命者を四十六都統の部隊に分ち之を麾下に加へたり。怯台哈台の兩將を止めて北京の北方を監視せしめ、この年の終に至り爾餘の軍隊を三大軍團に分ち並び進んで黄河以北に於ける金帝國の領土全部を侵さんとせり。右翼は朮赤、察合台、窩闊台三公子の指揮を奉じて山西を征し、左翼は朮赤哈薩兒之に將として直隸の沿海地方を略し遼西即ち遼河以西の地方を劫掠し、中軍は成吉思汗その子拖雷と共に親ら之を率ゐる進んで直隸山東を伐ち遠く黄河の河畔に達せり。この三遠征隊に於て蒙古人の繁榮せる都城を鹵掠せること九十に及べり。金帝の軍は重要なる地點の防備に任じたるを以て村落の住民は都城内に立て籠りて之を守備す可しとの命令下りしも蒙古人はその在郷せるものを捕へ之を陣頭に立てて、その略取せんとする城池に近づき以て攻撃の事業を輔けしめしを以て、城中の被攻圍者は壘壁の高きより父兄を俯瞰するや敢てその兵器を執るの勇氣を失へり。黄河以北の全土にありて守兵精銳を集めて陥落に遭はず能く一般の災禍を脱れし城市は僅に九指を屈するのみ。大名府、眞定府、清州、雲州（今の宣化府東北、赤城縣、邳州、海州、沃州、順州（北京の東北六リグなる今の順義縣）通州（順天府の）これなり。蒙古人は北部三省に於て錦繡絹布幼年の男女家畜馬匹等を夥しく鹵獲せり。

一二一四年の一月より三月までこの遠征に従事し、四月全軍中都の西數リグを距てたる城寨大口 Tak-keou の附近に相會せり。成吉思汗は諸將に對してこの首府を攻撃するの允許を拒み、却て二人の使節を皇帝の許に派し次の如き使命を傳へしめたり、曰く『黄河以北に於ける卿の領土は悉く余が有に歸せり、剩す所唯中都あるのみ。卿をしてかくの如く無勢力の域に陥らしめたるものは天なり、而して余若し更に卿に逼らんか、余は親から天の怒を買はんことを恐る、故に余は退却せんとす。卿は余が軍隊を犒ひ以て余が部下諸將の怒を弭んぜざるか』と。丞相高琪は韃靼軍病に罹りて減少し且その馬匹疲勞せるを以て之を攻撃せんと意見を抱きしが、丞相完顔福興 Ouanien Fou-sing は指摘すらく若し夫れ軍隊をして帝都を出でしめ而して不幸にして敗軍することあらば士卒は勢ひ必らず四分五裂となり往きてその故郷に歸るを思はん、假りに戦勝を博したりとするも亦同じく軍隊の解散を來さん、帝都の安寧を危殆ならしむるは不可なりと。須らく媾和を承諾す可しと進言し韃靼軍退却の後に至りて將來の爲に劃策を施さんと説けり。皇帝はその建言を嘉納し使節を派して媾和の提議を爲せり。成吉思汗は帝室の公主を得んとせり。吾睹補は先帝繩果の少女を養ひて之を與へ且その嫁奩として鉅額の黄金并に無数の貴重品と男兒五百人女兒五百人馬匹三千頭とを之と共に送れり（四月）。かくて成吉思汗はその退却を開始せり。吾睹補は丞相福興に命じて居庸關の北まで之を送らしめしが成吉思汗はその地を越ゆるや夥し

き男女の捕虜を虐殺せしめたり。

蒙古人との間に和議成りしを以て(五月)、吾睹補は即ち帝國內に大赦を令せり。帝は又首府の餘りに境上に隣接して安固ならざるを信じ之を黄河の南岸に位せる河南省の汴京(今の開封府)に移すの決心を爲せり、これ即ち金帝の南京なり。汴一に汴梁とも云ふその帝國の北部を放棄するに等しきを説きて諫むるものありしもその效なかりき。乃ち宮中府中を擧げて出發し(六月)、中都には太子を遺し平章政事都元帥完顏福興ハに據る。チには Fouking とあり之に丞相 Tchingsang の職名を加ふ。イ、ロには承暉 Tchih-hei とあり。を之が傳となし更に左丞穆延盡忠 Mounien-Tsintchoung をして之が副たらしめたり。

中都の南西五リーグに當れる良卿リヤンシヤンに至りしとき皇帝は多數の護衛中の武人に命じてその合圍に際し給與せる馬匹甲冑を收公せんとせり。この命令を實行せんとするや契丹人を以て組織せる騎兵の一隊は亂を謀りその長官を殺し札達 Tchoda 筆什爾 Beischor 札拉喇 Tchalar の三人を推して首領となし中都に向て踵を返せり。平章政事福興はこの事實の報告を得しより首府を距ること二リーグなる蘆溝リキヤウに陣して之が通過を沮まんとせしに札達チオダと戦ひて敗績せり、札達は叛旗を擧げたるの後その安全を謀らんと欲し使節を派して降を成吉思汗に乞ひ且その援を求めたり。

成吉思汗はタルタリタルタリなる魚兒濼 Youuli 湖 Koloss の Aiman なる蒙古語に Tchagassoutai と云ふ地圖には Baihour-tchagan-nor とあり、ハ参照。附近をその夏期の駐營地となし往きて同地チオダにありしが、皇帝の出發と札達の謀叛とを聞くや敢てその

締結せる條約の破棄を躊躇せざりき。乃ち撒兒助特部の撒木哈把阿禿兒 Samouca Bahadour の指揮せる蒙古軍の一隊并に將軍明安ミンアンの統率せる女眞兵の一團とを分派し命じて中都を越えて札達チオダの部下なる契丹兵に合し協同してこの首府を圍ましめんとせり。

之と同時に成吉思汗の支那遠征中その參謀長たりし將軍木訶里モカリは留哥王リュウゴを助くるがため遼東に派遣されたり。これ金軍が王の領土の大半を克復せるを以てなり。

皇帝吾睹補は蒙古兵新に入寇せんとすとの報に接するや太子の生命に過あらんことを恐れ南京に來る可しとの命令を發せり。太子の出發するや中都の人心は恟々たるを致せり(八月)。この大都の蒙古兵に圍まるるや忽ちにして糧食の缺乏に苦むに至れり。皇帝は中都留守完顏福興ワンエンフイシよりその慘憺たる状態に陥れりとの報告を得、左監軍永錫 Young-si 左都監烏庫哩慶壽 Oukhourri Kingtcheou をしてその援に赴かしめ且李英 Liling に命じて大兵擁護の下に大名府より糧食を輸送せしめんとせり。李英は霸州パチウの北に於て蒙古兵に遭遇せしが(一二一五年四月)、時宛も酩酊して醉眼朦朧、戰敗は勿論その生命をも失ひ輜重は悉く敵の有に歸せり。この報を聞くや他の兩將の引率せる援軍は共に戰はずして潰え、中都はその最後の希望を失ひ蒙古軍は全くその外部との交通を斷てり。

中都留守福興はその僚友盡忠チンチヨンの老功の將なるを以て軍事上の指揮を之に一任せしが落城且夕に

逼るに及び成兵の全部隊を擧げて敵兵を襲ひ勝利を博するを得ずんば潔よく戰場に仆れんと提議せり。而も僚友のこの熱誠を有せざるを見るや親から守備を委託せられたる城市陥落の日まで生くるを欲せず、金朝歴代の靈廟に於て祖先に辭別せる後部下官吏の一人なる尙書省令史師安石 Sé-gan-tché ʷik へるに皇帝に向て遺表を奏上せんことを託し、書中に於て帝國の安寧に必要なる措置を指摘し平章政事高琪の不忠を非難し中都を保つこと能はざりし事情を辯明し次で所有に屬せるものを擧げて従僕に配付し毒を仰ぎて死せり(六月)。

之に反して穆延盡忠は將に蒙古兵の劫掠に歸せんとせるの城市を去るの準備にこれ汲々たりき。中都に留まりし妃嬪も亦共に出奔せんことを欲せしも將軍はかかる一行を伴はば脱走の益々困難なる可きを恐れ、之を給きて先づ出でて通路を開く可しと稱し、その愛妾等と共に圍を破りて出でしが妃嬪に對しては毫も配慮する所なかりき。

その脱走後蒙古軍中都に入りて大虐殺を行へり。蒙古兵は火を皇宮に放ちしが火滅せざること月餘に及びしと云ふ。時に成吉思汗は大暑を避けんが爲來りて桓州 ハ一〇年に契丹人の建てたる城市にして獨石口を北東に距る十九リ ありしが、三人の官吏を中都に派遣し攻撃軍を指揮せし明安の勞を謝し帝室の財貨を收めしめたり、財貨は即ち之をタルタリに輸さざる可からず。金帝の守藏官來て蒙古の三奉行に音物を贈りしが、その一人失吉忽都忽 Schiki Coughtouou は拒みて之

を受けざりき。三人の官吏の大本營に歸るや成吉思汗は忽都忽に問ふに進物を納めしや否やを以てせり。忽都忽は之を受領せざりし旨を答へたり、蒙古の汗詰て曰く『何が故ぞ』。答へて曰く『余は思へらく征服後市内のもの悉く陛下の有に屬す、一物として陛下の處分權を有せざるものあるなしと』。成吉思汗は忽都忽能く軍律を知ると云ひてその措置を讚へ二人の同僚を罰せり。

遼の宗室に耶律楚材 チユウツァイ Yelü-Tchou tsai と云へるあり父は金に仕へて宰相となり身は中都行省員外部となりその落城の後歸降せしが成吉思汗之を召見せる時語て曰く『遼室と金室とは居常仇敵なりき、余は卿の爲に復讐せり』と。楚材對へて曰く『余が父も余が祖父も余も皆金朝の臣隸たりき、余若し先君と父とに對して讐敵の感情を抱かば余は表裏反覆の罪を免ぬかれざらん』と。成吉思汗はこの答を嘉みせり。楚材は身幹長大にして鬚髯長くその音吐朗々汗をしてその偉なるを思はしめたり。蒙古汗は又その能く占星の術に通ずるを知り之を朝廷に留め爾後常に左右に侍せしめたり。事を企つるや必ず先づ楚材に命じてその學問の規則に照らし、その幸なる可きや否やを豫言せしめ、又羊の肩胛骨を灼きその裂罅を檢して將來を諮るの職務をも亦これに委ねたり、これ蒙古人の間に廣く行はるる一種の卜法なり。

師安石の南京に著して中都留守福興自盡の報を傳へその委託されたる遺表を傳獻するや皇帝は右丞相なりし福興の勳功を尊重するの意を表せんとし之に王號 實は廣平郡王 を贈れり間もなく盡忠至り

ハ、參照。Abel Reimusat 新亞細亞雜覽 第二册に Yelü-Tchou tsai の傳あり。

しが敢てその罪を糺すことなく釋して平章政事に任せしも未だ幾くならずして盡忠は不軌を謀れりどて誅せられたり。

蒙古汗は中都を略するや直ちに新帝都を襲はんとせり。魚兒灤 Yourio 湖畔にありて將軍撒木哈に命を下し一萬人に將として出發し陝西を横斷し潼關の要塞に奇襲を試み迅速に南京に向て進ましめたり。撒木哈は唐古特領を通過し途を西安府に取り潼關を圍めり(二月)、潼關は黄河の南岸に近く位し陝西より河南に出づる峽路を扼せる堅城にして河南の鎖鑰と認められたり。之を抜くの難きを見るや即ち之を迂回せんと決し、嵩山山脈の峻峭たる高嶺懸崖に由り行軍の大困難を冒して河南に入りその中心に位せる汝州に著し更に進んで南京を距る二リーグの點に達せしが山東より兼程來援せる軍隊と戦ひて敗れ、河南の西端に位せる黄河沿岸の陝州を指して退却し氷を履みて渡河せり。

皇帝は危険の益々逼迫せるを恐れ大使を成吉思汗の許に派して媾和を求めたり。されどその之に對して要求し來れる條件には遂に同意する能はざりき。その條件とは黄河の北に存する金の所領を擧げて割讓することと皇帝の稱號を棄てて河南王と稱することとこれなり。

撒木哈把阿秃兒は翌年(一二二二年)又河南に向て第二回の遠征を試みたり。この遠征に於ては首尾克く潼關の要塞を陥れ(二月)、汝州その他の城市を攻拔し深入して南京の郭外に逼れり。され

どこの帝都を包圍するに足るの兵力を具へざりしを以て再び退却せざるを得ざるに至りぬ。蒙古軍攻撃の方法と并に金政府防備の方法とは撒木哈が汝州附近に駐營せる時御史臺の皇帝に上奏せる表文に明かなり。その文に曰く『敵兵潼關、崤關并に沔州を越え深く河南の内地に進み南京の西郭に近けり。而も京師に重兵あるを知れり、これその攻撃を加へざる理由なり。乃ち交戦を避け唯騎兵を分派して南京の交通を遮絶せしむるのみ、而して他の蒙古軍は傍近の州縣を圍めり。敵は漸を以て南京を苦めんとす、若し夫れ州縣の防備にのみ腐心せば首都は忽ちにして糧食の缺乏を來さん、何となれば公私の貯藏する處中都に於て貯藏せる額の百分一に匹敵せざればなり。これ臣等の寒心に堪へざるところなり。願くば陛下陝州の軍隊に命じて潼關を拒ぎ將軍阿里不孫 Alibass に對して陣地を占めしめ、又在京勇敢の將十數を選び各々之に精兵を付して小戦闘を試みしめ、且河北諸州にも令して同一の處置を取らしめよ』と。皇帝はこの表文を尙書省に交付せしが平章政事珠赫呼高琪は御史臺の官吏戰術を解せず備禦の方略はその知る所にあらざるなりと云ひ、右の建議は遂に顧みられざりき。蒙古兵は日々に首府に向て逼りしかば高琪は唯自ら固むるにのみ、これ汲々としてその戍兵の數を増し隨て州縣は軍隊の缺乏を來し蒙古兵の劫掠殘破を受くるがままに放棄されたり。かくて阿骨打の建設せる王國はその衰滅の域に瀕するに至れり。

ハ、ロ、イ、チ參照、元史は唯紀年を逐ふて大事を示せるのみ。綱目の記事は遙かに詳密なるも一二二二年の交戦は多く之を略し翌年の事蹟を多くこの年の下に繋げたり。ラシツドの敘説も甚だ備はらず、歲月を記さざるを

以て一一年一二年一三年の事實を區別する能はず 中都附近に於て黃河附近まで遠征を試みたる三軍の集合せる事實を記する時始めて紀年を記すも而も正確ならず 即ち一二一三年の春の末なりと云へど支那の史家は一二一四年の事なりとなせり

第五章

第

編

139

一二一六年春 チには鼠の年とあり即ち回教紀元六一一年にして基督紀元一二一五年也。 成吉思汗は歸りて克魯倫河畔の斡耳朵 Ordou にあり蔑兒乞部最後の王なる托克塔の一弟三子が阿爾泰山脈にその兵力を糾合せるを聞き將軍速不台 Souboundai をしつ之に向て進軍せしめ、且脫忽察兒に命じてその監視隊を率ひて之に加はらしめたり。蔑兒乞兵は眞 Djien 河附近に於て攻撃を受け斬伐されたり、托克塔の弟忽都 Couitou と二子とは戰場に仆れ第三子呼圖罕 Coultoucan は擒にせられ成吉思汗の長子朮赤の許に致されたり。この蔑兒乞の青年は弓術の達人として名聲高く爲に Mergan の異名を博せるを以て朮赤はその妙技を實見せんことを欲せり。呼圖罕乃ち一矢を放ちて標的を穿ち更に二の矢を放ちて第一矢の箭筈を割裂せしめたり。蒙古の公子はその技巧に感じ特使を父の許に派してこの少年の爲に助命の許可を乞へり。成吉思汗は從來幾多の邦土民族を征服せるはその敵國血族の生命を剿絶せんが爲なりと云ひ、かくて托克塔の末子も亦死刑に行はれたり。

乞兒吉思部に鄰せる禿馬特部 Tounnotes は尙武的民族なりしがその部長夕都禿勒莎哈兒 Bai-toula Soucar 蒙古征服者の不在に乗じて之が羈輓を脱せんとせり。成吉思汗は一二一七年に諾

延孛兒忽勒 Noyan Bourgoul をして之に向て進ましめしに、孛兒忽勒はこれに克ちしも戰場に仆れたり。その發するに臨み家族のことを君王に託せしかば、蒙古の皇帝はその子に向て爾來心肝を碎きて撫卹を盡さんと云ひ次で幾多の仁慈を之に施せり。チの許兀慎氏 Houshines の條に諾延孛兒忽勒は許兀慎氏に出で成吉思汗の朝に仕へて始め Boukeoul 厨人の長 Baveuti 穴藏頭等の職を奉じ次で禁軍百人長となり累進して右翼軍司令官 Noyan Bourdji の副將となれり。この兩將は成吉思汗の最も寵愛せる所なりきと。

秃馬特部を征服せんとするに當り成吉思汗は之に隣せる乞兒吉思部に向て出兵せんことを命ぜしに乞兒吉思部は之を拒絶せるのみか却て公然叛を謀れり。成吉思汗は一二一七年に子朮赤をして一軍に將として之に向て進ましめしに、朮赤は氷を踏みて侃侃助特河を渡り乞兒吉思部を征服して師を班せり。

前章に述べたるが如く木訶里は一二一四年(八月)に遼東〔廿二史考異に蘇天爵名臣事略に遼西とある〕へ進軍の命令に接したり、これ金軍が同地方に於て幾多の城市を克復し殊に遼陽即ち東京も亦その有に歸したるを以なり。この府城は詭計を以て再び蒙古軍の有に歸したり。將軍木訶里の千人の兵を添えて分派したる肅也先 Sioussien と云へる一將校あり、金帝の新任に命ぜる東都留守が赴任の途上にあるを聞き、之をその半途に要して殺害し、而して之が辭令書を奪ひて親から東京に向ひ同市の城門に於て住民の期待せる東都留守として守備隊長に接せり。かくて鄭重なる案内を受けて留守の官邸に至り守備隊各將校の來りて敬意を表するに遭ひ、その兵備の盛なるを見て聊か驚けるが如くなりしがその首都より來れること、首都にては平和の容易に破れざる可きを信ずること并に多數の壯丁を空しく軍旗の下に止む可からざることを説き、將來若し危險の起るあらば直ちに通知す可しとて命じて守備隊の大部分を歸休せしめたり。三日の後木訶里天明を以て來着して城内に入り又に衒ぬらずして之を略せり。この城市の陥落に次で遼東全部征服に歸するを得たり。

一二一五年木訶里は遼西に轉じ老哈 Loha 河の西岸に位せる大寧府即ち當時の北京を圍まんとせり。金將銀青 Yng-sing 大軍を率ひて出でて之を拒ぎしが花道 Khotu 附近に於て敗軍し(三月)、再び市内に退却せり。間もなく二人の長官ありて之を殺して將軍宙答虎 Oukhouru It-doucou を推して司令長官となせり。この新守將は將軍史天祥 Schi-tian-sian の圍を受けて降參せしが、木訶里は降服の遅かりしを怒りて都城を屠らんとせり。然るに肅也先が若し夫れ遼西の都府の降服せるに當りて而もなほ之を待つことかくの如くんば、將來爾餘の城市の降服を望むも豈得んやと諫めしによりその意見を讎せり。かくて木訶里は宙答虎をして北京留守のことを行はしめしが、而も同市に於ける軍隊の指揮は之を契丹將軍(校者曰く、馮氏は元史に撤勒只兀部人に作ると云へり)吾也兒 Ouyer に委ねたり。

前年金將張鯨 Tchang-tsing 遼東西に於ける錦州に據りて王號を稱し、次で成吉思汗に投

誠し、一二一五年一萬の兵に將として直隸に派遣されたる軍隊に従ふ可しとの命令を受けしが、北京の東方約五十五リーグなる永州（永平州）に至るや病と稱してその進軍を中止せり。木訶里之を疑ひ、將軍石抹先 Siao-Oujia に命じて之を監視せしめしが、石抹先は次で之を拘引して斬に處せり（一二一六年）。

張鯨に弟あり張致 Tchang-tchi と稱す、兄の爲に仇を報いんとし錦州の刺史を殺し（七月）、次で王號を稱し爾餘の六城をも略せしが而もこの六城は間もなく木訶里の克復する所となれり（二月）。木訶里は錦州に近きしも城塞堅固にして且守兵精銳を集めたり。乃ち張致を誘ひて野戰を試みんとし將軍吾也兒に命じて往きて山脈の間に位せる溜石山堡 Su-schi-pou を攻撃せしめしに、豫期に違はず張致はその兵力の一部を割き、親ら開城してこの要地の救援に赴けり。之が監視に任ぜる蒙古不花 Moungou-bouca は直ちにその騎兵の一部を派して張致の歸路を占領せしめたり。數リーグの遠きにありし木訶里も亦張致の出陣を聞くや夜中兵を進め天明に至りて之に遭遇せり。張致は同時に腹背より攻撃を受けて全く敗軍し辛うじて再び城内に入るを得たり。包圍攻撃を受けたる後數々開城出撃を試みしが士卒を損ぜしを以て艦て一意防禦にのみ盡瘁せんと決心せり。一箇月の末に至り部下の監軍高益 Kao-i と云ふもの張致を縛致して之を木訶里に引渡せしを以て木訶里は即ちその首を刎ねしめたり。

遼東遼西既に歸服せるより木訶里は成吉思汗の許に復命す可しとの命令に接せり。成吉思汗は一二一七年（二月）には土拉河畔に駐營せしがその將軍の戦功に對して大に行賞せり。乃ち群臣の參列せる時に於て公然勅語を下してその偉大なる資質を嘉みせる後魯國王 Kone-ouang と云へる支那的稱號を授け併せて之を子孫に傳ふるの權を與へたり。木訶里は札刺亦兒部 始め木訶里が支那にありて交戦するや支那人之を稱して國王と呼べり、而して成吉思汗は更に木訶里を支那に派して征服の事業を繼續せしむるの心算ありしよりこの稱呼の吉兆なる可きを思ひて之を確認せるなり。之と同時に又木訶里を任じて支那に於ける軍司令長官となせり。かくて陣列を布ける軍隊に向て木訶里の制令を奉ずること朕に従ふが如くせよと命じ、その委任せる權限の證として木訶里に金印一箇を交付せり。曰く『太行山脈以北の支那州縣は朕これを經略しぬ、同山脈以南の州縣を征服するは即ち卿の任なり』と。木訶里は二萬三千の蒙古軍 汪古特人一萬、Couschicouls 一千、兀 Kirasas 二千、忙兀特人 Mingouras 一千、翁吉刺 魯特人 Oroutas 四千、亦乞刺思人 特人 Councourates 三千、札刺亦兒人 二千より成る。と契丹女眞の兵二軍とを以て組織せる軍團に將として出發せり、契丹女眞の兵を指揮せるはその民族の出身なる烏也（葉）兒 Oyai と禿花 Toghan とにして何れも支那語にて元帥 Yangschai と稱する一萬人長の職を授けられたり。參照。

成吉思汗は一二一八年に四度夏の王國に入寇を試みたり。夏王李遵頊はその首府の蒙古兵の圍を受け易きを見て甘肅の西涼に避難せり。〔廿二史考異に陳桎通鑑續篇薛應旂通鑑を授きて李〕、今の涼州府

〔廿二史考異に陳桎通鑑續篇薛應旂通鑑を授きて李〕、今の涼州府を避項の西涼に走るは一二一七年なりと斷ぜり。

これなり。ロ、ハに據る。この年高麗も亦蒙古人に降服せり。

成吉思汗は時にその注意を西方に轉じたり、これ成吉思汗の仇敵にして同方面に奔竄せる乃蠻部最後の汗の子古出魯克が哈刺乞解の帝位を篡奪して六年以來之に據れるが爲なり。

哈刺乞解の帝國は遼朝の一契丹公子によりて建てられたる所に係る。女真人即ち金人の契丹帝國を亡ぼすや契丹最後の皇帝耶律延禧の一族にしてその元帥たりし耶律大石チには Tauschi Tai-tou とあり Tai-tou とは支那語司令官の義あり。は一一二三年に既に窮迫の極に陥れるこの皇帝と分れ約二百人と共に陝西の北西に位置する地方に走れり。この地方は即ち遼帝國の一部たりしを以てその牧民官并に部族長等は高名なる阿保機の後裔として之に忠誠を盡せり。耶律大石はその給與せる軍隊に將として土耳其斯坦に向て進めり。回紇王畢勒哥 Bilik に向てその領土を通過せんことを求めしに畢勒哥は來りて之を境上に迎へ馬駱駝綿羊等を夥しく贈り質として子孫を納め臣隸となれり。耶律大石は喀什噶爾、葉爾羌、和闐諸國 ロ、チ并に Viade. 阿刺比亞人并に波斯人はシル河より支那の大砂漠までの地を征服せり。當時土耳其斯坦は波斯の古代史上に有名なる土耳其斯坦に屬せり。Mahmoud は僅にトランスオクシアナの領土のみを保ちしが數年の後この地方も亦

避くること能はず、耶律大石の軍隊之を侵して放火虐殺爲さざるなく、花刺子模王朝第十二代の帝王阿切斯 Atsiz は黄金三萬的那の歳貢を條件として媾和を購へり。ハに據る。かくて戈壁 Copi の大砂漠とアム河との間并に西藏の山嶺と西伯利の間を介在せる地方をその制令の下に歸服せしめたる後耶律大石は一一二五年に古兒罕 Gouri-Khan 即ち大汗と稱しその都を八刺沙衮 Bela-Sagoun 市に定めたり。宋の靖康二年西遼都を虎思斡魯宋に定む。耶律大石は佛教信者にして隨てこの宗教は哈刺乞解の新帝國に於て優勢となれり。之が太祖は武人として材幹を具へしに加へて支那文學に精通し青年の時翰林に擢でられしが遼史に曰く大石通遼漢字。天慶五年進士第。擢翰林應奉。遼以翰林爲林牙。故稱大石林牙と。一一三六年金人に對して干戈を交へ以てその遼帝室より掠奪せるの邦土を回復せんとし之が準備に汲々たるに際して殂せり。一子耶律夷列 Yelü-Yilie 年なほ幼冲なりしを以てその母塔不烟 Tabouryan 一一四二年迄之が後見に任ぜり。一一五五年耶律夷列の殂するや妹普速完 Pousouran その子直魯克 Tchiloncou 成年に達するまでの攝政に任命せられ、直魯克は一一六七年に至りて漸く政權を親らするに至れり。ロ并に Viade. 参考。一一〇八年（回教曆六〇四年—五年）乃蠻部最後の汗の子が往きて哈刺乞解に避難せる時には直魯克なほ位にあり、之を款待し且その女を之に配せり。直魯克は狩獵をこととし快樂にのみ耽りしを以て政權頗る振はず、既にその三大附庸國の國主即ち畏兀兒部王、トランスオクシアナ侯、并に花刺子模の支丹の離叛を來せしが、臆て其女聲を

して篡奪の陰謀を廻らさしむるに至れり。乃蠻公子は直魯克部下の將軍をして多く心を己に寄せしめられたれば之に父汗の軍隊敗戦の兵を合する時は以て著しき軍隊の頭に立つを得可し。乃ちその計畫の實行に着手せんとし、直魯克に向て往きて葉密兒 Inti 哈押立克 Cayalik 別失八里 Bishri-Batic 等の地方に亡命せる乃蠻部民の殘兵をその軍旗の下に糾合するの許可を求め、且この軍隊を召集するは之を直魯克の爲に用ゐんと欲するが爲のみと誓へり。哈刺乞解の君王は喜で之を裁可し、その發するに臨みて厚く餞別する所あり、且古出魯克汗 Goutchoung-khan の稱號を之に授けたり。土耳其語にて強大なる王侯の義也。

古出魯克の一度現はるるや實に父の舊部は先を争てその軍旗の下に集まれり。成吉思汗の兵を受けて來奔せる蔑兒乞部長も亦之に合せり。乃ち哈刺乞解に入寇して掠奪を縦にし且劫掠をこととするの賊群は新にその旗下に投ぜり、されど兵力未だ以て哈刺乞解を仆すに足らず勢ひ與國を求めざる可からず。その眼は自ら花刺子模并に波斯の君主たる支丹謨罕默德に向へり、謨罕默德は是より先直魯克の宗主權を脱かれたるのみならず更に撒馬兒罕并にトランスオクシアナの君侯鏢斯滿 Osman の貢賦を受くるに至れり。古出魯克の之に向て協同して哈刺乞解を襲ひ協力の報酬としてその西方の領土を許さんことを提議するや好意的回答を得たり。既にして哈刺乞解の一軍は再び鏢斯滿をして制令を奉ぜしめんとし、撒馬兒罕に向て派遣されしを以て、謨罕默德は

之が援に赴きしがその到るに先ち哈刺乞解の軍は同市の圍を解けり、これその君王が古出魯克の來りて攻撃を加へしより之に向て召還の命令を發したるが故なり。

乃蠻の公子は哈刺乞解軍隊の不在に乗じて Ozkend なる古兒罕の寶庫を掠め更に進んで不意に入刺沙衰を襲はんとせり。古兒罕は高齡なりしが上に部下の兵極めて乏しかりしにも拘はらず敵軍と干戈を交へ Tchimboudje 河畔に於て全く之を破り且その士卒の多數を擒にせり。古出魯克はその攻撃の失敗に了りしより意氣沮喪して退却し將にその計畫を放棄せんとせり。

然るにこの間謨罕默德は鏢斯滿侯と共に哈刺乞解の領土に入寇し、塔刺思 Taras の東に至りて將軍塔尼古 Tanigou の指揮せる敵兵に遭遇し、之と交戦して契丹兵を潰走せしめ且塔尼古を擒にするを得たり。敗兵の背進するや自國の領土に於て却掠至らざるなく、爲に入刺沙衰の住民は却て支丹謨罕默德の管轄を受けんことを欲し、大汗の軍隊に對してその城門を閉鎖せり。かくて包圍を受くるや、防備に努むること十六日間私かに支丹謨罕默德の來りて救援を與ふるを期待せり。而も市城は遂に攻拔され、住民は殺戮に遭ひ死者の數四萬七千人に上れり。

時に大汗の財政窮乏を告げしが、將軍 Mahmoud Bai と云ふもの富裕なりしより強迫的に金錢上の犠牲を命ぜられんことを憂へ、古出魯克の掠奪せる財寶を克復したる軍隊に向て之が上納を命ず可しと建議せり。軍隊の長官等は此の處置に對して蜂起し怒て退散せり。古出魯克その解

散に乗じて疾驅して再び來り不意に大汗を襲ひ之を擒にせり、これ一二一年或は一二二一年(六〇八年)のことなりとす。既に之を獲るやその汗號は依然として之を用ゐるを許し且この革命の後二年にしてその殂せるの日まで之を待つに尊敬を以てせり。ロの校訂者はその第八册一四九頁の註に哈刺乞解即ち西遼のことを記し一二二四年より一二〇一年まで繼續すとせり。されど直魯克は一二二一年若くは一二二二年まで君臨し西遼は八十七年にて亡びたるなり。Visdelou の D'Herbelot 著 La Bibl. orientale 附録にも亦 Hyacinthe の蒙古誌にも西遼の略史を掲げ直魯克出獵せる時古出魯克兵を伏せて之を擒にしその位を篡へるは一二〇一年(嘉泰元)のことなりとなせどこれ明に支那史家の誤謬なり。Visdelou は又土耳其斯坦の哈刺乞解王國と Kerman の哈刺乞解王國とを混同せるが如し。卷末の註第六參看。チに Tauschi Tai-fou である Tauschi は思ふに Nouschi ならんか。

哈刺乞解の汗位を襲へる古出魯克は阿力麻里 Almalig の汗 Ozar を服従せしめんと欲し、幾度か之に向て兵を進め遂にその出獵に乗じて不意に攻て之を擒にし斬に行へり。喀什噶爾、和闐の住民も亦服従を拒みしを以て、古出魯克は古兒罕の曾て拘禁したる喀什噶爾汗の子を放免して歸國せしめしに、その喀什噶爾の城門に着するやこの少年公子は虐殺に遭へり。この地方を降服せしむるが爲古出魯克は軍隊を派して收穫時に際し劫掠を行はしめこの損害を蒙らしむること連年に及び、兩三年の後に至りて遂に住民は飢饉に苦みて是非なく服従するに至れり。上述せるが如く乃蠻部民の大多數は基督教を奉ぜしを以て古出魯克も亦始めその信者として生長せしが、大汗の女なる王妃の勧誘によりて佛教を信することとなれり。故にその兵力によりて和闐國を征服するや、その住民に逼りて誓て回教を棄て基督教若くは佛教に就きて任意その好む所を取らしめんとせり、加之、回教徒に向てその信仰の誤れるを説かんと稱し、城壁内の一平原に回教僧侶を召集し宣言すらく、何人にもあれその宗教に就きて論議を戦はさんとするものあらば出でて雌雄を決せよと。茲に於て式僧 Imam の領袖阿拉哀丁諱罕默德 Alai-ud-din Mohammed は古出魯克に近づき熱心に回教を辯護せり。汗はその抗辯に激し怒に乗じて Mahomet に對して誹謗の言を放ちしかば、式僧は憤然として叫びて曰く『汚泥汝の舌を覆へるぞ、嗚呼眞の信仰の敵よ』と。古出魯克は命じて之を捕縛せしめ、拷問を加へて強迫的にその信仰を放棄せしめんとせしも、その效なかりしかば遂にその學院の門前に於て之を磔刑に行へり。爾來領内至る處回教徒に對して迫害を加へたり。

成吉思汗は宿仇をして穩かにその篡奪せる汗位に安んぜしむることを欲せざりき。故にその西方に進みし時古出魯克に對して一二一八年(六一五年)を以て諾延哲別 Noyan Tchêbê の指揮の下に二萬人の一軍を分遣せしにその近くや古出魯克は喀什噶爾に避難せり。同市に入るに當り哲別は信仰の自由を宣言せしかば、忽ちにして住民はその家屋を宿舍とせる古出魯克の兵士を虐殺せり。蒙古軍は直ちにその敵の追撃に着手し巴達克山 Badakhshan の山間地方に於て之を捕獲しその首を刎ねたり。へ、チ 參照。

成吉思汗は哲別の遠征上首尾の結果を奏せりと聞くや、汪罕、太陽汗、古出魯克汗等近來滅亡

せる諸王侯が敗亡を招きたるは全く慢心の致す所なればとて同將軍に書を寄せてその成功に對して餘りに得意となる勿れと戒めたり、哲別チエベは數年の後に至りて遠くアルメニア、ゲルジア、露西亞等に蒙古軍の勇武を輝かしたるの名將なるが、元來久しく鐵木眞の敵たりし蒙古部別速特氏 ベリス *soutes* の出身なりき。鐵木眞が別速特氏と戦ひて之を破りし結果、哲別チエベを始として同氏に屬する爾餘の勇士は捕虜となるを耻ぢ又死するを好まずして遁匿せしが、一日鐵木眞林藪に野獸を驅りしとき、哲別チエベは偶然一團の獵手の圍む所となれり。蒙古の領袖は之を追捕せしめんと欲せしに、その宿將の一人なる博郭兒濟 *Borghoudji* 洪鈞曰く博爾朮也と 親ら往きてこの勇士と闘はんことを求めしかば、鐵木眞はその請ふ所に任せて口頭部の白色なる良馬 チに蒙古語にて "Chigagan aman coulda" とあり。土耳其人蒙古人は栗毛の馬を "coulda" と云ふ。獨逸に "schweissfuhs" と云へるに同じ。野生の驢 "coulda" と混す可からず。 を貸し與へたり。博郭兒濟追ふて一矢を放ちしが哲別チエベに中らざりき。哲別はその技倆遙に之に勝れ一矢を報いてその敵手の乗馬を斃し疾風の如く走れり、而も間もなく糧食缺乏に苦み決心して成吉思汗の許に至りて之に仕へんことを乞へり。成吉思汗はその勇敢なるを認めて先づ十人を與へて之を指揮せしめ、その舉措の宜しきを見るや更に百人長となし、次で千人長に進め最後に萬人長に登庸せり、哲別の首尾克く古出魯克汗に對する遠征を終るや、曾て主君の一良馬を殺して損害を與へたるを思ひて之を償はんと欲し、その征服せる地方に於て口部の白色なる良馬千頭を獲て之を成吉思汗に獻じたり。 チ、別速特氏の條參看せ。哲別とは蒙古語にて木もて驢となせる。矢別とは蒙

蒙古皇帝の管轄はかくて哈刺乞解に及べり、哈刺乞解は前述せるが如くその領内に喀什噶爾、葉爾羌、和闐等の諸國を包括し、而して這般諸國の勤勉なる住民は多くは回教徒にして農業工藝は勿論商業に従事し、タルタリーの物産と支那印度の物産とを交易せり。 Marco Polo 旅行紀參照 成吉思汗の領土は支丹護罕默徳の領土と隣接地となり、蒙古の征服者は忽ちにしてこの新隣國を攻撃するの理由を得ざるまでも少くも相當の口實を看出すを得たり、蓋しその繁榮なる帝國はタルタリー遊牧民族の貪婪心に對して美なる好餌を供給したればなり。

第六章

セルジック政府の廢址に建てられたる花刺子模^{ホラズモ}帝國は幾多の邦土を併呑して次第にその境域を擴張し、シル河より波斯灣に至り印度河より Irac-Arēb 并に Azerbaïdjan に至るの地を包有するに至れり。第十三世紀の初に當りてこの帝國の君主たりし阿拉哀丁謨罕默德 Alai-ud-din Mohammed の祖先は奴世的斤 Nouschtékin と稱する土耳其種に屬する一奴隸にして、始めセルジック王朝の支丹瑪里克沙 Mélikshah の臣下なる一被釋放者の有に屬せしが、次で支丹の有に歸して水瓶捧持の職に拔擢されたり、而して花刺子模縣はこの職に附屬せり。回教王朝の歴史には土耳其人の奴隸の一躍帝王となれるの例證極めて多し。土耳其種族の捕虜は容姿の美なると氣力の旺盛なると活潑なるとによりて波斯に於ては價格最も大なりき。ライデン文庫藏 Ebn-Hourai 著 Mesallik-i-Mentalik (地理書) 亞 故に邪教を奉じ遊牧を事とせる土耳其種族の居住地なる裏海の北方并に東方に當れる地方より若年の時代に於て多數群を爲して波斯に送られたり、蓋し土耳其種族は常に内訌を事とし互に他の兒童を奪ひ而して之を奴隸商人に賣却せるを以てなり。這般の青年は回教國の帝王侯伯によりて高價に購はれ、Mahomet の宗教を以て教育されその多數は軍人として養成

されたり。かくてその主人の爲に護衛隊を組織し、又彼の亞細亞の顯貴の夥しく役使する家庭の從僕として之に仕へたり。主人の寵を受けたるものは釋放せられたる後文武官の最下級に登庸せられ、かくて或は進んで一縣の政治を掌るに至るものあり、又或は風雲に乗じて遂に之が帝王となれるものあり。

かるが故に土耳其人の回教國に入寇するに先ち、その種族出身の奴隸は回教國內に於て既に有力なる人物となれるもの少からず。波斯は亞刺比亞人の爲に征服せられてより一旦その文明著しく退歩し、次でハリフハの帝國并にその大諸侯の政府の下に再び繁榮を回復せしが、第十一世紀の中葉に當り裏海とシル河との間に連互せる砂漠的曠野より來れる土耳其種族の遊牧民族烏古斯部 Ogouzes によりて征服されたり。Ebn Hourai の地理書に據るに Ogouzes は第十世紀に於ては花刺子模トランスオクシアナ地方の曠野に漂泊せるが如し セルジック Seldjouk の子孫なるその君長統率の下にこの兇猛なる遊牧民族は益々その征服を進めて地中海并にマルマラ海 Propontide の沿岸に達し、多數のその部族はこの厖然たる帝國内至る處に舍營してその住民なる波斯人亞刺比亞人シリア人アルメニア人并に希臘人に對して野蠻の桎梏を課して之を苦めたり。この時代よりして波斯并にその西隣地方の歴史は唯これ千篇一律、このセルジック土耳其種族の軍事的遠征劫掠廢并に最後に内訌の記事たるに過ぎず、蓋し地方州縣の政治と部下軍隊に對する指揮の全權とを委ねられたる之が領袖輩は曠て中古の時代に於ける歐

洲の大諸侯と同一の権限を享有するに至りたればなり。繼嗣の問題起る毎に必らず内亂の動機を生じ、その反對者を仆して位を襲へるの支丹は册立に功勞ある自派諸侯 *Beys* の掌裡に主權の要部を割きて之を一任せざるを得ず、かくてセルジウク朝の帝國は第十二世紀の終に至り擾亂の極滅亡せり。

波斯に於けるセルジウク朝の政權に致命の打撃を與へたるものは即ち奴世的斤の後裔なりき。

この被釋放者の子にしてその食邑の領有權を相續せる庫脫拔丁謨罕默德 *Coutb-ud-din Moham-med* は花刺子模國君 *Khorazm-schah* の稱號を得たり、これ同地方が亞刺比亞人に征服さる

るに先ち花刺子模 *Khorazm* 眞の發音は Khorazm なり の舊國君が使用せし稱號なり。謨罕默德の子阿切

斯 *Atsin* は幾度か瑪里克沙の子にしてその君長たる散者耳 *Sindjar* に對して干戈を交へ而して

哈刺乞觶の汗に對しては歲貢を納むるの約を立てたり。一一五七年支丹散者耳の死後阿切斯の子

伊兒阿斯蘭 *Il-Arslan* はホラサンの西部を經略し、其子塔喀施 *Tacasch* は一一九四年にセル

ジウク王朝の支丹托古洛耳 *Togroul* と戦ひ、之を戰場に仆して *Irac Adjém* を奪ひたり、托

古洛耳死し散者耳も亦既に死せるより波斯に於けるセルジウク王朝の兩家は茲に絶え、塔喀施は

ハリフハ那昔爾 *Nassir* よりその所有せる領土に封ぜられたり。かくの如くにしてイランの帝國

はセルジウク土耳其其人の手より花刺子模土耳其其人の手に移れり。

阿拉哀丁謨罕默德は一二〇〇年に父塔喀施の位を襲ひし後、バルク、ヘラット兩州を併呑してホラサン全土を領有するに至れり。間もなく *Mazenderan* 并に *Kerman* も亦その制令を奉ずることとなれり。茲に於て謨罕默德は其勢力能く優に哈刺乞觶皇帝の羈絆を脱するに足れりと信ぜり、抑も同皇帝は偶像信者なりしかば曾祖父以來累代之に對して貢賦を納めしことは謨罕默德并にその臣下の深く屈辱とせし所なりしなり。加之、撒馬兒罕并にトランスオクシアナの君侯鏢斯滿の斷然この擧に出でんことを乞へるあり、鏢斯滿も亦古兒罕の臣隸なりしが、その領内各地に駐在して貢賦徵收のことに當れる哈刺乞觶理事官の收斂に苦み遂に之を忍ぶ能はず、謨罕默德に向て之が羈絆を脱するに於て一臂の勞を假さば、甘んじてその臣隸となり從來哈刺乞觶の汗に與へたると同一の貢賦を納付せんことを約せり。

謨罕默德は私に哈刺乞觶と絶交するの時機を待ちしに機會は忽ちにして來れり。哈刺乞觶の官吏來りて歲貢を受けんとし、支丹に謁見するの許可を得習慣に従ひて席をその側に占めたり。

謨罕默德は恰も裏海北方不毛の曠野に住へる邪教徒欽察部族 *Kiptchacs* に對して戰勝を博したりし際なるを以てその天與の自尊心は益々高められ、最早この尊嚴を冒瀆す可きの典禮を容認する能はず怒て汗の使節を寸斷す可しと命ぜり。

この抗敵行爲を執れる後謨罕默德はその兵に將として哈刺乞觶の領土を侵せしが、戰敗れてそ

の將校の一人と共に捕虜となれり(同曆六〇五年西曆一二〇八年)。然るにこの將校自若として毫も狼狽せず支丹を以て我が從僕なりと稱して之を信ぜしめ、數日の後贖價の議成るや之を郷國に遣して約束の金額を齎らさしめんことを諮れり。之を捕虜とせるの敵將は許可を與へしのみか却てこの使者に一人の護衛を附したり。かくて支丹は虎口を脱れて歸國せしに是より先その死去の報傳はるや弟阿立希耳 Aly-Schir 既に Taberistan に於て自立しヘラットの知事たりし叔父 Emin-ul-Mulk は同地方の君主たらんとして之が準備を講じたりしと云ふ。

翌年(同曆六〇六年西曆一二〇九年) 謨罕默德はその臣隸たる撒馬兒罕の支丹と共に哈刺乞解に向て第二回の

遠征を試みたり。乃ち Fenaket に於てシル河を渡り塔尼古の指揮せる敵軍に對して前章に述べ

たるが如く戦勝を博し、次で勝に乗じて土耳其斯坦を征服して Ozkend に達し同地に知事を駐在せしめたり。偶像教徒に對するこの戦勝の報は花刺子模帝國の民をして狂喜措く所を知らざらしめたり。支丹の政權を尊重するの熱心はその極度に達し、附近の諸王侯は皆使節を派して戦勝を祝せり。その華押 (Tougra) を署するに當り、御名の次に地上に於ける上帝の保護者と云へる佳句を挿入し、慣習に従ひその稱號にアレクサンドル第二の稱呼を添えんとせり。されど謨罕默德は却て散者耳と云へる異名を採用せり。何となればこのセルジウク朝皇帝の治世は四十一年間に互れるを以て遙に吉兆なりと信じたればなり。

首府花刺子模に歸るや支丹はその女を君侯鏢斯滿に嫁し、花刺子模の理事官は哈刺乞解汗の代官に代て撒馬兒罕に駐割せり。然るに暫くにして鏢斯滿はこの理事官の措置に對して不快を感じてその君長を更めたるを悔ひ、古兒罕に投誠せる後悉くその首都に滞在せる花刺子模人を殺さしめたり(同曆六〇七年西曆一二〇一年)。この報に接するや謨罕默德は痛く激昂して直ちに撒馬兒罕に進軍せり、士卒は雲梯を攀ぢて城内に入り、前後三日間唯切掠虐殺のみをこれこととし、次で君侯の立て籠れる衛城を圍みて之を陥れしかば、鏢斯滿は頭より纏衣を垂れ頸に白刃を懸け戦勝者の前に出でて憐を乞へり。支丹は之を助命せんと欲せしもその女鏢斯滿の虐待を蒙り、且饗宴に際して互に寵を争へる古兒罕の一女の爲に侍女のことはしめられしより、夫を殺さんことを哀願して止まず、遂に鏢斯滿はその家族を擧げて共に殺戮に遭へり。かくて謨罕默德はトランスオクシアナをその帝國に兼併し首府を撒馬兒罕に遷せり。ニ、ハ、

支丹は又彼のヘラット地方よりガンヂス河畔に至るまでの領土を包有したる郭耳 Gohr 王國故地の一部を略してその版圖を擴張したり。一二〇五年郭耳朝第四代の君王支丹希哈潑哀丁 Schihab-ud-din の死後、その印度に於ける所領は總督として同地方に駐割せる官吏の管轄に歸し、支丹謨罕默德は上文に述べたるが如くバルク并にヘラット兩省を奪ひ、而して希哈潑哀丁の姪、馬赫模特 Mahmud はその王室の領土につきて僅に郭耳地方のみを留保するを得しが、而

もなほ花刺子模支丹に對する朝貢の義務を負へり。馬赫模特は君臨すること七年にしてその宮城に於て暗殺されしが(同曆六〇九年西曆一二二二年三月)、輿論は支丹を非難してこの犯罪に關係ありとなせり。謨罕默德の弟公子阿立希耳は曩に兄支丹と不和を醸せるがため、馬赫模特の許に遁れてその居城非洛斯固 Firouzgouh にありしが、乃ち之に代て即位し支丹に向て其帝國のこの采邑に對する領有權を允可せんことを乞へり。謨罕默德は官吏の一人をして之に封冊を齎らさしめしが、阿立希耳がその授與されたる禮服を身に著けんとするや、使節は劍を抜きてその頭を刎ね直ちに主君の命令を公にせり、この續行の後郭耳の侯國は花刺子模帝國に兼併せられたり。

三年の後(同曆六一二年西曆一二二五年)、謨罕默德は土耳其種に屬する一將軍の手より哥疾寧 Ghazni 地方を奪略せり、この將軍は支丹希哈潑哀丁の舊臣にして郭耳帝國瓦解の際に之に據れるなり。この舊都の記録局に偶々ハリフハ那昔爾が郭耳朝の諸支丹に寄せたる公文書を發見し、那昔爾が花刺子模國君の野心に對して警戒を加へ之を攻撃す可きを慫慂し且哈刺乞舂人と同盟してまでも之に反對す可しと云へるを知れり。實にこの王朝最後の兩君主は謨罕默德治世の初年に於てホラサンの西部を征服するの好機至れりとなし之に對して戰端を啓きたり。この文書の發見せらるるや回教々王に對する謨罕默德の怨恨は骨髓に達せんとせり。

ハリフハ那昔爾 本名を Abou-l-Abbas Ahmed といふ那昔爾亦拉 參照。

は、一一八〇年以來バグダード

ド教王の位にありて屈せず撓まざる花刺子模國勢の隆興を阻抑せんと努めしが、毫もその效なかりき。勿論この計畫を實行するに當り自國の兵力を用ふるを得ざりき。抑も Mahomet の繼嗣の政治上に於ける權威は Irac-Arēb 并に Khouzistan の狹隘なる範圍内に限局され、その厯然たる帝國の爾餘各地は相次で亞刺比亞、波斯、土耳其各種族王朝の制御を受けたり。而して回教紀元第三世紀以來波斯にありては既に他海爾朝 Tahérides 薩法爾朝 Soffarides 薩繼朝 Samanides 賽布克的斤朝 Sebuktékines 布葉朝 Pouyides 并にセルジウク朝等の一起一仆せるありき。固より這般諸王朝の帝王はその領土を治むるや、之を以てバグダード教王より得たる采邑視せしと雖も、そのハリフハの朝廷に向て封冊を求めしは單に臣民をしてその政權の合法なるを知らしめんが爲なりしのみ。アッバス朝のハリフハは僅に二種の特權を享有して以て回教徒の間に主權の痕跡を示し得るに過ぎざりき、二種の特權とは公の祈禱に於てその名を擧げ、并に貨幣に之を刻せしむることこれなり。その首都にありても常に實權を行使するを得ず、セルジウク朝全盛時代の如き殊に然りとす。

波斯に於けるセルジウク朝帝國の領土が Irac-Adjém 地方のみを剩しその最後の君王托克洛耳の下に内訌に惱まざるや、活潑なる天稟と大膽なる資性とを具へたるハリフハ都昔爾は或はその國內の紛擾を煽動して軋轢を激甚ならしめ、或は花刺子模國君塔喀施の援助を求め以てこの

強隣の瓦解に著しく加速動力を與へたり。加之、セルジウク朝の滅亡に際しては Irac-Adjém の一部を收めんと欲するの意ありしも、この一大省を征服せる塔喀施^{タカシ}は之を割讓するを欲せず、ハリフハは數回の企圖失敗に了りて遂に是非なく之を新興國に授くることとなれり、蓋し新興國の當る可からざる遙かにその滅亡に力を假したる舊國の上にあればなり、謨罕默德が父に嗣ぎて位に陞るや那昔爾^{ナシール}は郭耳^{クエル}の支丹 Ghiat-ud-din を教唆し、新國君の踐祚に乗じて花刺子模に攻撃を加へしめんとせり。Ghiat-ud-din は既にバルク井にヘラット兩省を領有せしを以て、更に爾餘のホラサン各地を渴望し戰端を啓きしも、この畫策を實施せんとするや臆て殂落せり。その弟にして位を嗣げる布哈潑^{フハパ}哀丁^{アエツン}は花刺子模に入寇して支丹謨罕默德と Ende-khod 附近に戦ひ、哈刺乞縛の援兵一萬人の來りて會戦せるにも拘はらず全軍覆没、媾和を乞ふの已むを得ざるに至れり。

謨罕默德は哥疾寧^{ガマニ}に於て圖らずこの前年の戦役がハリフハの教唆によりて起れるの確證を獲既に那昔爾^{ナシール}に對して懷抱せるの怨恨は益々その度を加へたり。厯大なる版圖に君臨し四十萬の大兵を擁せるを以てセルジウクの支丹に比してその權勢の遙に優越なるを信じ、そのハリフハの朝廷より得たると同一の特權に浴せんことを望めり。乃ちバグダードに部下の總督を置かんとし、且公の祈禱に於て己れの名を擧げんこと并にハリフハが支丹の稱號を授與せんことを欲せり。乃ち

この要求を爲さんが爲め深く信任せる法官 cadi Omar をバグダードに派遣せり。ハリフハの朝廷はこれを允可するを欲せずして辯明すらく、Deïlemites 并にセルジウク朝の帝王がバグダードに於て政權を享有せるは、その豫言者の代理即ちハリフハに對して大功を建てたるの報酬として之を得たるによれり、然るに目下にありては保護者を置くの必要を認めず、謨罕默德がその厯然たる領土に満足せずして更にハリフハの首都をも併吞せんとするは怪訝に堪へざる所なりと。

憤怒の餘り謨罕默德は大膽なる決心を定めハリフハの法職をアッバス朝より奪はんとせり。臣民をしてかかる計畫の正當なるを思はしめんとせば僧侶の承諾を経ざる可からず、故に支丹は明法博士に向て問題を提起して曰く『茲に帝王あり一身の榮辱を賭して上帝の聖旨に光榮を加へ眞正なる信仰の敵を滅絶せんとす、然るに法皇の之に對して敵意を抱くに遭ふ、前記帝王は果してこの法皇を廢し更に之に代ふるに威儀の堂々たるものを以てするを得るか。殊に Mahomet の代官は當然フサインの子孫に屬す可きものなるに、アッバス朝の之を篡奪せるに於ては如何、加之、アッバス朝の諸ハリフハは宗教上回教徒の法皇に課せられたる第一の義務を常に盡さざるに於ては如何、この義務とは回教國の國境線を保護し、神聖なる戦役を企てて異端の民族を眞信仰に改宗せしめ、若しくは貢賦を納付せしむることこれなり』と。僧侶の會議は判決文 Fetihya を起稿して右の場合に於ては廢立の合法なるを聲明せり。この宗規の裁決によりて恃む所を経しか

ば支丹はアリの後裔なる Termed の住人 Seyid Ala-ul-Mulouk を推してハリフハの位に即か
しめ、公の祈禱に於て那昔爾の名を除き新貨幣にも亦之を刻するを得ずとの命令を發せり。

茲に於てか波斯地方に頗る多數なるアリ派の信徒は信ずらく六世紀の後遂にこの Mahomet
の女婿の一族が法皇の位を回復するの時機に達せりと。支丹は軍隊を召集して那昔爾に對して宣
告せる判決文を執行せんとし先づ義拉克阿鄭 Irac-Adjém を占領せんとせり。始め土耳其種出
身の將軍 Ogotmoussch と云ふものこの地方の實權を握有せる後、支丹に向て忠誠を誓ひしが
ハリフハは Battiniens を教唆して之を暗殺せしめたり。これ Ismailiyen の君が法皇の欸心

を買はんが爲め、這般刺客を業とせるものを多く獻納したるが爲にして、曩に那昔爾がメッカの
王侯を刺さしめし時にも亦之を利用したり。Ogotmoussch の死後支丹の名は Irac-Adjém 地
方に於ける公の祈禱文中より削除され、而して之に隣接せる法而斯 Fars 并に阿特耳佩占 Azer-
paiddjan の兩王侯はハリフハの勸誘を受けて争て之が經略に従事せり。この報に接するや謨罕
默德は兼程 Irac に向て進軍せり。法而斯侯阿塔畢沙特 Atabey Sa'id は戰敗れて捕虜となり、
二箇處の堅城を割讓し毎年その歳入の三分の一を戰勝者に納付す可きを約して辛うじてその身を
贖へり。阿塔畢鄂思伯克 Atabey Euzbec も次で敗軍して奔竄せり。Sa'id は Sagarides 朝五代の君な
り、祖父 Suncor は Mevdoud の
子にして、この朝の長にしてセルジュク朝に仕へしが、一四八年同王國の瓦解に際し、Fars に據れるがや、

して一八六〇年頃セルジュク朝のとき、Azarbaiddjan 支丹部下の諸將は之を追撃せんと欲せしが、支丹は一年
の君主となれる Ideginiz 五代の繼嗣なり。
に二人の君主を捕獲するときは幸福を獲る能はずと云ひて之を抑止せり。鄂思伯克は歸國せるの
後貢物を携へしめて使節を派遣し之が臣隸となれり。

義拉克阿鄭地方を再び制令の下に従へたる後(回曆六一四年西曆 一一二七年—八年) 支丹はバグダードに向て進めり。
那昔爾は世の尊敬淺からざる神學者なる部族長 Scheikh Schihab-ud-din Siharverdi をして勁
敵に對し媾和のことを諮らしめたり。この大使はハマダン附近に於て支丹の駐營せるに遭ひしが
種々の困難を経て漸く謁見を得たり。其謨罕默德の帳幕に案内を受けしとき支丹は褥の上に座し
身には略服を纏ひ部族長の敬禮に應ぜず且之をして著席せしめざりき。高僧は支丹に向ひ亞刺比
亞語にて雄辯を振てアッバス家殊にハリフハ那昔爾に就きて頌徳の辭を列ね、次で Hadiss 即
ち Mahomet の遺戒を援きて、この名族の一門に害を加ふる勿れと云へる條項を誦せり。その
陳述せる所通譯さるるや謨罕默德は答へて曰く『ハリフハはこの人の讚へたるが如き高德を具へ
ず、バグダードに至らば余は法皇の職に陞らしむるに這般の優秀なる性質を享けたる一人物を以
てせんとす。而してこの人の援引せる豫言者の戒に就きては須らく知る可し、アッバス家の一門
が悉く監獄のうちに生れその多數が之に一生を過せる事を。アッバス家に對して最も不幸を蒙ら
しめたる者は即ちその一門の人なりき』と。部族長は之に答ふらくハリフハの一度位に即くや上

帝の書と之が豫言者の事迹とに基きて行動し、境遇に應じて這般の法規を適用す可きことを宣誓す、而してその公安の爲に必要なりと認めて某々の個人を禁錮することあるも、この處置たる非難を受く可きものにあらずと。然れども部族長の辯論は毫も支丹の精神に感動を與へざりき。茲に於て部族長はバグダードに歸戻し、那昔爾は調和の希望全く絶えたるを以てその首府の防禦に盡瘁し、而してこの間謨罕默德はハマダンにありし Trac-Areb を軍政的采邑并に財務的州縣に分割するの事務に鞅掌し且之が辭令書をも調製せり。

支丹の前衛は騎兵一萬五千強より成り進で Heilvan に向ひ第二軍之に續けり。時なほ秋の初に過ぎざりしも花刺子模軍が Essed-Abad 山のうちにありしとき偶々多量の降雪あり、人馬爲に夥しく凍死せり。寒威の凜烈なるよりこの困難に遭遇せし後更に土耳其種并にクルド種に屬する諸部族の攻撃を受けて大損害を蒙り全軍殆んど覆没せり。迷信家の以て昊天憤怒の致す所と信ぜしニ、何れも然りこの豫想外の事件は謨罕默德の容易なりと判斷せし企圖をして半途に挫折せしめたり。蒙古強國の勃興より腦中を往來せるの憂慮はハリフハに對するの企圖を飽くまで遂行するを得ざらしめたり。故に Irac-Adjém に滞在せるも唯この大省の政務を規定するに必要な時日にのみ止まり而してこれを皇子屋肯哀丁 Rokn-ud-din Goursaidji の食封となせり。皇子吉

Chah-ud-din Tiz-schah 諸省を得たり。第

皇子只拉兒哀丁忙果必而體 Djélal-ud-din Mangou-birti 土耳其語にて神興の義を有す Mungol は永くなるもの birt 一 yird は興の義也

は哥疾寧 Bamian 郭耳 Post 等諸國を授けられたり、これ皆郭耳王國の故土たり。謨罕默德は

皇子鄂斯拉克沙 Ozlag-Schah を以て皇太子に定め花刺子模、ホラサン、Mazenderan を以て

その食封となせり。この皇子は兄弟中の最年少者なりと雖も支丹の母土而堪哈敦 Turcan Kha-

loune が皇子の生母の土耳其種牙烏脫部 Bayaoutes より出でて同部族に屬するが爲殊に之

を寵愛せるを以てこの意を迎へてこの選定を見るに至りしなり。ニ、ハ、チ、ホ、ヲ参照。

謨罕默德が皇子に分封せる諸省の多くは新に皇威の下に統一せられたるものなれば未だ王朝に對して心服するに至らざりき。花刺子模帝國各地の住民は唯その宗教を等うするのみ、他に一の共通の關係あるなし。而も宗派の異同は同一地方に住する回教々徒の間に絶えず反目の原因を構成せり。多年羈軛の下に馴致されたる住民は謨罕默德の士卒の長劍によりて屈服せしめられたり。這般士卒の多くはその天幕を唯一の故郷とし其家畜を唯一の財産とするの輩にして主としてトルコマン人 Turcmans 并に康里人 Cancalis を以て組織されたり。トルコマン人はセルジウク王朝統率の下にイランを征服せる土耳其種烏古斯部民の後裔なりき。この遊牧民族の體質風俗言語等は氣候の變化并に波斯人民との接觸の結果として多少の面目を更めたるが故に之を爾餘の土耳其種族と區別するが爲に Turcmans と呼ぶに至れり、波斯語にて土耳其人に類似せるものでふ

義なり。康里人は花刺子模湖の北、裏海の北東に當れる乾燥せる平原より起りその王侯の一女が
 謨罕默徳の父と婚姻せるによりて來りて花刺子模國內に定住せり、即ち支丹塔喀施は康里族の一
 派なる巴牙烏脫部の汗、勤克石 Djinkeschi の女土而堪哈敦を娶れるなり。康里人は第十三世紀の初
 には巴牙烏脫部の疆野に
 住しその西隣に同じく土耳其種の欽察人居住せり。この兩部族は蒙古人に征服せられたり。この結婚に次で土而堪哈敦
 の親族なる幾多の康里人の領袖はその部民を擧げて花刺子模支丹の麾下に仕ふることとなれり。
 王妃の信任に加へてその士卒勇敢にして屢々謨罕默徳の爲に偉勳を奏せるを以て這般領袖は花刺
 子模の將軍中にありて第一流の位地に進められ且同帝國にありて至大の權力を揮へり、何となれ
 ば軍隊の首領は各省の政權を委ねられしのみかその權限極めて廣且大なりしを以てなり。支丹の
 政權もこの武人の貴族輩に對しては屈せざるを得ざりき、その忠誠の念慮は覺束なくその歸服の
 状態は常に動搖を免ぬかれざれば、支丹は自尊の精神を抑へてその將軍の野心を満足せしめざる
 を得ざりき。この尙武的部族は依然として北方遊牧民族の殘忍性を保ち、花刺子模帝國にありて
 平和なる人民の禍患となり、その行軍の途上に當れる處は悉く化して廢址となれり。

支丹の生母土而堪哈敦はその部族に出でたる將校の組織せる黨派の首領にして、天稟の材幹又
 卓越せるものありしよりその子と同等なる權力を行使せり。故に帝國の州縣に於て同一の問題に
 關し謨罕默徳の命令と土而堪哈敦の命令とに接し、而してその趣旨相背反する時は、取敢へず先

づその日附を調査し而してその最近のものを施行せり。謨罕默徳の新に領土を占領するや必らず
 その大部を割きて母後の食封に充て以て之を増加せざるを得ざりき。母後は七人の大臣を置きし
 が何れも卓越せる技能を有せる人物なりき。その親ら令旨に署せる華押 (Torigra) には世界并
 に信仰の保護者宇宙婦女の帝王土而堪 Turkan と云へる文字を列ね、その題銘には唯一の上帝
 こそ我安身の基なれと云へる句を用ゐたり。又尊稱として Khoudavend-Djihan の稱號を選び
 しがこれ世界の君主てふ義なり。

支丹母後の權勢甚大なりしことに就きて一條の逸話あり。初め母後の後援によりて Nassir-
 ud-din と稱するその舊僕の一人を宰相の職に登庸せしめたり。支丹はその顯職に最も必要なる
 の性格を缺き殊に貪汚にして數々激烈なる攻撃を受くることあるよりこの宰相を好まざりき。謨
 罕默徳曾て Nischahour に赴き、トギヤ Djend の Sadr-ud-din を同市の法官 Cadihi に任命し、
 且その任命は全く聖旨に出でしものにて宰相に對しては何等の恩惠をも負はざれば敢て音物を贈
 る勿れと之に命令せり。然るにこの法官に向て宰相を輕視し單に支丹の眷遇をのみ恃むは至大の
 過失ならんとて諷示せるものあり。新法官はこの忠告を得て大に驚き倉皇密封せる財囊に黄金四
 千的那を藏めて之を Nassir-ud-din に贈れり。支丹は宰相の舉動を監督せしめしを以て殆んど
 直ちにその事實を採知し、命じて右の財囊を齎らさしめしになほ密封せる儘なりき。その後朝廷

に伺候せるとき、謨罕默德は公然之に向て如何なる音物を宰相に致せるやを問へり。法官は之を致せることなしと答へ、飽くまで之を否認し、支丹に對し大臣には一錢 *Obote* たりとも贈りたることなしとて己が頭を賭して之を誓へり。茲に於て支丹は財囊を齎らさしめしに法官は之を一見するや恐怖色を失へり。法官は直ちに免黜され、而して謨罕默德は宰相の旌旗をその頭上より卸す可しと命じ之に令して保護者の門に歸らしめたり。

蒙古 史
Nassir-ud-din は花刺子模に向て出發せり。沿途宰相に相當するの禮遇を受け政務の裁決を要するものには決定を與へ、何人も敢てその免黜を云ふものなかりき。將に花刺子模に入らんとするや土而堪哈敦は貴賤公私を問はずあらゆる住民に令して之を迎へしめたり。 *Haneh* 派の高僧 *Burhan-ud-din* 後れて來り身體に病あるを述べて辯疏せり、宰相は『これ等寧ろ好意に病あるなり』と云ひて、遅刻を罰するが爲數日の後之に命じて黄金十萬的那を軍隊に納付せしめたり。

土而堪哈敦は *Nassir-ud-din* を以て孫鄂斯拉克沙の宰相となせり、鄂斯拉克沙が食封として花刺子模を得たるは上述せるが如し。宰相はその慣例に忠實にして同省の一收税長官に對し鉅額の誅求を爲せるを以て支丹はトランスオクシアナにありて一人の官吏を派遣し之に *Nassir-ud-din* の首を齎らす可しとの命令を與へたり。支丹母后はその報に接せしを以てこの官吏の來着するや命じて之を謁見室に赴かしめ、既に著席せる *Nassir-ud-din* は支丹の使節として之に敬禮し次

で使節をして余の宰相は唯卿あるのみ、卿の職務を繼續せよ、帝國内にありては何人も卿に服従せざるものあるなく又卿の權威を認めざるものあるなしとの命を之に傳へしめんとせり。官吏は是非なくこの命令を實施せしを以て *Nassir-ud-din* は支丹の反對を排し舊の如く至大の政權を握有せり、支丹の傳記を述べたる *Nessa* の謨罕默德支丹を評して幾多の王侯を剿滅し若くは屈從せしめたる後この主人は一奴隸を罰せざりき。

一 *Irac* より歸りて支丹は *Nischabour* に淹留するいと數週間次で蒲花羅 *Bokhrara* に赴けり。

の馬黑摩特 *Mahmoud* 蒲花羅の阿里火者 *Ali-Khodja* 并に訛脫喇兒 *Otrar* の *Youssouf* たり。使節は蒙古汗に代りて音物を謨罕默德に獻納せり、音物は中央亞細亞の産物より成り即ち銀塊、麝香、硬玉 *Tarcoul* と稱する高價なる白毛の裘これなり。タにこれ白駱駝の毛もて織りその價少くも五十 *dirans* なりとあり *Marco Polo* ぞ *Calacia* 市に於て見 *た* *Zambiloti* と同一物ならん 使節は更に成吉思汗より託されたるの使命を述べて曰く『朕は卿に向て敬意を表す。朕は卿の權威を認め卿の帝國の版圖龐大なるを知る。朕は卿が地球の大部分に君臨せるを識る。朕は卿と平和の關係を結ばんことを切に望むものなり。朕は卿を見ること朕の最愛の子の如くせんとす。卿にありては又朕が支那を征服し同帝國の北に於けるあらゆる土耳其民族をして制令を奉せしめたることを忘れざる可し。卿は知る可し朕が邦家の勇士の聚團たり又

銀鑛たるを、朕は最早他の領土を渴望するの必要を有せず、朕は思ふ我等が我等の臣民の間に通商を奨励するに就きて平等の利益を有することを」と。

成吉思汗が謨罕默徳に向て之を見ること子の如くせんと云へるは即ち實に之に向て甘んじて臣隷たらんことを求めしなり。何となれば亞細亞諸王侯の間に於ける條約は毫も平等獨立の主義に基ける政治上の關係を認めず、父子、兄弟、叔姪等の關係を以て各種服従の程度を指定するの用に供すればなり。支丹は夜に入りて使節の一人馬黑摩特を招きその花刺子模人なるを知れるより之が忠誠を恃み得可しと信ずと云ひ、若し事實を語り成吉思汗の舉動の目的とする所を告げんか恩賞を加ふ可しと約し、更に手纏の寶玉一顆を取り誠實に約束を守るの證として之を與へ、かく

蒙
古

史

て成吉思汗が大賀氏 Tamgadi これ支那のことなり亞利比亞波斯の地理學者は漠然と Tamgadi と云へる地名を用ゐたりこれ思ふに希臘の史家 Theophrastus の Tavgas ならん Tamgadi の支那なることは Klaproth 氏亞細亞雜誌第七冊に之を説けり附記白鳥博士の Tamgadi は元魏の姓なる托跋なりとの創見史學雜誌第十五編第八號に出づ を征服せりとのこと果して信なるや否やを問へり。馬黑摩特答へて曰く『これ何人も偽る能はざる事件の一なり』と。支丹反問して曰く『然るか、朕の帝國の堂々たるは汝の知る所、然らば余を呼で子と爲せるこの無賴漢は何物ぞ、その兵力果して幾何かある』と。馬黑摩特は君王の激昂せるを見蒙古汗の兵力の到底その兵力に比較する能はざるを云へり、支丹は稍々心を静め和協的の回答を與へて三使節を歸戻せしむるの得策なるを思へり。本參

第

編

タルタリーの遊牧民族を征服せる後成吉思汗は從來這般各部族の劫掠的所業によりて惱まされる地方に於て行旅の安全を圖るが爲に參畫し、而して孔道に配置されたる警備隊は外國商人の貴重とするに足るの商品を携へて來るものある時は之を蒙古君王の駐營地に送る可しとの命令を受けたり。哈刺乞憐帝國の滅亡するや謨罕默徳の領土は深く土耳其斯坦の内地に達して蒙古君主に對する朝貢國たる Ouigourie の接壤地と爲り、古出魯黑汗は僅に喀什噶爾、和闐、葉爾羌地方に君臨するに過ぎざりき。支丹謨罕默徳の臣下なる三人の回教徒は絹布棉布を携へて蒙古の境上に至りしが、その一人成吉思汗の面前に召され織物に對して格外の高價を唱へたるより蒙古の君侯は怒てこの男は吾人を以て曾てかかる布匹を見たることなしと思へるなりと云ひ既に蓄へたる夥しき絹布棉布を一覽せしめたり。花刺子模人民が從來數々劫掠せられたる商品の所在かくて始めて明瞭となり而して更に他の二人の同業者を出廷せしめたり。この兩人は豫め好意の忠告を受けたるにより敢て布匹の價を定めんとせず、蒙古汗に對して貢賦として之を齎らせりと述べたり。成吉思汗は之に惜氣もなく代價を給與し最初の商人にも亦之を給し、命を下してこの三人の回教徒を厚遇せしめ、且特待の意を示さんとし之が爲に白氈の新帳幕を建てたり。その出發に際し成吉思汗は一族の王侯諸將軍等をしてその從僕一兩輩に正金を携帯せしめて之と共に派遣し以て花刺子模各地に於て貴重なる産物を購はしめんとせり。何れもその命に従ひて一人若くは二人の

從者を派遣せしかば合計約四百五十人の一隊を組成せり、而して悉く回教徒なりき。この商隊のシル河畔の訛脱喇兒に達せしとき同地の守將にして哈伊兒汗 Cair-Khan と稱せし伊那兒只克 Inaldjouc はその携帶せる財貨を掠奪せんと企て悉くこの行旅を逮捕せしめ、而して謨罕默德に呈出せる報告に於て之を以て成吉思汗の間諜なりとなせり。次で之を死刑に處す可しとの命令に接して即ちその命令を實施せり。へ、チに據る。ホに據るにタルタリーより來りたる商人は僅かに四人にして即ち訛脱喇兒の Omar Khodja、メラガ、Merga の El Dejmal、蒲花羅の Fakhr-ud-Din、ヘラットの Emin-ud-din 等何れも支丹の臣下なり。その通商に關係なきことを知らんとし又訛脱喇兒人に向て東北地方に於て豫期せざるの事件生ず可し採と説きて恐怖の念を起さしむる等のことありしより伊那兒只克之を間諜なりと判じて君主に報告し之を監督す可しとの命を受けしが遂に獨斷を以て之を殺せりと。此說可信。

傳へ云ふこの暴行の報を得るや、成吉思汗は激怒の涙を濺ぎとある山嶺の絶頂に赴き、面を地上に向けて跪き頭に戴ける帽を脱し帶を頸に繋げて復讐の爲に天助を得んことを求め、三日三夜祈禱難行をこととせりと。へ、チに據る。

花刺子模に向て進軍するに先ち成吉思汗は宿仇古出魯克を仆さんと欲し、その間一人の大使を謨罕默德の許に派して報償を要求せり。この使命を託せられたるは波合拉 Basra と呼べる土耳其人にしてその父は嘗て支丹塔喀施に仕へて官吏たりき。この大使は二人の蒙古人を従へて謨罕默德の朝廷に至り使命を傳へて曰く「卿は嘗て弊國の商人は何人をも虐待せざる可しとの保證を朕に向て爲せり。卿は卿の所言を守らず、背信の行爲は君主にありては忌む可きことたり。訛

脱喇兒に於て商人を虐殺せること卿の命令に依れるにあらざること果して信ず可くんば、朕に守將を交付せよ朕之を罰せん、然らずんば交戦の準備を爲せ」と。

假令謨罕默德にして哈伊兒汗を罰し若くは交付せんとするの意志ありしとするも哈伊兒汗は支丹母後の親族にして軍隊領袖中の有力者なりしを以て之を實施するの權力を有せざりしならん。故に蒙古の汗に報償を爲すが如きは思ひも寄らず、波合拉を殺し二人の蒙古人はその鬚を剃りて歸國せしめたり。ホに據る。

この残忍なる行爲に次ぐに更に他の衝突を以てせり。支丹一軍を撒馬爾罕に召集して將に古出魯克に向て進軍せんとせしとき、偶々蔑兒乞人の一隊公子 Touc-Togan の指揮を奉じ、アラル海の北なる康里 Carcalis 國の内地に進軍せりとの報に接せり。謨罕默德はこの外來の遊牧民族を撃退せんと目的を抱きて途を蒲花羅に取りて氈的 Djend に向てその軍を率ゐて進發せしに氈的に於て古出魯克は既に滅びその同盟なる蔑兒乞兵は今や蒙古軍之を追撃中なりとの報告を得たり。茲に於てその引率せる兵力の不十分なるを見、親ら撒馬爾罕に歸り新募の軍隊を得之と共に再び氈的に赴けり。同市より北方に向て進み兩軍を追跡せしが海哩 Carli 哈迷池 Cairmitch 兩河の間に於て死屍の狼藉たる戰場に着し、一人の負傷せる蔑兒乞人を獲て蒙古軍の勝利を博したること并にその既に陣を撤して去れることを知れり。支丹は同一の方向を取りて翌日に追及

し攻撃を加へんと欲せしが、偶々蒙古軍の首領ニホにはこの首領は成吉思汗の長子朮赤なりとありは使節を以て謨罕默德に言はしむらく我等兩國は交戦中なるにあらず余はこの地方に於て花刺子模軍隊に遭遇せる時は友愛を以て之を待遇す可しとの命令を受けたりと。加之、その蔑兒乞兵に對して獲たる捕獲戦利品の一部を支丹に贈れり。謨罕默德はその兵力遙に優勢なりしを以てこの友情敬意の徴證を受納せずして蒙古の將軍に回答して曰く『假令成吉思汗卿に命じて朕と戦ふ勿れと云ひしも上帝は卿を攻撃す可しと朕に命じ賜ふ、朕は邪教徒を滅絶して上帝の眷遇に報いんとす』と。蒙古軍は已むを得ずして干戈を交へしも將に戦勝を博せんとするに至れり、即ち蒙古軍は花刺子模軍の左翼を潰走せしめ謨罕默德の親ら指揮せる中堅を襲撃して突貫を試み之をも亦敗走せしめんとせしに、その右翼にありて勝利を得たる只拉兒哀丁父シエラル、エツチンの危急を見て來て之を救ひ日没まで戦鬪を繼續せる後遂に頽勢を挽回せり。夜に入りて蒙古軍は夥しく火を點じたる後疾驅して退却せしを以て天明に至りては既に行軍二日程の距離を隔てたり。

この會戦は謨罕默德をして蒙古軍の眞價侮る可からざるを知らしめたり、即ちその親近に向ては曾てかかる軍隊を見しことなしと語りしと云ふ。撒馬爾罕に歸るや官爵食邑を與へて諸將の功を賞せり。ニには蒙古の花刺子模征伐は書物に記載するを得ざる他の原因ありと云へり、これハリフハ那昔爾が怒を謨罕默德に報ひんとして蒙古人に幫助を求めたりとの説ならん。同書并にソには共に回教紀元六二二年那昔爾殞落の條に於てその蒙古人に敵を求めたりとのことを記し、前者はこれ最大の犯罪に過ぐるの舉措なりと評し後者はこれ謨罕默德がバグダードを首府となさんとすることを恐れしが爲なりと原因を説けり。

然るに蒙古の君侯は古出魯克死しその領土を征服せる後一二一八年（六一五年）は回教紀元なり之以下做一門并に重臣の總會議を召集し謨罕默德に對して開戦す可しと決議しホ、ヘ、チこの新計

畫を行ふが爲に諸股軍中の章程を規定せり。成吉思汗は蒙古の監治を弟斡赤斤 Djingis に委ねたる後同年の末に當りて進發せり。翌年夏季の間は終始イルチ河畔に駐營して戰馬を休養し秋に至りて進軍を繼續せしに畏兀兒王、阿力麻里王アルマ、マッリ雪格那克的斤 Siknao-Tekin 并に柯耳魯克 Car-Jouks の汗阿兒思蘭 Arslan 等來り會せり。

傳ふる處に據れば謨罕默德は四十萬の大兵を糾合し得たりと云へど、蒙古軍の國境に逼らんとするや痛く不安の念を生ぜり。その兵力は疑もなく成吉思汗の軍に優れりと雖も、花刺子模軍には嚴明なる紀律と君王に對する盲目的服従と困苦勞役戦鬪の習慣とに於て缺くる所あり、而して蒙古軍をして精銳當り難からしむるものは實にこれあるが爲なり。加之、謨罕默德の士卒はその敵兵の如く有力なる交戦の動機を具へず、之が防備を託されたるの人民は全く痛痒相關せざるの他人にして、よし戦勝を博するも得る處又幾何もあるなし。然るに蒙古軍は富裕繁榮なる地方を攻撃するが故に人類貪婪の念慮を刺撃し得可き條件は一として備はらざるなし。この不利を補はんと欲せば謨罕默德たるもの須らく勇氣と材幹とに於て敵將を凌駕する所なくんばある可からず、然るにこの危急存亡の時に際して唯僅に恐怖と優柔不斷とを示せるのみ。即位以來絶えず帝國版

圖の擴張をのみこれ努めしが、今やその權勢の絶頂にあるに拘はらず親ら暴行を加へてその激怒を招ける野蠻なる武將に對し敢て進んで對抗を試みざりき。即ちその軍隊を集注して一大野戰に於て敵軍と雌雄を決するの方略を採らずして、之をトランスオクシアナ并に花刺子模の各城市に配賦し親ら遠く戰地を避けたり。説者或は曰くこの決心に出でたるは將校多數の意見を重んじて之を容れたるが爲なりと、又或は曰くこれ謨罕默德が占星家輩の豫言を信じたるが爲にしてこの輩は星位不可なるものあるを以てその變更するまでは敢て戰鬪を試みて勝敗を決するが如きことある可からずと揚言せりと。一歴史家はこれ謨罕默德が成吉思汗の謀計なりと知らずして軍隊の將校に嫌疑を加へたるが爲なりとて一場の逸話を傳へたり。訛脫喇兒の民にして免職されたる官吏に具鐸哀丁 *Beth-india* と云ふものあり父を始として伯父その他の親族何れも先に謨罕默德が同市を略せる時その命令によりて殺されしを以て歎を蒙古汗に通じ、謨罕默德は人類中最も惡む可きものなれば、生命を賭しても之に復讐せんことを欲すとの意を述べ、その母后との關係圓滑ならざるに乗じて詭計を施さんことを成吉思汗に獻策し、以て謨罕默德をして弑逆の陰謀を企つるものありと信ぜしめんとせり。具鐸哀丁乃ち土而堪哈敦の一族なる將軍等が成吉思汗に宛てたるの偽書を草したり、その文の大意に曰く『我等は部族を擧げて土耳其斯坦より支丹謨罕默德の許に來れるがこれ母后を敬愛するが爲なりき、而して我等は支丹をして幾多の君王に對して勝利を博せしめ、之が領土を以て支丹の帝國を膨大ならしめたり。今や支丹は土而堪哈敦に對して不快を感じ之を待つに恩義を思はず、母后は我等に復讐せんことを望ませらる、我等は唯卿の來るを待つのみ、敢て卿の命令を奉ぜん』と。成吉思汗は故ら敵兵をしてこの書狀を横奪せしめたり。傳へ云ふ支丹この計に欺かれてその將軍を疑ひその奸計を施すに處なからしめんとし、之が部下の軍隊と共に至要の城塞より撤兵せしめたり。ホに據この逸話は頗る信を措き難し、思ふに謨罕默德の將軍は野戰に於て敵と干戈を交ゆるを以て不可なりとせしもの如し。チに據而して支丹自身は疑もなく蒙古軍若し平地の劫掠蹂躪を了らばその掠奪物を携へて退却す可しと信ぜるなり。

第七章

成吉思汗は一二一九年（六一九年）の秋を以てイルチシ河畔を發して大食 Tadjiks 國の攻撃の途に上れり。大食とは邪教徒たる蒙古人并に土耳其人が回教徒を指せるの稱呼なり。シリヤ人往古亞刺比亞

人を總稱して Tavoys と云へりこれシリヤの沙漠に住へる亞刺比亞遊牧民族中の最も勢力ある Tavi 部の部民を指して Tavoys といふその複數なり。カルデア人は之を Tava 上古波斯人は之を Tava アルメニア人は之を Tadjiks と稱せり。波斯トランスオクシアナ地方亞刺比亞回教徒に征服さるるヤシル河々東の土耳其種族は同地方を Tadjiks 即ち亞刺比亞人の國と呼べり。蒙古人も亦之に倣ひて回教徒を Tadjiks 又は Tadjik と稱せり。而して當時の歴史家は大食人と土耳其人とを相對して使用し都會村落の民は土耳其人たると波斯人たるとを問はず之を大食人と總稱し、土耳其種族韃靼種族の遊牧民族を土耳其人と概稱せるが如し。成吉思汗以下の蒙古人も自ら土耳其人と稱し韃靼人と呼ばるるを好まざりき。○チ柯耳魯部の條に成吉思汗その部長阿兒思蘭汗の降を納れたる後暫くして皇女を之に配し且汗號を與ふる能はずとて之をして爾後 Arslan Sirkak (シリヤ人の義) と稱せしめたり。ラシッド曰くシリヤ人とは大食人の義なりと。毫も抵抗を

受けずしてシル河畔訛脫喇兒附近まで進み、遂にトランスオクシアナ侵略の準備を施せり。この地方はオクス河の彼岸に位せるより回教徒は之を Mavera-un-nehr 即ち越河地方と稱せしが即ちこの河流とシル河との間に介在し西は沙漠を隔てて花刺子模と相對せり。上古よりこの地方には土耳其種族の民その居を定め、第八世紀の初に當りそのハリフハの制令を受くるに至るや Mahomet の宗教を採用せり。その都會には波斯人并に亞刺比亞人等の多く來りて之に定住するあり蒙古軍入寇の當時には何れも繁榮の狀態にありき。土耳其種の遊牧民族はその家畜と共にこの地方より裏海までの間に連互せる砂漠的平原を來往せり。

成吉思汗は全軍を分て四隊となせり。第一軍は之を訛脫喇兒の前面に留めて皇子察合台、窩闊台をして指揮を掌らしめ、第二軍は長子朮赤を司令官となして右翼となりて氈的に向て進めしめ、第三軍は左翼となりて白訥克特 Benaket 城の攻撃に向はしめ、この兩翼の兵がシル河畔に位せる各地を陥るるに乗じて軍の中堅を率ゐて蒲花羅に進み謨罕默德とトランスオクシアナ地方との連絡を斷ち之をして包圍を受けたる各城市を救ふによしなからしめんとせり。

訛脫喇兒は包圍を受けたり。同市城并に内堡の防禦工事は倉卒之に修理を加へ糧食は充分に貯へられたり。哈伊兒汗 花刺子模國君は諸將に汗號を與へたり。 は同市にありて多數の戍兵を指揮せしが、更に哈拉札汗 Caradja-khan 一萬の騎兵に將として來援せり。包圍五箇月の後士卒城民と共に意氣銷沈し援軍の將は降參せんと議を起ししも、成將は先にタルタリーより訛脫喇兒に來りたる商人を殺戮したればその到底助命を望み難きを知り死に至る迄君王に誠忠を盡さんと聲明せり。哈拉札はその決心の動かす可からざるを見、暗夜に乗じてその部下の精銳を率ゐて城市を出でたり。この冒險は幸福を齎らさず蒙古軍の捕獲する所となれり。哈拉札はその生命を贖はんが爲成吉思汗の麾下に列りて戦功を立てんことを乞ひしも、兩皇子は既にその君に對する忠誠を盡さざりしもの焉んぞ之を信任するを得んやと答へ、その放棄し來れる城内の形勢に就きて訊問を加へたる後その部

下を擧げて悉く之を屠れり。

蒙古軍は訛脱喇兒を略し住民を悉く曠野に驅れり、これ自由に城市を掠奪せんが爲なり。守將は殘兵を引率して内堡に退き一箇月間防備をこととせり。殆んどその部下の全部を失ひ蒙古軍は進んで内堡に入りしも守將は飽くまでも勇を鼓して交戦を繼續せり。八方より敵兵の肉薄し來るや遂に前部の屋上に攀ぢしに、之に續ける二人の從卒は忽ちにしてその左右にありて戦死したり。既に射るに箭なく乃ち壁の上部にありて侍女等の手渡しせる瓦を取りて之を投げたり而も長く蒙古兵を禦ぐ能はず蒙古兵は之を生擒せよとの命令を受けたりき。故に狂人の如く奮闘し、足下にあまたの敵兵を仆したる後衆寡敵せず遂に捕虜となりて縛められたり。かくて當時撒馬爾罕城外に駐營せる蒙古君主の本營に護送されたり。成吉思汗は之を面前に引かしめ命じて銀塊を溶解してその目と耳とに注ぎ以てその貪婪の犠牲に供せられたる薄命なる商人の殺戮に報復せり。訛脱喇兒の内城は毀たれ、而して蒙古軍は虐殺を免かれたる住民を蒲花羅に向て引率せり。ハ、チ、ホに據る。 訛脱チエン 的に向て進める朮赤はシル河畔の撒格納克 *Sigrao* 市附近に軍を駐め哈三哈赤 *Hassan Hadji* と稱する回教徒を之に遣し命じて之が城門を開かしめんとせり、哈赤とは巡禮の義なり。この回教徒は初め商品を携へてタルタリーに赴き、同地にありて既に成吉思汗に仕へたりき。この使命を帯ぶるや先づ住民に注意を與へその心を靜めたる後之を傳へんと欲せしに、哈三哈赤の

口を開くや否や激昂せる民衆は之を襲ひ上帝の名號を叫びつつ之を虐殺せり。

朮赤は直ちに攻撃の命令を與へ、城市を陥るるまでは一切戦闘を中止することを禁ぜり。新鋭なる兵は代りて疲労せる兵士を休息せしめ撓まず力戦すること七日の後蒙古軍は撒格納克城内に入り住民を擧げて悉く之を屠れり。皇子朮赤は哈三の一子にこの住民を絶滅されたる城塞の指揮を任せ、その進軍を繼續して奧斯懇 *Ozkend* 八兒哈力懇 *Barkhaligkend* 并に遏失那斯 *Esch-nass* を陥れて之を劫掠せり。その訛脱的に逼るやこの境上地方の守將庫特魯克汗 *Coutloug-khan* 庫特魯克は土耳其語にて幸福の義なり。 は夜中城市を出でて、シル河を渡り途を砂漠に取りて兀龍格赤 *Kourkandji* に向へり。朮赤は成帖木兒 *Tchintimour* と呼べる軍使を派して訛脱的に降を勧めたり。時に同市は紛擾その極に達し、住民は守將に放棄されたるを以て各々黨派を樹てて相争へり。成帖木兒の來るを見るや擾亂は益々甚しく人々之を殺さんとせり。使節は撒格納克の先例の悲惨なりしを引證し蒙古軍をして避けて訛脱に入らざらしむ可しと誓へり。この虚妄の約束を得て即ち使節を放還せり。

されど訛脱の住民は忽ちにして敵兵の進み來るを見たり。而も城壁の高きより心竊に恃む所ありしに咄嗟の間に安心の念は變じて恐怖狼狽となれり。蒙古軍は雲梯を樹てて城壁を攀ぢ些の抵抗にも遭遇せずして四方より城内に入れり、住民は悉く野外に驅られしも、而も防禦を試みざり

しを以てその生命は助けられ、唯成帖木兒に向て嘲罵を加へし數人のみ殺戮に遭へり。氈的の掠奪は前後九日に互りしがこの間住民は城内に入るを許されざりき。蒙古の皇子は同地の守將として蒲花羅の阿里火者を止めたり、阿里火者は前年來その父に仕へ上述せるが如く使節の一人として謨罕默徳の許に派遣されたることもありき。朮赤は又一枝隊を分遣してシル河々畔に位し、その花刺子模湖に注ぐの點より二日程を隔てたる隣城養吉干 Yengji-Kend 土耳其語にて新都の義也。 を取らしめたり。畏兀兒部族の軍隊はその數一萬人、朮赤の軍團に屬せしがこの時故國に還るの許可を得、而して朮赤は之に代ふるに新に従軍せしめたる遊牧民族トルコマン人一萬人の一隊を以てしたり。かくて諾延台納爾 Noyan Tainai を將として之を花刺子模に派遣せしに、この兵士は途上台納爾が前衛と共に進みしとき代て本隊を指揮せしめし蒙古の將校を虐殺せしかば、台納爾は倉皇踵を廻らしてその大部分を殺戮せり、而してこの部隊の殘兵は遁れてメルヅ并に Amouye に走れり。

第三軍は阿刺黑 Alac 速客圖 Sougtou 托海 Togai の三將之を統率して白訥克特に向ひしがこの軍團は僅に五千人に過ぎざりき。白訥克特にありし土耳其種康里人の戍兵は三日の後に至りて降服を乞へり。攻撃軍は之が生命を助けんことを約束せしが、その忿々投降し而して白訥克特の住民を市外に驅逐するや、軍人は之を市民と分離し或は劍を以て或は矢を以て之を殺したり。工匠は之を蒙古同業者の許に送り壯丁は夥しく之を引率し、以て攻撃に際して之を使役せんとせり。

この軍團は忽氈 Khodjend に向ひ進軍を繼續せしが之が守備に任せし帖木兒蔑里克 Timour-Melik 剛勇無双の軍人にして への著者はその勇猛を讃え有名なる Rustem 若しその時を同らせば之が外套を捧ぐ可きのみと云へり。 千人の精銳を引率して

シル河中の島に築かれたる堅城に籠れり、その地兩岸を距つること遠く以て矢石の攻撃を避くるを得可し。攻撃軍は訛脫刺兒并にその他の占領地方より蒙古兵二萬土民五萬の援兵を得たり。土民は之を百人隊并に十人隊に分ち、蒙古將校之を指揮して三リーグを隔てたる山嶽より石を運搬し之を河中に投ずるの任務に當らしめたり。帖木兒蔑里克の側に於ては十二隻の被蓋船を造り、攻撃軍より投ずる燃焼物の災禍を防がんが爲に毛氈もて之を覆ひ、その毛氈を包むに粘土と醋とを混淆して之を厚く塗抹したる外包を以てせり。日々この戰船は六隻づつ兩岸に近づき蒙古軍に對してその發射眼より矢を放てり。蒙古軍は夜中數々帖木兒蔑里克の襲撃に遭ひ之が爲に損害を蒙ること大なりき。而も奮闘その效なく窮境に陥るや帖木兒蔑里克は夜に乗じて士卒と輜重とを七十隻の船舶に載せ、自ら軍隊中の精銳と共に被蓋船に乗り、その點ぜしめたる炬火の光輝を便として河流を下れり。この船隊は蒙古軍が白訥克特附近に設けたる鐵鎖を容易に切斷して流に隨ひて航下を繼續せしが、兩岸の敵兵は絶えず之を追躡せり。然るに帖木兒蔑里克は皇子朮赤が氈

的の附近に於てシル河の兩岸に大部隊の兵力を配置し弩砲を据付け船橋を架して河流の通航を阻むを聞くに及び船を棄てて馬に乗り。蒙古兵の追撃を受くるや止まりて之と戦ひ以て輜重をして前進せしめたり。この戦略を反覆すること數日間その少數の兵力は益々減少し遂に輜重を委棄するの止むを得ざるに至れり。次第に部下の士卒を失ひ盡せし後單騎敗走せしに蒙古兵三人の逼り來れるあり、而も僅に三本の矢を剩せるのみにしてその一は鏃を失へり、乃ち最も接近せる敵騎を射てその一眼を貫き、之と同時に他の二騎に向て我になほ二本の矢あり背進して命を全うせよと叫びしに敵騎恐れて走れり。かくて帖木兒蔑里克は花刺子模の城市に着し次で只拉兒哀丁の麾下に加はりその最後まで之が左右を離れざりき。

この間蒙古の君主は皇子拖雷を伴ひ蒲花羅に向て途を取れり。賽兒奴克 Zernouc 市の住民はその近くを見るや皆之が堡壘に據れり。成吉思汗は侍從丹尼世們 Danischmend を派遣して之に降服を説諭せしめたり。この軍使は狂暴なる兵士の脅逼に遭ひ叫で曰く『余は回教徒にして回教徒の子なり。余は成吉思汗の命を受けて來り卿等を奈落の深淵より救はん」とす。成吉思汗は今や重兵を擁して逼り來れり、卿等若し些かたりとも抵抗を爲さば卿等の城塞家屋は咄嗟の間に滅却し盡されん、卿等若し降服せば生命財産を全うするを得ん』と。この遊説は深く住民に感動を與へしを以て、住民は直ちに音物を携へたるの使節を蒙古汗の許に派遣す可しと決議せり。賽兒

奴克の官吏輩が親ら來りて忠誠の意を表せざるを怒りて成吉思汗は人をして之を搜索せしめしよ、官吏等は戰慄しつづ來りしも而も酷待を受けざりき。住民は市外に出づ可しとの命令に接したり。壯丁は之を收めて一隊を組織し、以て蒲花羅包圍の時に使用することとなし爾餘の住民はその家庭に歸るを得しめたり。堡壘は勿論毀たれたり。

同地よりトルコマン人の一嚮導蒙古軍の先頭に立ち、人跡稀なる通路によりて奴爾 Zour 州に向へり。前衛の將塔亦兒把阿禿兒 Tair-Balator 軍使を奴爾市に遣し約束脅逼の慣手段を用ゐて之を降服せしめんとせり、住民は如何なる方針を選む可きやに付きて踟躕せしも、再三使節を受けたる後その城門を開けり。塔亦兒は兵をその前方に進め、市民は代表者に進物を齎らさしめて成吉思汗の許に派せしに、成吉思汗は將軍速不台 Souboutai を同市に赴かしめたり。速不台は住民に向てその生命を全うするを以て満足せざる可からざること、その家畜と農具とは之を沒收せざる可きこと、而も一物をも携帶せずして市外に出づ可きことを稟告せり。城市の明渡さるるや蒙古兵は之を劫掠せり。成吉思汗次で同市に至りて幾何の租税を君侯に納付し來りしやを住民に向て訊問せり。答へて曰く千五百的那 dinars と。乃ち之を前衛に納付す可きを命じ更に誅求する處なかる可しとの保證を與へたり。婦女子の耳環のみにて立るにその半額を得たり。

纏て (同曆六一七年一月西) 成吉思汗は進んで蒲花羅 ボクハラ へに Bokhara の名はゾロアスター僧侶 magé の語にて學問の中心てふ意義を有する Bokhar に出でたり、此語は畏

兀兒支那の偶像信者（即ち佛教徒）がその寺院に與ふる Bokhar の語と全く等し。されどこの市創建の時代にはこれを *Met*、*Kash* と呼べり。 Ebn Haoucal の頃は蒲花羅は内城一平方 *farsak*、外城十二平方 *farsak* を有し *Sogd* 河郭外を流れ附近の地方極めて肥沃なりしも住民の生計に資するに足らざりきと。

に逼れり。その軍隊は來着するに従ひて各々陣地に就きてこの大都を圍めり、城内の守備隊は二萬人を數へたり。撓まず之に攻撃を加ふること數日間に互りし後、終に守備隊の諸將は到底之を保つ望なきを見、相議して夜に乗じて全軍開城突撃を試み以て敵兵の圍を破りて脱走せんとし、この計畫を實行せり。蒙古軍は不意に激烈なる逆襲を受けて背進せり、然るに花刺子模兵の將軍は之を追撃して大敗を蒙らしむるの策に出でずして、唯脱走してその命を全うすることをのみこれ計れり。茲に於て蒙古軍はその陣形を整へて敵兵を追躡し、アム河の河畔に於て之に追及しその士卒を擧げて之を鏖殺し了れり。

蒙 古 史

翌日蒲花羅より式僧 *Imans* 并に名望家を以て組織せる使節來りて蒙古汗に忠誠の意を表せり。成吉思汗は市内を見物せんと城内に赴き大回教寺院の傍を過ぐるや馬上之に入り、その支丹の宮殿なるやを問ひ、これ上帝の殿堂なりとの答を得たり。祭壇の前に至りて下乗し説教壇に二三步昇りて叫で曰く野外は劫掠し了れり、我等の馬匹に飼料を與へよと。人々は乃ち穀物を索むるが爲に市中の倉庫に赴けり、蒙古兵は經典 *Courans* を藏めたる箱を寺院の庭に運び來りて以て馬槽となし、回教徒の神聖視せる書籍は馬蹄の下に蹂躪されたり。野蠻人はその酒を盛れる革囊を回教寺院の内部に竄らし市内の幫間歌妓をして席に侍せしめ、その高聲國歌を謠ふの聲は四壁に反響せり。而して蒙古人が快樂放逸に耽るるとき、明法博士高僧等重なる市民は奴隸として之に服従しその馬匹を護れり。

一二時の後成吉思汗は市外に出でて禮拜之原に赴けり、同地には曩に成吉思汗の命令ありしを以て蒲花羅の市民雲集し來り數時間に互りて共に祈禱を行ひ莊重にその時を過せり。成吉思汗は説教壇に登りてこの群集のうちにおいて最も富裕なるは何れの人々ぞやと問へり、應ふるもの二百八十人を擧げしがそのうち九十人は外國人なりき。成吉思汗は之を傍に招きて諭告する所ありき。先づ支丹が敵對の行爲に出でたるが爲、之に對して干戈を取るの止むを得ざるに至りたりとの事情を述べたる後曰く『知れ卿等の大過失を犯し人民の領袖が最大の犯罪者たることを。卿等若し朕に向て如何なる根據ありてかこの告諭を爲すと問はば、朕は即ち上帝の答なりと答へん、卿等若し至大の罪人ならずば上帝は敢て朕を卿等の頭上に尙へざらん』と。次に言を添えてその地上にあるの財寶は之を發見するに容易なれば、その交付を要求することなかる可きも、その地下に埋藏せるものは之を申告せざる可からずと云ひ、命じてその執事を指定してその主人の貨財を交付するの任に當らしめたり。這般の富豪輩には何れも蒙古兵の監視を附し、毎日出るとともに成吉思汗の轟下に召集せり。

守備隊の開城突撃を試みしとき、共に城外に出づること能はざりし花刺子模騎兵四百人あり内

城に立て籠れり、蒙古軍は乃ち之を攻撃するの準備を爲せり。蒲花羅^{ボハラ}市に告示して兵器を帶せるものは悉く出頭す可く拒むものは死刑に處す可きを令し、この住民をして内城の塹壕を填充せしめたり。次で弩砲を装置しこの兵器によりて城壁に破墻口を生ずるや、蒙古兵は城内に進入し一人をも剩さず守兵を殺戮せり。この孤弱なる戍兵は勇敢に防戦すること十二日間、蒙古兵并に包圍の事業に驅使されたる住民の多數を仆したり。二に據る Ebu ul-Ethir は野蠻人が聖塚を填むるに説教壇、人を屠り、中に門地高きもの少からず女子小兒を奴隷とすとあ

聖書等を用ゐたりとて之を痛罵せり。へには内城に於て三萬人を屠り、中に門地高きもの少からず女子小兒を奴隷とすとあ

れどこれ例の誇張の言なり。二の時人の記事なるに如かず。

内城陥るや蒲花羅の住民に向てその身に纏へる衣服の外一物をも携へずして出城す可しと命ぜり。かくて住民の撤去するや、蒙古兵は城内に入りて劫掠を縦にし禁を冒して出城せざるものは悉く之を屠れり。最後に蒙古兵は蒲花羅の住民を圍みて之を分配す可しとの命令に接したり。史家 Ebu-ul-Ethir 曰く『これ恐る可きの日なりき。その耳にする處は唯男女老幼が永別を悲みて歎歎啼泣するの聲あるのみ。野蠻人等はこの薄倖の徒の面前に於て敢て婦人の貞節を冒せしも婦人はその蒙れる屈辱を排斥するの力なく唯悲鳴を放て之を悲めり。この恐怖す可き光景を見て親ら進んで死地に就けるもの又少からざりき。即ち法官 Cadi Bedr-ud-din 并に式僧 Imam Rokn-ud-din 父子の如きはその妻女の辱めらるるを見て奮闘敵の殺す所となれり』と。富豪は之を拷問して強逼的にその財産を蔽置せるの地點を白白せしめ、結局蒙古兵は市内各方面に放火

せしに、木造家屋多きを以て大回教寺院その他煉瓦にて建築せる少數の大厦を除くの外全市延焼せり。二に據る。へには支丹の士卒をして市外に去らしめんとせし

に之に應ぜずして抵抗せしより爲に市内に放火すとあり。

成吉思汗は煙烟の高く揚れる蒲花羅^{ボハラ}の廢址を後にして僅に五日程を隔てたる撒馬爾罕に向ひ、滿地これ花園、果樹、美草、別墅を以て覆はれ征客をして恍惚たらしむるが如き Sogd 河の流域にその兵を進めたり。若干の兵を留めて途上に横はれる Deboussiyé 并に Sertel 兩城を圍ましめ遂に撒馬爾罕に逼れり、蒲花羅の住民の捕虜となれるものは此大都の攻撃を助くるが爲に之に従ひしが、沿途數々虐待を蒙り疲勞の極前進する能はざるものは殺戮せられぬ。二に據る 支丹は土耳其人波斯人を合せて四萬の守備兵を撒馬爾罕に置き、之を指揮せるの將軍はその粹を集めたり。ホに據る。へには守兵十一萬内土耳其人六萬にして大食人即ち波斯人五萬なりとあり。チも之に等しけれどチ 城市の蒙古兵トランスオクシアナ侵略の記事はへをその懲罰用せるに過ぎず。二にはこの守兵を五萬となせり。 殊にその内城の築城工事は修築を加へ且大に増築されたり、撒馬爾罕は防禦の準備整ひたれば能く長圍に堪へ得可しとは一般の信ずる處なりき。かくて成吉思汗も亦之を攻撃するに先ち附近の地方を悉く占領し了らんとせるなり。既にして他の三軍も亦トランスオクシアナ北部の征服を了りて同市の附近に來會し且最も兵事に適したるの人民を伴ひ來れり。成吉思汗は之を騎兵の先頭に立たしめたり、歩兵と捕虜とは翌日を以て都城の前に現はれたり、捕虜は十人毎に一旒の旗を携へたり。この群衆の相繼ぎて來着せるは成吉思汗が被攻圍軍をしてその見る所悉くこれ戰鬪員

なりとの想像を起さしめ以てその恐怖心を大ならしめんと欲せしが爲なり。蒙古の君主は最初二日間都城を巡視してその築城工事を査察せり。第三日の朝新徵發軍と蒙古の軍隊とを前進せしめしに、市民中の勇敢なるものは隊伍を整へ開城突撃し來れり、されど花刺子模の士卒は敢て蒙古軍と會戦するを欲せずして之に援助を與へざりき。蒙古兵は徐に背進して熱心に追撃し來れるこの歩兵の一隊を伏兵ある地點に誘ひその全部を襲殺せり。二に據る。但しへには成兵花刺子模將軍の命を受けて激烈なる突撃を試み交戦夕に及び捕虜を獲て城内に退却せしむるも千人の損失を受くもありこの戦敗の結果被攻圍軍は意氣全く銷沈せり。戍兵の大部分を組成せる康里人は土耳其種に屬するを以て蒙古人より同胞たるの待遇を受く可しと信ぜり。成吉思汗は實に之を麾下に従軍せしむ可しと約せり。茲に於て康里人はその家族と輜重とを携へて城を出でたり。

包圍の第四日に於て將に強攻を加へんとする時都城の法官 *Cadhi* と教務長官 *Moutti* とは、明法博士を從へて成吉思汗の本營に赴き満足す可きの誓約を得しかば、撒馬爾罕の城門は乃ち開かれたり(回曆三月、西曆四月)、壘壁破壊の工作は直ちに開始せられたり。住民は強制的に出城を命ぜられ、何人にもあれ留まるものは之を殺す可しと令せり。但し法官、教務長官并に之が隨從は特に例外の待遇を受けしがその數極めて多く即ち之に護衛を附せり。へによればこの二人の官吏の隨從若しくはそのありしものはその數五萬に達すと云へりかくて蒙古兵は城内に闖入して掠奪を縱にし潛みて城外に出でざりし多數の住民を容赦なく處分せり。

撒馬爾罕陥落の夜阿兒撥汗 *Aib-Khan* と呼べる土耳其種族の一將軍千人の兵を率ゐて内城より出で、首尾克く蒙古軍の圍を破りて往きて支丹の麾下に合せり。攻撃軍は天明より内城の四方を同時に攻撃し、夕に至りて遂に之に進入せり。勇猛の士千人回教寺院に籠りて頑固に防禦を試みしが蒙古兵は之に火を放てり。

次に降服せる康里人は之を波斯人と離隔しその馬匹と兵器とを沒收して平原中の一區域に集合せしめたり。蒙古人の習慣としてその旗下に收めて従軍を許可せる外國軍隊をして蒙古の風俗に倣はしむるが故に、康里人をして前頭部の髮毛を剃りて蒙古人の如く辮髮を結ばしめしが蒙古人の髮のことに付きては *Du Plan Carpin* 參照。これ唯その剿滅を行ふ可しと定めたる瞬間まで之を安心せしむるの策に過ぎざりき。その夜康里人三萬は領袖巴力世瑪思汗 *Barischmar-khan* 托海汗 *Togai-khan* 薩兒賽特汗 *Sarssig-khan* 烏拉克汗 *Oulag-khan* 以下二十人餘の將軍と共に悉く虐殺せられ、その馬匹家族輜重は戦勝者の鹵獲品となれり。

撒馬爾罕の住民は夥しく斬殺されたり。残れる人民のうち就きて工藝家職工三萬人を抜き成吉思汗は之を皇子王妃將校等に進物として分配せり。兵役に徵發せられたるもの亦之と同數なりき。剩す所の捕虜約五萬一千は黄金二十萬的那の贖償金を得て都城に歸るを許可せり、但し都城の政治を行ふものは勿論蒙古人なりき。撒馬爾罕新徵兵の一部は成吉思汗親ら之を率ゐてアム河

を越え、他の一部は花刺子模に向て派遣せる皇子の軍に屬せしめたり。その後壯丁の徵發は幾度か行はれ、この不幸なる兵士の内その歸國せるは極めて少數なれば、撒馬爾罕省は殆んど全然無人の境とならんとせり。へ、チ、ニに據る。

撒馬爾罕に軍用に供する二十頭の象ありて支丹の所有に屬せしが、その看守に任じしもの之を成吉思汗の許に牽きて之が飼養の費を辦せんことを乞へり。成吉思汗はその捕獲せらるる以前は如何にして生活せしやとて之を知らんと欲せしを以て、象を看守せる者はその牧草を食せる旨を奏上せり。かくてこの動物を野に放てとの命令は與へられ、象は何れも飢えて死せり。

初め撒馬爾罕城外に達するや成吉思汗は謨罕默德に對して二軍を分遣せり、兩軍何れも一萬の騎兵より成りその一は別速特氏出身の諸延哲別之を指揮し、その二は *Oriangute* の速不台把阿秃兒之に將たりき。その之に與へたる命令は直ちに支丹に向て進みその重兵を擁するを見れば戰鬪を避けて大軍の來着するを待ち、之に反して謨罕默德若し背進せば息をも呉れず追撃す可く、服従せる城市は容赦を與へざる可からずと雖も、その抵抗を試むる者は之を滅却す可しと云ふあり。

蒙古軍がトランスオクシアナを蹂躪するや、謨罕默德は恐れて戰地に近かずその神氣の沮喪せる有様は人民の間に知れ渡れり。撒馬爾罕の内城を修築しその塹壕を延長して河流に達せしめし

が之が工事中一日その傍を過ぎしとき、韃靼兵は頗る夥しきを以てその鞭を投ずるのみにて能くこの塹壕を填むるを得可しと云へり。蒙古兵のトランスオクシアナ内地に進入するや謨罕默德は撒馬爾罕を棄てて途を *Nakhsheb* に取れり。その通過せる各地の住民に向て王師は敢て人民保護の任に當るに堪へざれば須らく各自その安寧を圖る可しとの旨を説諭せり。左右に侍せる宰相將軍に對して一々如何なる方略を取る可きやを諮りしが、その意見區々に岐れ却て支丹の優柔不斷を助長せるのみ。さりながら老功の將校は最早トランスオクシアナを救ふの時日なきを以て全力を注ぎてホラサン并に *Irac* の保全を圖る事となし、各地に配置せる軍隊を悉く召還して一軍團を組成し、回教徒に向て全擧兵の令を發しアム河の戰線を防禦せざる可からずと論ぜり。或は謨罕默德に強ゆるに哥疾寧に退却し同地に於て韃靼兵に對抗せる諸軍を糾合す可しとの策を以てし、萬一武運拙くば以て印度に奔るを得可しと説けり。謨罕默德はこの獻策の最も慎重なるを嘉納して哥疾寧街道に由て進みしが、バルクに於て宰相 *Amad-ul-Mulk* の來るに會ひその意見に従ひて方略を一變せり。 *Amad-ul-Mulk* は支丹の皇子 *Irac-Adjem* の太守なる屋肯哀丁の首相なり、太守が首相を父王の許に派遣せしは表面この危急の場合に際して有用のことある可しと云ふにあるも、その實首相の左右に侍する時は太守は虚器を有するに過ぎず而も首相は謨罕默德の信任厚きより之を敬重せざるを得ざるの事情あるを以て、之が掣肘を脱ぬかれんとして